

* 0056822000 *

0056822-000

393.2-F88ウ

独ソ戦線2000軒

舟橋茂・著

成武堂

昭和17

AJD

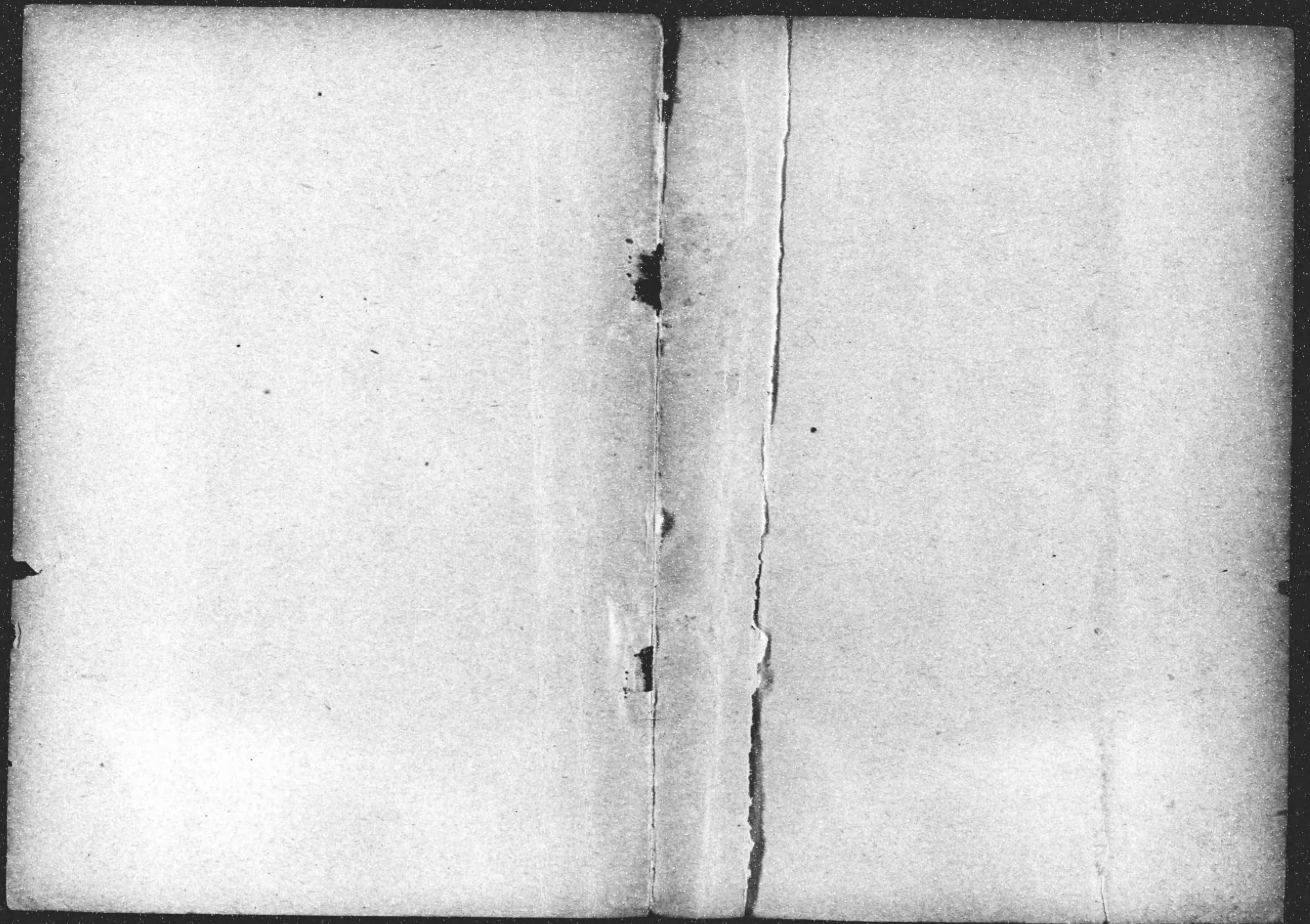
獨ノ戰線 2000軒

393.2
F58

大東亞戦争とソ聯の動向



陸軍大佐 舟橋茂著





393.2

舟橋 茂 著 F88

獨ソ戰線
2000 軒

附 大東亞戰爭とソ聯の動向



東京 成武堂 發行

獨ソ戰線二千軒 大東亞戰爭とソ聯の動向 目次

獨ソ開戦の経緯……………

- 一、獨逸はソ聯に何故開戦したか…………… 一
 - 二、露骨極まるソ聯の背信行爲…………… 四
 - 三、伊、羅、芬の三ヶ國も對ソ宣戦布告…………… 八
 - 四、ソ聯外相モロトフの聲明…………… 九
 - 五、獨ソは所詮は犬と猿…………… 一〇
 - 六、獨ソ國境に於ける兩軍の對峙と一觸即發の危機…………… 一二
 - 七、獨ソ國境兩軍の凄愴は日増しに殺氣を帯ぶ…………… 一四
 - 八、獨逸がソ聯に奮然飛びかゝつた眞の目的…………… 一五
 - 九、獨ソ兩軍の陣容…………… 一七
 - 一〇、獨ソ兩軍各司令官の横顔…………… 一九
- 獨ソ兩軍主力決戦の跡を顧みて…………… 一九
- 一、傳統的な獨逸の電撃戦…………… 一九

二、獨ソ兩軍野戦兵力の比較……………三〇

三、兩軍の科學兵器の裝備……………三七

四、卓越せる獨軍の統帥と不意を喰つたソ軍の統帥……………四三

開戦劈頭ソ軍は獨軍の陥穽に落ちて捕捉殲滅せらる……………四六

一、獨逸作戦の妙……………四六

二、獨軍の注文通りに包圍殲滅戦は完遂された……………五〇

三、興味ある大戦車兵團の死闘戦……………五二

四、ソ聯の創造した「走る砲臺」の猛威力……………五三

五、赤軍は果して對獨戦備が出来てゐるか……………五六

一舉にモスクワ攻略を略を目ざす獨逸軍の進撃……………六七

第一期作戦……………六七

一、獨逸空軍の疾風の奇襲戦……………六九

二、沿バルト海を進撃した左レープ元帥集團軍の戦果……………七一

三、獨主力軍たるポツク元帥麾下中央軍スターリン戦へ進撃……………八五

四、スターリン様の正體と其の價値……………九八

第二期作戦……………一一

一、獨逸中央軍(ポツク集團軍)の進攻……………一一

二、南方軍ルンドシュテット元帥麾下軍のウクライナ進撃……………一三

三、北方集團軍レープ軍のレニングラード肉迫戦……………一六

第三期作戦……………一三

一、南方軍(ルンドシュテット軍)の攻略戦……………一三

第四期作戦……………一四

一、獨逸中央軍のモスクワ進攻戦……………一四

二、ヒトラー總統對ソ戦に嚴乎たる所信大獅子吼……………一六

三、獨南部方面軍の戦況と赤軍主力の潰滅……………一七

四、北部戦線レニングラードの攻圍戦……………一七

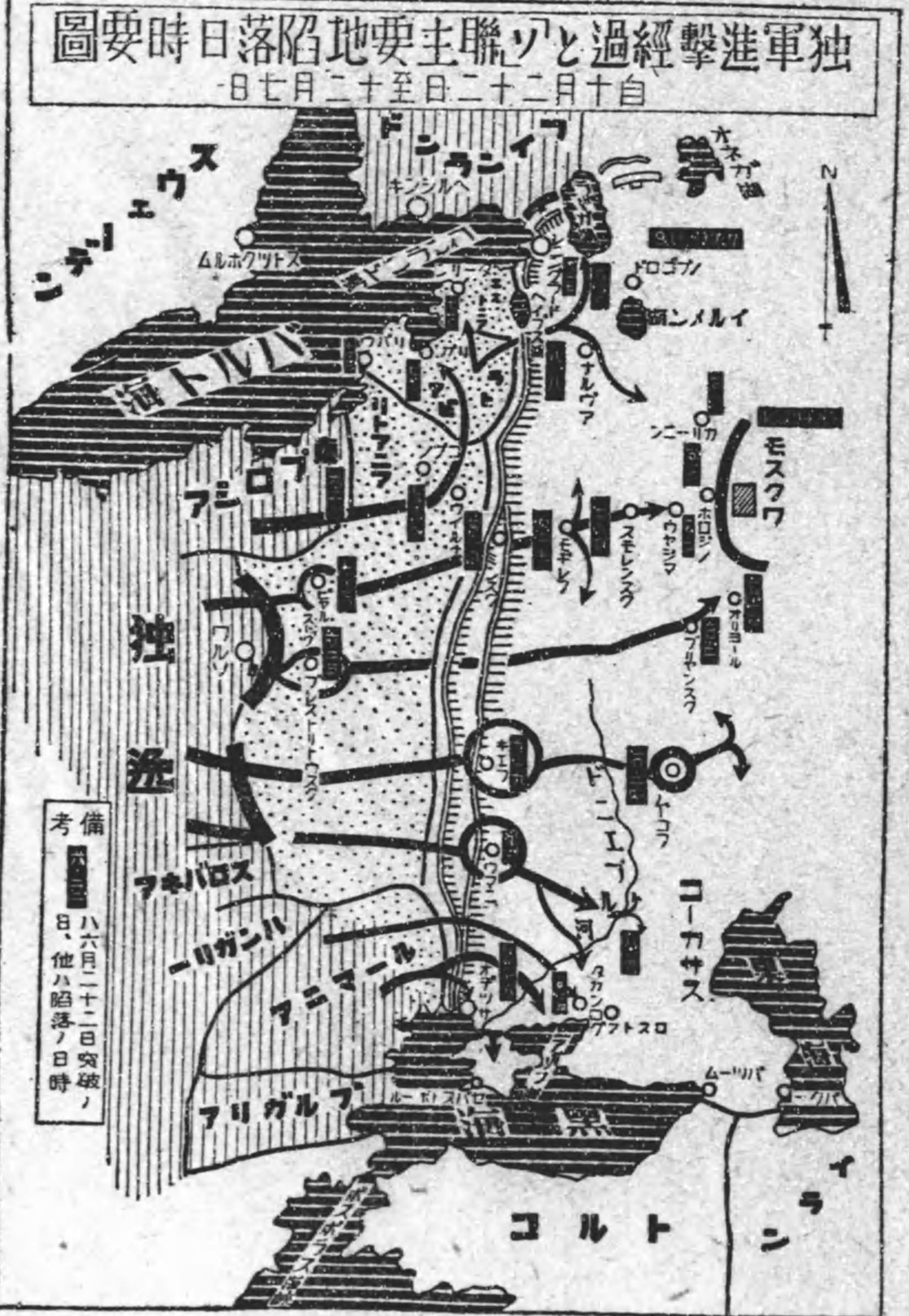
第五期作戦……………一九

一、ヒ總統の總進撃命令は下令せられた……………一九

二、開戦以來五ヶ月の戦果と嚴冬直前兩軍の攻防態勢の展望……………二〇

三、十二月八日、獨逸東部作戦休止を聲明す……………二三

四、獨逸が赤都占領を急がず冬季休戦状態になつた真相……………二四



五、獨逸の春季大攻勢は大東亞戰に如何に呼應するか……………三六

敗退後のソ聯と米國の動向……………三五

- 一、歐露撤退後のソ聯は存在するか……………三六
- 二、ソ聯軍の抗戦力は如何……………三四
- 三、東部シベリア軍(滿ソ國境附近)の解剖……………三四
- 四、東洋に於けるソ聯海軍の現状……………三六
- 五、ウラル以東の資源と重工業力……………三六
- 六、シベリアの交通機構……………三七
- 七、バイカル湖以東の情勢(東シベリア)……………三七
- 八、綜合力から見たシベリアの力……………三五
- 九、日米戦争とソ聯の立場……………三六
- 一〇、米の太平洋作戦と東部シベリアの價値……………三九
- 一一、米が對日攻勢を企てるとすれば東洋進攻路をどうとるか……………三九
- 一二、北太平洋の進攻ルートとソ聯領カムチャツカ半島……………三九
- 一三、濃霧の蔭に蟠るアリユートシヤン列島の對日攻勢準備……………三〇

獨ソ戦線二千料 大東亞戦争とソ聯の動向

獨ソ開戦の経緯

ナチズム、共産主義の決戦

獨逸はソ聯に何故開戦したか

一昨春以來頻りに獨ソ關係の悪化が傳へられてゐたが、獨は遂にソ聯に對し六月二十二日午前五時三十分突如として宣戦を布告した。伊も獨の宣戦布告に呼應して、同日同刻に同様宣戦を發布し、恰度ナポレオンの大軍團がニールメン河を渡つて露領に進入してから將に百三十年振りである。獨當局の言ふ「從來會て見られざる大作戦」を東方に展開し、直ちに戦争状態に入つた。これこそは、ナチ勝つか？ 共産勝つか？ の分岐點であつて、世界の耳目を奪つた一戦であつた。

獨軍は電光石火の早技で其の日拂曉、空軍はまづソ聯領エストン・ツイトミール（モスクワ南方七十哩）、キエフ、セバストポール（クリミア半島の軍港）の各要衝に猛爆撃を加へ多數の死傷者を出した。



他方ソ聯國境に満を持して待機中であつた獨精銳軍は、ヒ總統の進撃命令一下、廿二日夜半より獨ソ國境の各所より雪崩れを打つてソ聯領に進撃を開始した。かくて戦火は北方フィンランドより南方ルマニア、黒海に至る二千五百軒に燃え擴がるに至つた。

さきに對波蘭戰爭の直前に英、佛、ソの軍事會議が進捗し、世界の國々はこの三國が波蘭を援助して獨逸に對抗するやうに豫想してゐたところ、昭和十四年八月二十二日、突如として獨ソ不可侵條約が發表された。これは正に青天の霹靂であつて全世界をして呀と言はしめたものである。

當然英、佛兩國は愕然として色を失ひ、一時茫然たる裡に獨ソの外交政策は着々として友好關係を強化し、一舉にポーランドを屠り鋒を轉じて諾威を略し、英、佛軍を西歐戰場に粉碎し、バルカンを席卷し、戰爭を有利に展開し得たが、獨逸としてはその爲にかなりソ聯の横暴飽くなき領土慾の跳梁跋扈に多大の犠牲と忍従をせねばならなかつた。

即ちソ聯がバルト海沿岸諸國を其の保護下に入れ、フィンランド領の一部を分割し、ポーランドに於ては白ロシア、ウクライナを回收し、ルマニアに於てはベッサラビア、ブコヴィナを占據した。かかるソ聯の行動は獨逸のみならず伊太利にとつても、深刻なる利害の對立を生んだのであるが、獨伊はソ聯との友好關係維持のためこれを默認せざるを得なかつたのである。

その後戰爭が發展するにつれ、獨伊とソ聯との利害關係は種々の問題をめぐつてますます對立を激化するに至り、獨ソ間には險惡な底流が渦巻いてゐたのであつた。

其の二、三の例をあげて見ると、獨逸が諾威へ派兵のため、フィンランド領土内の軍隊通過を容認せしめやうとするやソ聯は極力之に抗議した。バルカンに於てはソ聯の反獨的態度は極めて露骨に現はれた。それは獨逸のブルガリア進駐に際して、ブルガリア政府に對し抗議的通牒を發して其の行動を拒んだのである。又ソ聯は獨伊がユゴスラヴィアとの開戦直前に當つては、頻りにユゴスラヴィアと友好條約を結び、其の上ユゴの反獨的態度に激勵を與へて煽動し、挑戰的行爲をとらしめたのである。

更に獨逸がブルガリアに進駐直後、ソ聯は土耳其との友好關係を再確認し、土耳其が第三國の侵略を受けた場合、ソ聯は土耳其の爲好意的中立を維持すべき旨の聲明を發した。

これ等の事は獨逸が近東攻略を見越し、豫めこれに備へんとの意圖に出たことは明らかであつて、しかも獨逸の對土外交は著々成功を收め、其の兩國間に友好條約の成立を見るなど、一見皮肉な現象を呈したと共にソ聯をしていたく其の神經を惱まさしめ、獨逸に對して一層不安を増大せしめたのである。

二、露骨極まるソ聯の背信行爲（獨外相覺書にて發表）

四

リツベントロツプ獨外相は六月二十二日早朝、駐獨ソ聯大使デカノゾフ氏に對し、獨逸政府の公式覺書を手交し、獨逸が軍事的措置に出るに至つた事情を通告した。その内容は左の通りである。

(一) 獨逸國政府は國家社會主義とボルシェヴィズムとの對蹠的世界觀から生ずる決定的な對立を捨て、一九三九年、ソ聯邦と圓滿な理解に達すべく工作を開始した。一九三九年八月二十三日及九月二十八日の諸條約に基き、獨逸政府はその對ソ政策を完全に變更し、爾來ソ聯に對し友好的態度を持つて來たのである。そしてこの獨逸の善意的政策のため、ソ聯は外交上種々の大成功を収め得たのであつた。

獨逸國政府は、將來獨ソ兩國民は、各々その政體を尊重し、相手國の對内的事象に干渉せず、永久的隣人關係を保持するものと當然想像し得ると考へた。然しながら遺憾極まることに獨逸政府はこの想像に於て根本的に裏切られたことが急速に分つたのである。

(二) コミンテルンは既に獨ソ諸條約の締結を見るや直ちに對獨破壞工作を開始し、その際ソ聯の公官はこれを援助したのである。すなはち大規模のサボタージュ、暴力行爲及戰爭が準備され、政

治、軍事、經濟各方面にスパイ行爲が行はれ、獨逸に隣接するあらゆる國及獨逸軍占領下にある地域に於ては獨逸に對抗する挑發を爲し、さらに歐洲に鞏固な新秩序を建設せんとする獨逸の工作を妨害したのである。

例へばソ聯參謀總長は自發的に獨逸に對抗するため武器を提供した。これはその後發表された文書によつて明らかである。ソ聯が獨逸との諸條約締結の際發表した獨逸と協力せんとする意向を述べた聲明は、明かに獨逸を誘惑し欺瞞しようとすることを實證した。

條約締結はソ聯に有利な協定を結ばんための巧妙なる作戦であつた。ソ聯外交政策の根本思想は現今に至るまで、諸國をより容易に破壊し、適時に撲滅せんとするにあつたのである。そして未だボルシェヴィズム化せぬ諸國を弱體化してこれを亡さんとする事を目標としてゐた。

(三) 外交、軍事方面で明瞭になつたソ聯は諸條約締結に際して、その利害圈に於ける諸國をボルシェヴィズム化せず、又併合するものに非ずと保證したにも拘はらず、その軍事的勢力を及ぶ限り西部方面へ移動し、且遠く歐洲にまでボルシェヴィズムを及ぼさうとする野心を有してゐたのである。

バルチック諸國及芬蘭にまで侵略して、獨逸を直接脅威し、五十萬にのぼる我が同胞はその土地

と家とを捨て國境を越へて我が國內に追はれて來たのである。ソ聯の要求は飽なき要求であり、更にプロヴィナ及びルーマニアへも進駐したことは、これ又ソ聯の意圖を明かに裏書するものである。

ソ聯はその保證せる利害圈を占領し、又ボルシェヴィズム化することは明らかにモスクワ協定に違反したものであつて、獨逸政府はこの様な創造された事實に依つて釣られたのであつた。

(四) 獨逸が東南歐洲に於てソ聯の對ルーマニア進攻により、原因された危機を一九四〇年八月二十日のウイナ調停會議に於て打開した際、ソ聯は異議を申立て、その上凡ての方面に於て積極的軍事準備工作を施すに至つたのである。

獨逸外務大臣とスターリン氏との間の交換文書中及モロトフ氏を伯林に招いた時にも分るやうに、獨逸は再度理解に到達せんことを努力したが、これは却てソ聯の對獨要求を硬化せしめ、そしてこの要求は獨逸の容認し得なかつたものである。

その要求は例へばソ聯がブルガリアを保證すること、海峽方面にソ聯の陸海兩軍基地を設くること、フィンランドを完全に犠牲にすること等であつたのである。次でその結果としてソ聯はその政治に於て、獨逸に對抗したことが明らかになつた。

ブルガリア占領前のソ聯の對獨警告及獨軍の進軍後ブルガリアに對するソ聯の聲明は、直接に反對的性質を有したもので、これらは一九四一年三月、トルコに對して同國が、バルカン戰に参加する場合、その背後は脅かされないやう保證されたことと同様に重大であつた。

(五) ベルグラードのボルシェヴィストの背後を固めんと目論んだ本年四月五日の、ソ、ユーゴ間の友好條約の締結と共に、ソ聯は獨逸に對抗するため、英、ユーゴスラヴィア及希臘の共同戦線の背後にあつて活躍し、同時にソ聯はルーマニアを獨逸へ對抗せしめ様としてあらゆる工作を行ひこれに接近した。

また希臘戰に於ては、サロニカを通じ飛行機、武器を敵に供給し獨逸の軍事行動を妨害した。獨逸はバルカン戰に於て電撃的に勝利を得たからこそルーマニア及びブルガリアに於ける獨軍を攻撃せんとする英、ソ兩國の計畫は晝餅に歸したのであつた。

かくの如き政策はソ聯が、北はバルト海より南は黒海に至る蜿蜒たる地域に、絶えず有力なる全ソ軍を集中することによつて行はれたのである。

これに對して獨逸は、その後暫らくしてその對抗策を講じたのである。本年初め以來獨逸は益々脅威せらるるに至つた。數日來の報道は、このソ聯の露骨な前進積極性を示し、且極度に緊張

した軍事状態の概観を提供するものである。その上に英國からは頻りにソ英間の政治的、軍事的協力を目的とするクリツプス大使の交渉につき報道が傳はつてゐる。要するに獨逸政府は左の結論を得た。

第一、ソ聯がその引受けた義務に違反して、獨逸並に歐洲に對する破壊工作を單に繼續する許りでなくより強化した。

第二、ソ聯の外交政策は益々反獨的になつた。

第三、ソ聯は約百八十個師の兵力を獨逸國境に前進集結を完了し、對獨戰準備を進めると共に屢々國境を侵犯した。

右の結論から觀ればソ聯は獨逸との條約を破棄し、且獨逸をその致命的戰鬪に於て、背後より攻撃せんとする意思は明白なる事實である事と認め得た。ト總統はこの露骨極まる背信行爲と、ソ聯の企圖する脅威を、精銳なる獨逸軍に依つてあらゆる手段と及ぶ限りの方法を以て拂拭し、赤軍の攻撃企畫を粉碎せんと決意し、宣戰布告と同時に斷乎として進軍の命令を發したのであつた。

三、伊、羅、芬の三ヶ國も對ソ宣戰布告！

チアノ伊外相は、二十二日早朝ソ聯大使ゴレルキン氏をキジ宮に招致して、伊太利國は六月二十二日午前五時半よりソ聯と戰爭状態にあるものと思惟すと通告した。

獨軍のソ聯進駐と共にルーマニアもソ聯に對し宣戰を布告した。同時にルーマニア國家主席アントネスコ將軍は全ルーマニア軍に對し東北方の敵を驅逐し、「ベツサラビア及ブコヴィナ地方の同胞をボルシェヴィズムの迫害より救出せよ」との布告を發し、昨日迄ソ聯の暴虐に耐へ、強き鞭の下に壓倒せられつゝあつたルーマニアの民意は、壯烈なる意氣を以て奔流の堰をきつて落下する勢で獨軍に策應してソ聯領に進撃を開始したのである。

四、ソ聯外相モロトフの聲明

モロトフソ聯外相は突如發表せられた獨、伊、羅の宣戰布告に、豫て期してゐたことながら餘りにも疾風迅雷的なるに一寸度を失つたが、彼もさる者、立ち遅れながら其の日の午後〇時十五分から左のラヂオ放送を行ひ、獨軍が對ソ攻撃を開始した旨を發表し、同時にソ聯全國民が最後の勝利まで戦ひ抜かんことを要請した。

獨軍は二十二日午前五時ソ聯政府に對し、何等の理由を説明せず宣戰の布告もなくして、ソ聯國

境を幾多の地點に於いて突破進入を開始し、獨逸軍はキエフ、エストン、セバストポールその他のソ聯都市を爆撃、二百名以上の死傷者を出した。獨逸の陸、空、機械化部隊よりする攻撃は先づマインランド、ルーマニア兩國境より開始された。この攻撃は獨逸間に存する不侵略條約を無視したものであり、ソ聯は今日まで同條約を文字通りに遵守してきたのである。然るに駐ソ獨逸大使は今朝五時三十分獨逸政府は「ソ聯と開戦決意をなした」旨を報告し來つた。予はこれに答へた。「最後の瞬間まで獨逸政府はソ聯政府に對して何等の不平も要求も提出し來らず。ソ聯の平和的意圖を無視して獨逸は攻撃を開始したものであり」と。

かかるソ聯に對する盜賊的攻撃の全責任は當然ドイツ並にファシスト指導者達の負ふべきものである。しかして今次の對ソ戦争は全く獨逸のファシストにより計畫されたもので、獨逸の勞働者、農民により計畫されたものではない。ソ聯政府とソ聯全國民は勝利のため闘争する決意を固めた。

五、獨逸は所詮は犬と猿

昨年末以來、歐羅巴戦争が次第に歐洲戰的性格から漸次長期戰的並に世界戰的傾向を帯びて來るに及んでヒ總統としては、もはや従前の如く英本土上陸作戰だけの作戰構想を許さず、長期戰に對應す

る萬全の準備を今日から整備するの必要を感じるに至つたであらうことが想像されるのである。

ただ問題は如何なる手段に依つて前記の準備を完了しようとするかにあつて、この點からして今回の對ソ戦線はヒ總統の撰ぶ最後の方法として決斷したものであらう。

いづれにしても、從來ヒ總統は大體に於てビスマルクの政策を踏襲するかに見え、つとめて前大戰の如く、二正面作戰（西に英佛、東に露）を回避しようとしたやうであつたに拘らず、いまや

英本土上陸作戰

地中海作戰

亞弗利加作戰

近東に對する對英作戰

右のやうに四方面作戰を繼續しつつ、一面新にソ聯を敵として新戦線を東方に作るに至つたことはそこに重大且已むにやまれぬ決意のあることを想像出來るのである。

恐らくヒ總統の胸中深く藏する信念は、大西洋作戰はともかくとして、陸戰に於ては確固不動の必勝を信ずるに足る、兵力と素質、殊に科學の偉力を有する獨逸として米國が參戰せざるに先だちソ聯を討つのが緊急必須のものとして覺悟を決したものでらしい。

獨逸は昨秋以來百に餘る師團をソ聯國境に配置して、常時モスクワ政府に對し強大なる壓力を加へることを怠らなかつたのみならず、周到綿密なあらゆる對ソ聯の戰略偵察は微に入り細に互つて組織的に完了せられ、萬端の準備成るや、まづルーマニアをして動員せしめ、芬蘭に對して對ソ積極外交を慫慂し、獨逸としてはソ聯に對する軍事的、外交的畫策を着々として進めたのである。元來獨ソの關係は全く宿命的である。ソ聯の對獨恐怖觀念はここ五、六年特に烈しかつた。而かもスターリン政策はそれを「獨逸憎むべし」との敵愾心へと國民を馳り立てることに腐心した。複雑怪奇を極めるソ聯外交の不信をよく獨逸は今日まで隱忍自重して來た。いつかは兩國が持つ爆發であつたのである。

六、獨ソ國境に於ける兩軍の對峙と一觸即發の危機！

獨ソ緊張の噂は大戦勃發直後、獨逸がポーランドを攻略すると共にソ聯軍の進駐が東部ポーランドに行はれた時以來の因縁で、ただ兩國の客觀的情勢が辛じて、衝突を防いでゐたのである。幾度かに亘る國境協定なりバルト三國の勢力範圍協定などが、その時々妥協の一里塚だつた。その後兩國の軍隊はひし／＼と國境に集結せられ、對峙する兵力は概略獨軍百七十個師團、赤軍百五十個師團といはれ、互に砲門を開き、鎗を削りにらみ合つて一觸即發の緊張を醸してゐたのである。

しかもソ聯のベツサラビア（ルーマニアとソ聯の國境）への進出、獨逸のブルガリア進駐、ソ聯のブルガリア壓迫、さらにユーゴーとの不侵略條約など獨逸の間隙を狙ふソ聯の出方は豫想以上に獨逸の憤激を買つてゐたのである。ただ獨逸を繞る客觀情勢、戰略上の必要が危機を一日伸ばしに延ばして來ただけであつた。

ソ聯外交政策の根幹は飽くまで大戦の圈外に立ち漁夫の利を占めんとしてゐたのである。それはソ聯が成し得る限り中立を標榜し、兩雄が疲れて共倒れになる機會を窺ひ、徐々に自己勢力圏を擴大することを策してゐたことは勿論であり、又其の政策は相當成功して來たのである。

しかしバルカン戰終了を契機として、このソ聯の政策は明らかに轉換の必要に迫られて來た。即ち獨逸のバルカン戰の短期拾收は、獨英間の勢力關係を甚しく變更し、兩國を秤にかけて不利な方へ勢力を加へるといつたソ聯のやり方が著しく困難となつて來たのである。獨逸官邊が當時「歐洲に最早中立國なしこの上は新秩序に協力するか、さもなくば舊秩序に留まるか、いづれかの道を撰べ」と喝破したのは、暗にソ聯とトルコに呼びかけたことは勿論であつたが、それはまた大きな懸隔を生じた獨ソの勢力關係の大なる反映でもあつた。

七、獨ソ國境日増しに殺氣を帯ぶ

ソ聯は一九三九年八月には國境警備兵力二十四師團、騎兵二十師、戰車三旅團であつたが其の年の十一月には約百ヶ師團に増加し、更らに昨年五月にはソ聯歐露の約三分の二たる百八十個師、騎兵二十師、機甲四十旅團といふ大軍になつた。

事實當時國境に對峙せる兩國軍は、兵力數こそ獨の百七十個師團に對しソの百八十個師團（騎兵、戰車を含まず）といはれたが、軍の素質、裝備の優劣等を比較考慮した觀察では、其の實力は二對一と評價された。その後兩軍共更に續々進駐増強し、各々堅固なるトーチカ陣地を構へ、砲門を開き機銃の柵を作り、天然、技術兩々の障礙を設け、地雷原を敷き、極めて近い距離で睨み合ひ、暗雲低迷して殺氣溢り大風將に來らんとする一瞬前の靜寂さの感であつた。

ソ聯暗中模索の腹藁

かくて獨ソの緊張は日増に募る許りであつたが、ソ聯としては反面に於て今暫らく獨逸との正面衝突を極力避けんとして、對獨政策を和らげ出來れば獨逸に接近し、さらに極端にいへば獨伊の樞軸側にでも加入せんとするかの媚態を表はして來たのはソ聯の胸中何を策したものであつたか？

對英討伐に全力を集中する必要に迫られてゐる獨逸としては、恐らく内心にはソ聯との接近握手を希望したかも知れないが、ソ聯の腹藁を見抜いて、底の底まで見極めてゐる獨逸の現實政策は、この覆面的な誘惑には一顧も與へず斷乎一蹴してしまつたのであつた。

八、獨逸がソ聯に奮然飛びかかつた眞の目的

獨逸として本來の戰爭目的である對英上陸作戰を目前に控へながら、ある意味では英國の仇敵とも言ふべきソ聯を相手にすることは、獨逸の戰爭目的達成を全く困難にするのではないかと云ふ説をなすものもあつたが、畢竟次のやうな三説が穿ち得たものであろう。

一、對英戰さらに近く實現する米の參戰を考慮して、長期戰となるの覺悟をせねばならぬ。それについて食糧、軍需品の獲得に永久且多量を手中に收め得る方策が必要である。

ソ聯のウクライナ地方の穀倉地帯、コーカサスの油田を確保することが絶対必要且焦眉の急である。

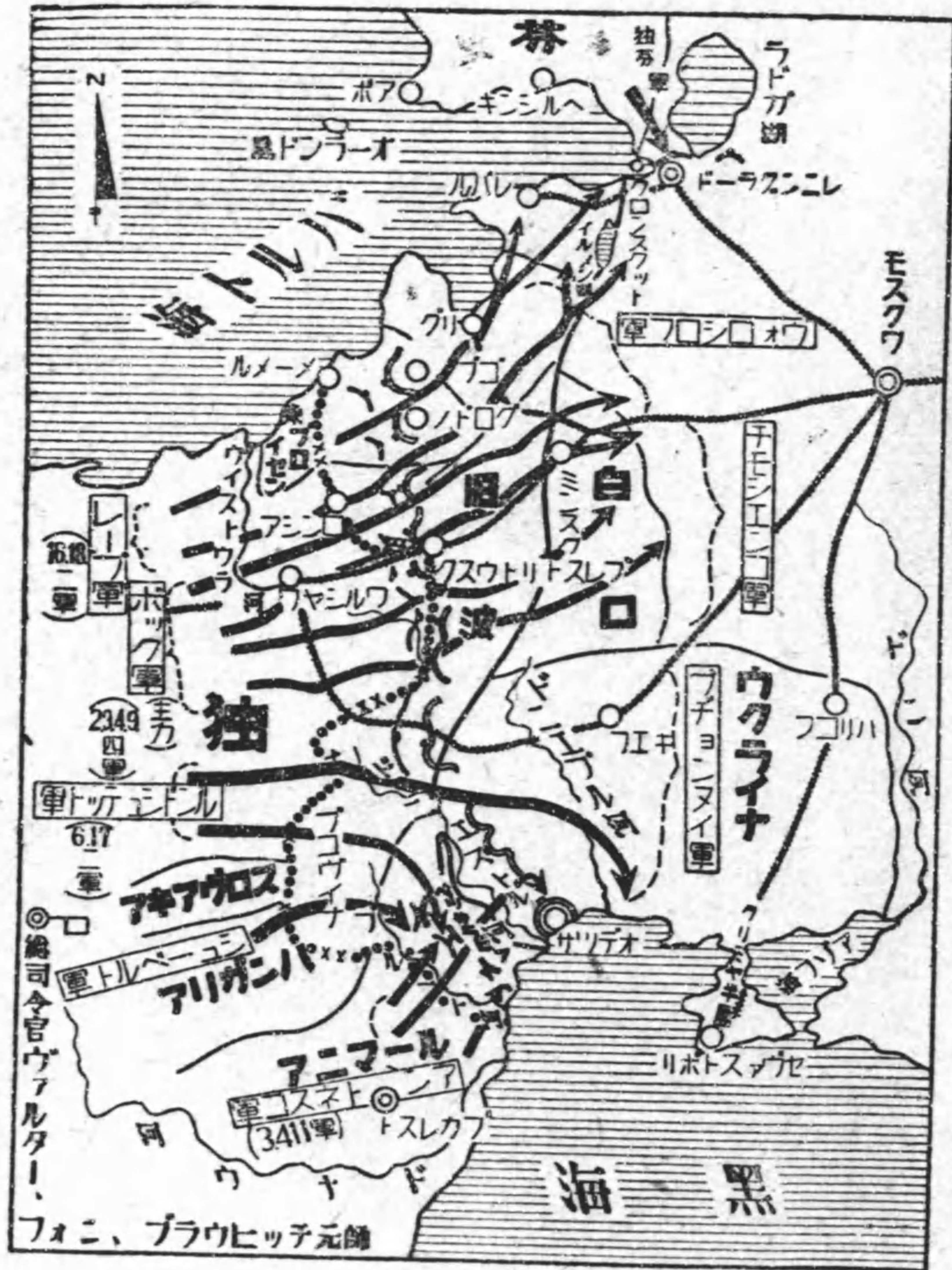
二、對英上陸作戰が萬一不首尾に終るが如き場合、ソ聯に後方を脅かされれば、獨の地位は極めて不利となる。これは有り得べき大障礙である。

三、現在の獨逸としては、軍事的にも經濟的にも實力の最高潮となりつゝあることは誰しも認めてゐる所で、即ち獨軍が開戦以來失つた兵力は、僅かに戦死五萬、行方不明四萬と言ふ小數であつて、しかも動員數は一千萬人に達するといふ、脂ののりきつた力を持つて満を持し、軍の士氣は凜然として已に戦はずしてソ軍を呑むの意氣込みがあり、今こそ對ソ戦の絶對好機であると判断したのであらう。

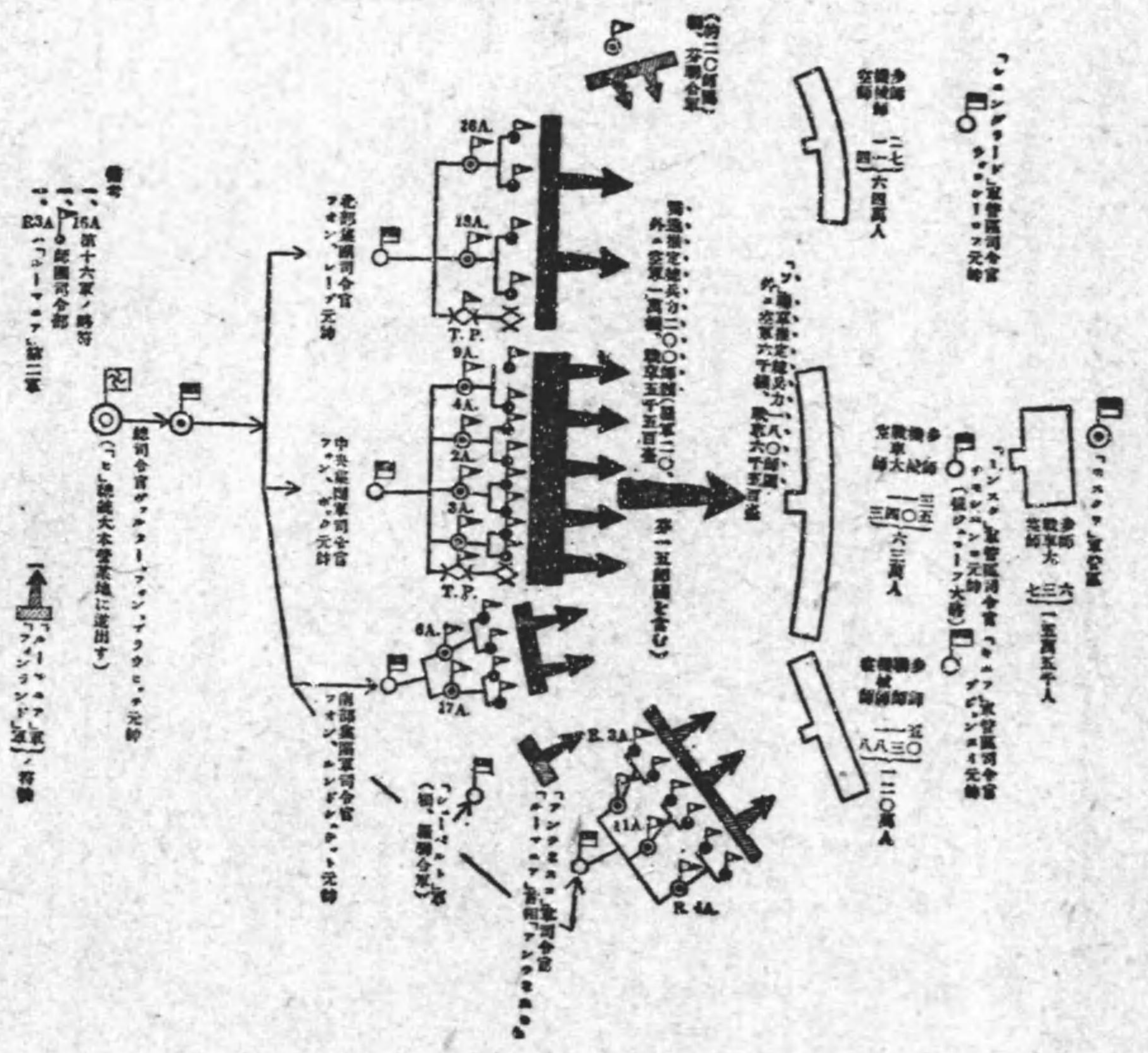
要するに獨逸は、この好機に乘じ東方の癌であり、一大脅威國たるソ聯をまづ徹底的に打倒し、後顧の憂を絶ち、徐ろに對英上陸作戰を決行し、米國の參戰を蹴散らし最後の戦争目的を達成せんとしたのである。

獨ソ開戦以來半歳でソ聯政府は首都の危機到來を自覺し、スベルドロフスクに移轉するに決し、先づ外交團をその地に誘導しスターリン以下首脳部は飽くまでモスクワを死守する決意を固めた。十月中旬には疾風の如く進撃する獨軍の重砲兵團主力がナポレオン街道に砲列を布きモスクワ市街に重砲弾を雨の如く浴びせ、大體カリニン、ボロジノ、ツィラを連ねる線に首都の包圍鐵環を完遂した。ソ軍の抵抗もこの頃は白熱の高潮に達し、屍山血河の慘を呈しつゝも、克く獨軍の空、陸軍の猛攻に耐え、必死の防戦、焦土戰術の奥の手も刀折れ矢盡き慘憺たる廢趾の如き一大都市は無慘にも奔流の如く突進し來る獨軍の前に今一步で跪づかんとしたのである。

九、獨、ソ兩軍の陣容



(初當戰開)較比力兵戰對軍兩ソ獨



一〇、獨ソ兩軍各司令官の横顔

武勳赫々たる獨軍統帥首腦

一、獨軍隨一のソ聯通、ブラスコヴィツ元帥
 ヒ總統の我が鬭争を地で行つた獨軍の對ソ進撃はソ聯の穀倉であり寶庫であるウクライナと赤都モスクワを主目標として、隨所に電撃作戰を遂行し所期の目的を達した。就中獨軍隨一のソ聯通ヨハネス・ブラスコヴィツ上級大將の輝しい進攻振り目覺しいものがあつた。將軍はスラヴ民族通として今次大戰直前に行はれたチエツコ進駐、大戰當初の對ポーランド作戰、而して今回の對ソ作戰と、苟もスラヴ民族に關係ある東方への進撃には、何時も重要役割を振當てられてゐる。ソ聯とは善縁、悪因ともに深い東プロシアに生れ約四十年間軍事に與はり終始獨逸東方政策と運命的に結びついてゐるといつても過言でない程である。

第一次大戰には東部戦線で露のミステンコ軍と對峙し、參謀として活躍し、一九二九年南獨コシタンツ步兵大隊長となり、三三年ナチ政權成立と共に軍團長、ドレスデン集團軍司令官を歴任し、三九年獨軍のチエコ進駐に際しては麾下の第三集團軍を率ゐてボヘミヤに電撃的進駐を行ひ、

堂々首都ブライグに乗り込んだ。この時一緒にチェコ入りをした相棒がリスト元帥で、二人共夫々の軍政長官となつた。今次開戦劈頭、對ポーランド戦にはルンドシュテット元帥指揮の南軍所屬第一集團軍司令官として主として南方作戦に當り、その一きは目立つた戦闘指導は、波蘭軍がポーゼンからワルソーに雪崩れをうつて退却するのを、その側背から機械化部隊で迂回し、退路を遮断しウイスチユラ河とブズラ河並にクトノの中間地區に追ひ込み、波軍の主力を捕捉殲滅の大包圍戦を完遂し、ポーランド戦最大の戦果を収め嘖々たる英名を擧げた。今次對ソ戦の南部作戦指導の戦果については何れ後章に述べることとする。

二、マジノ線突破に殊勳を奏した北部集團軍司令官レープ元帥

九月以來のレニングラードの攻防戦は全く歴史的の展開でソ聯側でも北部戦區司令官ウオロシロフ元帥自ら前線に出馬してレニングラード死守の決意を固めた。これに對して獨軍では北部戦區司令官リッター・フォン・レープ元帥が率先陣頭に立ち、部下を激勵し放膽なる機動戦を斷行し眞に屍山血河の肉迫戦を演じた。

レープ元帥は砲兵科出身の老將軍で六十六歳の高齡であるが、一九三八年獨軍のズデーテン進駐に際しては進駐軍總司令官として颯爽として馬を進め、今次大戦勃發するや、西部戦場の南方集團

軍司令官としてザール地方に在つて、蘭、白に向ふポツク軍、北佛に殺倒するルンデテツシユト軍に對應してアルサス、ローレーヌ地區よりザール河邊に蟠居し克く佛軍主力の行動を牽制し、機到つて一度び起てば一舉にマチノ延長線を突破し、はるかにスイス國境あたりまでマチノ本壘の背後を迂回するといふ離れ技をやつた。

殊にその麾下のウイツツ・レーベン將軍の率ゐる一軍を以てザール河を渡りメツツ城塞を屠り、又ドルマン將軍の率ゐる左翼軍にライン河の上流激浪渦巻き、天候不良、川霧深く立ちこもつた好機を利用し一氣に渡河攻撃を決行せしめ、遂にコルマール附近のマチノ線を突破して佛軍に大々的打撃を與へた。

困難なる地形と堅固なる要塞線を突破克服した戦勝は、フランス軍降伏に重要な役割を演じたものであつて、今又レニングラード地區の攻撃にあらゆる不利な條件を克服して、連日連夜の悪戦苦闘に耐え、ロシア三百年の舊都を指顧の間に望み、不眠不休の猛攻を加へつゝあるのである。

三、獨逸武人を代表する、中央軍司令官フォン・ポツク元帥

獨ソ戦に最後の決定的死命を制すべきモスクワ攻略戦に、獨軍の主力を率ゐる主としてナポレオン街道地區に添つて進撃し、至る所にソ軍を包圍殲滅し、各所に歴史的な大會戦を演じ、スターリン線

を突破しひしくと赤都に迫り、ソ聯軍の至寶と稱せらるるチ元帥の指揮するソ聯の主力軍を撃滅し、間一髪で主都を屠らんとしたのは獨中央軍司令官フェルド・フォン・ボツク元帥である。元帥は東プロシアに生れ、母は第一次大戦に獨軍最高指揮官として勇名赫々たるフアルケンハイン元帥の妹である。

資性謹嚴眞に典型的武人で軍事に關する限り熱狂的といつて良い程の熱心家である。ナチ政權以來集團軍司令官となり、オーストリア進駐には第八軍司令官として輝しきウイーン入城式を行ひ、今次の大戦には西部戦線にボツク集團軍司令官としてキュヘル軍、ライヘナウ軍を率ゐ集團裝甲軍、集團機械化軍を併せ指揮し、和蘭を叩き白耳義を席卷し、其の麾下軍たるルンドシュテット集團軍をして英、佛、軍の背後に大迂回作戰を執行せしめ、フランダース平野に英、佛白軍を包圍し大殲滅戰を敢行して非凡の統帥振りをあげた人である。

四、戰略家として知られた南部集團軍司令官ルンドシュテット元帥

獨軍の作戰は、中央にボ元帥の率ゐる主力軍の攻撃重點を置いて、モスクワ大包圍作戰に乗り出すと共に、南部方面軍司令官ルンドシュテット元帥麾下の精銳を以てハリコフを含むドネツ盆地及アゾフ海沿岸に大規模の包圍殲滅戰を展開せしむる目的であつた。

この方面の作戰で特に注意せねばならぬことは、伊、羅、洪、スロヴァキア等の諸國軍の聯合軍であり、協同作戰であるといふ特徴を持つことである。冬期作戰の可能であるコーカサス方面への新戰略展開の場合を顧慮すれば、當然この南部方面軍が其の主力となつてその方面に進攻する關係上、ル元帥の双肩に懸る責務はすこぶる重且大であつた。

元帥は獨逸最高首脳部中での最高齡者で今年六十七歳、然かも頭腦明晰有能達識の統帥官である。陸軍總司令官ブラウヒツチ元帥を除いては獨逸陸軍中の先任で、或方面では軍令關係のカイテル國軍總監以上に高く評價されてゐる人である。

今次大戦の西部戦線に於ては、最も華々しく、最も放膽なる大迂回戰を執行したのみならず、マヂノ要塞線の千古斧鉞を入れたことのない大密林を踏破し、突如セダン—モープジューの鐵鋼陣を最初に突破するに成功し、世界を驚嘆せしめた武勳赫々の殊勳者である。

ナチ政權以來ヒンデンブルグ元帥の股肱として信頼を受け、ヒ總統が政權を掌握して以後、ナチ戰略家として最高の權威を持し特に矚目されてゐたのである。

又現在の獨逸將軍中で、第一次大戦に於て軍團參謀長（第十五軍團）の地位を占めて、當時活躍したのはこの元帥唯一人である。

對波蘭戰には南軍司令官として電擊的に轉戦各地に偉大なる戦果を挙げ、西部戦線では英、佛軍を撃滅するに方つて、中央軍としてクルーゲ軍、ブシュ軍、リスト軍、クライス及グ德里アン大將の率ゐる集團機械化軍を併せ指揮し、其の旺盛な企圖心と神速なる機動によつて集團機械化兵團をして歴史的なマチノ線突破に次いで長驅英佛の側背に迂回し、未曾有の大包圍を敢行し、捕虜百二十萬人以上、撃破飛行機三千五百機以上、破壊又は鹵獲せる武器及戰鬪資材實に七十五乃至八十師團分の有史以來の大戦果を獲得するの大偉勳を奏し、佛蘭西をして獨逸の軍門に降るを餘儀なくさせた英雄的將軍である。

五、獨逸陸軍總司令官ヴァルター・フォン・ブラウヒツチ元帥

元帥は今次大戦の勃發すると共に對波蘭作戦、對北佛作戦、更に對ソ作戦と西攻東略攻むればと、戦へば勝つ常勝將軍の榮冠を頭上に輝かし、ヒ總統の絶對的信賴をうけ且カイテル國軍總監とは密接な關係にあつて、麾下數百萬の獨逸軍隊が仰いで富嶽の重き尊信を捧げ、又獨逸國民が全幅の信賴を持つてゐるのは實に陸軍總司令官フォン・ブラウヒツチ大元帥である。

元帥は一九三八年二月の肅軍でプロンベルグ元帥に代つて陸軍總司令となつて今日に及ぶ人である。其の神謀鬼策は大戦略家としてよく三軍を統べ、一度び波蘭に臨めば、旗鼓堂々三方面の各精銳軍は

手を連ねて國境を突破凄い勢を以て進撃、至る所に波軍を包圍殲滅、一撃のもとに首都ワルソーを屠り、ワイクセル河一帯西側地區で、波軍を一撃に捕捉撃滅したあさやかな電撃作戦の手際は全く驚異的であつた。

蘭、白、平野の大殲滅戦に有史未曾有の大戦果を獲得したのは、一に總司令官たる元帥の敏活なる統帥と、神速なる機動力の發揮、疾風迅雷敵をして對應せしむるの策なからしめ、麾下の勇將猛士をして遺憾なく其の全力を盡さしめた非凡の統帥技能であつたのである。更に息つく隙もなく對佛壊滅戦を完遂し、赫々たる偉勳を立てたことは、獨逸國の至寶として熱狂的稱讚を博したのである。

對ソ戦には三度陣頭に立つて廣漠三千軒に亘る大戦線を統率し、あらゆる艱難を克服し、モスクワ以西のソ軍主力を粉碎撃滅！ウクライナの物資を収め、コーカサスの油田の獲得に努め、黒海を制覇し、北はバルト海を扼しソ聯の力を將にウラル山中に壓迫せんとしつゝある輝しき歴史は、三度び元帥の頭上に燦として光を放ち、獨逸國民を歡喜に満たした。特に作戦指導に當つては本營の「綠色の机」から發令する若々しさで、自ら戦線を馳驅し又は飛行機上より觀測し戦況を判斷する。今や著々として進められつゝある歐洲新秩序の柱石たるべき一人であるが、不幸にして病魔に襲は

れ、ヒ總統と代り靜かに病を癒しつゝ想を戦線に運んでゐる。

ソ聯軍三軍司令官の統帥振り

獨軍の奇襲的大攻勢に對し、ソ聯はこの乾坤一擲の大決戦に近代戦を展開し、大陸軍國の面目にかけても負けられぬ意氣込みでスターリンは自ら陣頭に立ち、名實共に總司令官として全ソ聯軍を統帥すると共に、新に三司令官を任命しまさに此の一戦こそはソ聯の運命を決すべき重大な會戦とし飽くまで死闘戦を決意した。

沿バルト海方面であるリガ及フィンランド方面より進撃する獨軍に對抗するため、北西部戦區としてレニングラードを核心とする、重要戦線を形成し、この戦線に總司令官となつて統帥の任を受けたのはウオロシローフ元帥其の人である。

一、スターリンの名コンビと呼ばれたウオロシローフ元帥

赤軍の長老で國防人民委員（國防大臣）の椅子に在ること永年、昨年これをチモシエンコ元帥に譲り、國家國防會議委員兼最高軍事會議委員となり、チモシエンコと共にスターリンの最も信頼する腹心の一人である。元帥がソ聯の國內戦當時ツアリツインの赤白系兩軍攻防戦でスターリン政治委員と共に堅い信念と結合で奮戦したことは有名な話である。本年六十歳、ソ聯新聞では昨年五月

ウオロシローフ記念號を發行し、同元帥の赤軍建設の功績を讃へた程の功勞者である。

二、バルチザン戦の權威者チモシエンコ元帥（西部戦線總司令官）

ソ聯西部戦線は對獨作战の要衝であるミンスク方面のいはゆるナポレオン街道を目指して一舉モスクワに進撃しようとする獨軍主力部隊並に精銳多量の機械化部隊を邀へる最重要戦線で、最初この方面に奮闘してゐたパウロフ西部特別軍管區司令官軍の運命日に日に不安となり、到底獨軍の猛攻に耐える事が出来ないと見るや、急遽現國防人民委員たる元帥が、自らこの戦線に出馬し陣頭に立つて、ソ軍を鼓舞することになつたわけで、ソ聯が如何にこの方面の作战を重大視して、起死回生の大作戦を要望したかを想像することが出来る。

元帥はソ聯の革命戦及ソ波戦當時は、騎兵第一軍司令官として勇名を馳せた古強者で、バルチザン戦には獨特の戰略眼を有し、近代戦にも自信満々たる將軍である。

三、日露戦の一伍長たりし南部戦線總司令官ブジョンヌイ元帥

南部戦線はキエフからオデッサの線でウクライナ全土を守るソ聯にとつては生命線的重要地域であるが、ここはブジョンヌイ元帥が總司令官としてキプロス西南特別軍管區司令官麾下の軍を指揮することになり、而かもソ聯としては兵力重點をこの方面に集め極力地域防衛に主力を盡さんと

したのである。

元帥はウオロシロフ元帥と共に騎兵出身で、ツアリツイン戦の同志であり、國內戦の最後迄南部露西亞各地に轉戦し、騎兵團を縦横に操縦してウクライナ白衛軍を撃滅して殊勳を立て今日迄スターリンと苦樂を共にしその信頼を受けてゐる。日露戦には一伍長として沙河戦に参加し、我が軍とはおなじみ深い生き残りの一人である。

これを要するにソ聯軍三方面の各軍司令官は、何れもスターリンと一心同體の最高首腦連中で、ソ聯が如何に本格的陣容を整へたかの一つの證左であるばかりでなく、廣漠二千軒の大戦線に於て獨軍急進撃の前に北西、中央、南部の三方面が各自その戦況の變化に應じ、獨自の作戰を遂行せねばならなくなつたので各々獨立の總司令官を任命し、統帥の分離獨立を策したのであつた。

獨ソ兩軍主力決戦の跡を顧みて

一、傳統的な獨逸の電撃戦

巧みに機を搦んだ獨軍の作戰！

開戦劈頭の一大痛撃

獨軍の疾風迅雷の如き進撃は僅か四日間で、緒戦の大勢を決したとも言ひ得る。

六月二十九日ヒ總統大本營は驚異的戦果を發表した。

一、獨空軍は對ソ開戦第一日即ち六月二十二日中に、我が驅逐機は空中戦にて敵機三百二十二機、地上撃破千五百機合計千八百二十二機を撃墜破壊した。翌二十三日には更に二千五百八十二機を撃滅し僅か二日間にて制空權を獲得した。

二、地上部隊では次の如く猛進撃を開始せり。

1 東プロシアからリトアニア國沿バルト海に侵入した前進部隊は、早くもシャウライを突破してソ聯バルト海の要害地たるリガの要塞に迫つた。

- 2 二十四日にはコブノ(リトアニア國の首都)を占領し、更に舊ポーランドのヴィルナに入城、スターリン防禦戰の重要據點ミンスクに向ひつゝある一軍と協力してプレストリトウスクを突破した。
- 3 南部戦線ではリスト將軍麾下の機甲兵團は長驅してオデツサに迫り、ベツサラビアのキシネフを突破し其の挺進軍は早くもドニエストル河の左岸に迫つた。
- 4 この間地上部隊は一千二百臺のソ聯戦車を爆破し、尙ほ我が空軍は九十七臺を爆碎した。

二、獨ソ兩軍野戦兵力の比較

赤軍はこの怒濤の如く押寄せて來た獨軍の電撃戰に如何に對處したか？ まづ獨ソ兩軍最初の兵力布陣及戰鬪に検討を加へねばならぬ。

一、開戦初期に於けるバルト海から黒海に至る蜿蜒二千軒に互る戦線にあつた兩軍の兵力は、到底正確の數は知り得べくもないが、概して左表に示したものと見れば大差はない。
即ち

ソ聯軍第一線總兵力の概算

▽參謀總長	ジュエーコフ元帥	
▽空軍總司令官	イチャコフ中將	
▽レニングラード軍管區(北方軍)		
總司令官	ウオロシローフ元帥	
	レニングラード軍管區司令官	ポポフ大將
	沿バルト特別軍管區司令官	エフ・イ・クスネツツオフ大將
	步兵師團	二七 兵員 五十四萬人
	機械化師團	一一 兵員 八萬五千人
	空軍師團	四 兵員 一萬四千人
	(司令官グラウチエンコ中將)	
	計	六十四萬人
▽ミンスク軍管區(中央軍)		
總司令官	チモンエンコ元帥(後にジュエーコフ大將と交代)	
西部特別軍管區司令官	パウロフ大將(戰車の權威)	
步兵師團	二五 兵員 五十萬人	

機械化師團 一〇 兵員 七萬三千人(戰車の精銳を集中す)
 戰車大隊 一四 兵員 四萬九千人
 空軍師團 三 兵員 一萬人

計 六十三萬二千人

▽モスクワ軍管區(大本營直轄總豫備軍)

司令官 チュレネフ大將

步兵師團 六 兵員 十二萬人
 戰車大隊 三 兵員 一萬人
 空軍師團 七 兵員 二萬四千五百人

計 十五萬五千人

▽キエフ軍管區(南方軍)

總司令官 ブジヨンヌイ元帥

ハリコフ軍管區司令官 コワレフ中將

キエフ特別軍管區司令官 キルボノス大將

步兵師團 五〇 兵員 百萬人
 騎兵師團 一三 兵員 九萬五千人
 機械化師團 一八 兵員 六萬三千人
 空軍師團 八 兵員 二萬八千人

計 百十八萬九千人

總計 二百六十一萬六千人

其他沿ヴォルガ軍司令官グラシメンコ中將、オデッサ軍司令官チエレウイチエンコ中將、ウラル軍司令官エルシヤコフ中將等が各所要軍を率ゐて頑張つた。

一 逸 第一 兵力概算

▽陸軍總司令官 ヴアルター・フォン・ブラウヒツチ元帥

▽總參謀長 ハルテル大將

▽北部軍集團(主としてバルト海沿岸よりレニングラード攻略軍)

司令官 フォン・レーブ元帥

第十六軍 (司令官ウイツレーベン大將)

第十八軍 (司令官ドルマン大將)

機械化集團軍 (司令官ヘーブナウ中將)

▽中部軍集團(主としてナポレオン街道地區をモスクワに直進する獨主力軍)

司令官 フォン・ボツク元帥

第九軍 (司令官シュトラウス大將)

第四軍 (司令官フォン・クルーゲ大將)(後にフォン・ワイクス大將)

第二軍 (司令官グ德里アン大將)

第三軍 (司令官フート大將)

装甲機械化集團軍兼任司令官(フォン・クルーゲ大將後にフォン・ワイクス大將)

▽南部軍集團(主としてウクライナ穀倉地區に向ふ)

司令官 フォン・ルンドシュテット元帥

第六軍 (司令官シュトル・ブナーゲル大將)

第十七軍 (司令官フォン・ライヘナウ大將)

装甲機械化集團軍(司令官フォン・クライスト中將)

シュューベルト軍(オデッサ北側地區に向ふ)

獨、羅聯合軍

▽アントネスコ集團軍(主としてオデッサ方面の攻略)

司令官(羅國首相アントスコ將軍)

羅 第三軍

獨 第十一軍

羅 第四軍

▽ファルケンハウゼン集團軍(獨、芬聯合軍主としてラドカ湖兩側地區よりレニングラードに向ふ)

獨 一〇師

芬 一五師

▽空 軍

第一空軍艦隊 (司令官ケツセルリング航空大將)

第二空軍艦隊 (司令官〇〇〇)

第四空中艦隊 (司令官レール航空大將)



約一萬機外に豫備機約五千機

總兵力概數

師團

獨	一六五	兵員	約三百萬人
芬	一五	兵員	約三十萬人
羅	二〇	兵員	約四十萬人
計	二〇〇師	兵員	約三百七十萬人

野戰に於ける兩軍初動の對抗兵力概數は右に述べたやうであつた。其の總兵力に於て獨逸軍は、稍、優勢の觀はあるが、芬、羅兩軍の素質、裝備の點から言へば、大して獨軍の戦力増強と云ふ程ではないが、士氣の上に於ては幾分旺盛ならしめたのであろう。

之に反しソ聯軍は、對獨第一線兵力こそ稍、劣つてゐるやうだが、歐露には尙ほ、狙撃師團約二十七、騎兵師團五、戰車十旅團、飛行五師團の豫備軍があり、更に歐露に近き西部シベリヤには赤軍第一軍（兵員約三十二萬）同第二軍（兵員約五十二萬四千人）を保持してゐたから、兩軍兵力數は略ぼ同等と見て間違ひないのである。

一億七千萬の人口を持つソ聯に比し九千萬人の獨逸人口は總數に於てこそ相當の懸隔があるが、獨逸の壯丁は全般的に體格、訓練がよく、双方共に六百萬から八百萬の動員力を持つてゐたから、人的資源には不足を啣つ心配はなかつたのである。

三、兩軍の科學兵器の裝備

最も優勢な獨逸空軍！

ソ聯の空軍兵力は慥かなことは判らなかつた。或は一萬と言ひ或は五、六千機と言ひ何れも過大、過少の評価であてにはならぬが、兎も角對獨第一線機として準備したのが概して九千機内外であつたらう（獨軍大本營の擊破發表から推算して）。この内東部西比利亞の護りに空軍約七師團（兵員二萬五千人、機數約三千）を釘付けにされてゐるから、對獨空中制覇を争つたのは先づ六千機と推定し得るのである。然し中には極めて舊式なものもあり、實戰に耐えないものが約半數はあると言ふことであつたから、かれこれ二、三千機の實力よりなかつたらしい。

これに對し獨逸空軍はどうかと言ふに、國境に集結したものでだけで三個の空中艦隊總數約一萬機！優秀なる性能と卓越せる操縦士を持ち戰闘機、爆撃機共殆んど左の二種類機であつた。

獨空軍

- メツサーシユミット一〇九型(重驅逐機)
- ユンカース 一八型(最新の主戰爆撃機兼遠偵察機として優秀、時速五一七軒)
- ハインケル 一一二型
- 同 一一三型 } 戰闘機
- ユンケル 八七型
- メツサーシユミット一一〇型
- ハインケル 一一一型 } 爆撃機、時速六〇〇軒
- 同 五九型 (多用途双發水上機)
- 同 六〇型 (複坐水上偵察機)
- 同 一一四型 (水上機)
- JV 八七型 (急降下爆撃機)(爆彈五〇〇軒搭載)
- メツサーシユミット最新一〇九F型
- フリースター・ストー一五六型 (通信連絡、重傷者輸送機)

ソ聯空軍

- エス・ペー 一型
- 同 二型 } 輕爆撃機
- ヴァルテイー(米國製)
- ツエー・カ・ペー 二六型
- エル 五型 偵察、輕爆、襲撃兼用
- デー・ペー 三型
- 同 五型 } 重爆撃機
- 同 六型 } (デー・ペー三型は最も優秀八五〇馬力時速約五百軒、極東から阪神方面を爆撃して悠々歸還し得る高性能を有す)
- イー 一五型
- 同 一六型 } 戰闘機、イー一七型は最高時速約五〇〇軒
- 同 一七型
- セベルスキー 複坐戰闘機
- デーイー 六型 複坐驅逐兼襲撃機

製作能力

四〇

ソ聯は一ヶ月五、六百機程度であるのに比し、獨逸は其の五倍の生産能率を持つてゐることは非常な強味であつた。

戦車勢力はどうであつたか？

獨逸の戦車はスペイン内亂に専ら輕量戦車を使用して見たが、其の成績は餘り香しくなかつたので新に約十噸級の新型戦車を製作して一層威力を強大にすると共に、更に中型戦車（二〇—四〇噸級）及厚装甲板を有する中型に改装して戦車の威容を新にし、加ふるに水陸兼用のものを多數製作して軍の機械化に伴ふ快速なる大機動性を準備した。かくて一昨年九月のポーランド作戦には機械化部隊六個師團、自動車化部隊四個師團計十個師團の装甲兵團を運用し、又フランダース、北佛戦には装甲兵團十六師團（機械化十個師、自動車化六師）を出動させて縱横無盡の大殲滅戦を展開したことから考へると獨軍の有する機甲兵團の戦車はかれこれ約六千臺と推定される。現在獨逸の戦車は大體四種に分けられるが何れも無電設備と受信機を持ち完全に雜音を防止し、且指揮戦車は強力なる發信機を備へ戦闘中作戦命令を即時傳達し得ると、速度の大なることは今日迄ソ軍に對し驚異的戦果を收め得た要因の一つであらう。

之に對してソ聯戦車は英國式のテ—二六型、米國式のベ—テ—型が主體で何れも模倣製作したものであつて、獨逸戦車が同じやうに時速四〇—五〇—五〇—五〇の整然たる統制があるのに、ソ聯戦車はあるものは非常に快速であり、あるものは緩慢で其の性能が全く不統一であることは明らかであつた。それに装甲板が概して薄い缺陷がある。獨逸の戦車は厚さ二十五ミリで最も優質の鋼板を使用してゐるのに反して、赤軍のそれは十三ミリぐらいしかないのが多い。それ故野砲の弾片でも貫通して穴があく脆弱性がある。

戦車數は例によつてはつきりわからぬが、歐露に約五〇旅團（一旅團は戦車約二〇〇と見て）總數約一萬臺で其の内對獨第一線に當てたのは約四〇旅團、約八千臺らしい。

従つて戦車は數に於いて赤軍は優勢であつたが質に於て劣つてゐたことは誰しも認めたのである。

しかし今度の戦ひで始めて現はれたのが九十噸戦車（俗にマンモス戦車と言ふ）であり之には獨軍も全く豫想外で面喰ひ手古摺つたらしい。ソ聯としては良く秘匿したものである。

右のやうに夫々比べて見るとソ聯の機械化も刮目すべきものがあり、一方化學戦準備にも銳意努力して來たことは見逃がせない。

これを總じて見れば獨ソ兩軍の立ちあがりぎはの野戦兵力はまづ五分と五分、兵器は、空軍は獨の

質量共に優勢、戦車は數に於いてソ聯が優り質に於て獨が遙かに優位にあり、火炮もソ軍が其の性能上遙かに及ばぬことは初めから推定されてゐた。

科學兵器とソ聯軍

獨逸が科學の國であり、獨逸人が科學的性能の卓絶せる頭腦の持主であることは世界的に定評のあるところであるが、ソ聯赤軍の科學的能力、裝備はどうであるかを検討して見る必要がある。

近代戰の如く戦ひが科學的な特質を帯びて來れば來る程各列強軍共之が研究に没頭するは自然である。

ソ聯も科學戰を重視し、平時から科學戰統制機關並に化兵部隊を常置し、特に一般軍隊に相當の化兵裝備を有し、専門の將校及化學部隊を有してゐる。

化學戰部隊としては勉めて之を機械化し以て其の機動力並に資材の輸送力を増大し、一般に投射、撤毒を主とし尙瓦斯放射、火焰放射及發煙器等を備へ、更に砲兵には瓦斯彈、飛行機には投下瓦斯彈瓦斯雨下、狙撃師團には毒煙、手投瓦斯彈、擲銃用瓦斯彈等を準備してゐたやうである。

元來ソ聯民族性から觀れば、科學性能の訓練なり趣味なりが、獨人に比べて優つてゐるとは言へぬ。前の世界大戰當時にこの化學殊に化學兵器が現はれ、各軍共早急に毒瓦斯に對する防毒訓練が行はれ

たが、當時の露軍は一向無頓着であつた爲か、ブズラ、ラウカ河畔の戰鬪ヤストホード河畔の戦ひに惱まされて敗慘の憂目を視たのは好個の事例であらう。

ロシア人の天稟からいつても、彼らが眞に善く科學兵器を利用し、潮の如く押寄せた獨軍に對し、自軍の作戰を有利に誘き得たか、どうかは大に疑問とせねばならぬ。

第二次五ヶ年計畫は完了したものの、この計畫に一役買った獨、米兩國の技術家達は露人の技倆について、あまり芳しいことは言つてゐなかつたやうである。

四、卓越せる獨軍の統帥と不意を喰つたソ軍の統帥

統帥は拙いと一般に評價されてゐるソ軍の將帥も、緒戰に獨軍から急襲されて深甚な傷手を負つたソ軍をして兎に角約半年、獨軍の猛進撃に耐え得しめて其の攻撃を阻み豫定の如く進捗をなさしめなかつた所があつたのはソ軍の頑強性にも因るが、統帥としても亦悔ることが出來ぬ點がある。先年ソ聯が陸軍將星中の曉星ともいはれたトハチエフスキー元帥以下七人までも叛逆罪として銃殺の刑に處してから、止めどもなく肅清の嵐は吹き卷くつて、上下層へと深刻な暴威を振り、帝政時代に正規の教育を受けた將校はもとより、革命時代の將兵を殆んど葬り去つた痛手は今更ら今度の國難に直面し

て、スターリンとしては慥かにてきめん直感したものと思へるが、今次の戦ひにはソ軍としては不思議な位克く獨軍を苦しめたものである。

だが然し統帥上の缺點は慥かに暴露した所が多い。例へばソ聯軍としては作戰の方針を「退避持久」として諸計畫を進め軍を傷つけることなく、徐々に新陣地に後退して獨軍を奥深く釣り込み、其の後方連絡線の維持を困難にし、奈翁遠征の三の舞を演ぜしめ最後の勝利は必ずソ軍にありと確信したものである。

所が部下の兵團長なり部隊長としては、統帥の根本的企畫を潔しとせず、命令を遵奉せず容易に退却を肯ぜず、各所で獨軍に捕捉されて決戦に陥り殲滅されたものが多くあつた。畢竟するにソ軍の軍隊教育は、相當に徹底し良く訓練されてゐるものと見ることが出来る反面には、上級指揮官がこの訓練せられある軍を運用する能力に缺陷があると云へば云ひ得るのである。

そこで今度の對獨戰のやうに機動戰が多く卓絶なる神謀企圖を要する事となると、統帥の技能はどうしても其の缺陷を暴露し易い。然しながら戦線が固着して陣地攻防戰となれば、中々どうしてソ軍は頑強なる防者となる。故に獨軍ではソ軍に對して時間の餘裕を與へるのは禁物なりと言つてゐる。現にレニングラードの防守戰でも、惡戰苦闘を續け、食ふに食なく戰ふに彈丸なきに至るまで、一

歩も退かず男子の全部女子に至るまで狩り出して第一線に立たしめ死闘を續けること十ヶ月！ 首都モスクワの防備戰にしても、防禦設備の全機能を盡くし、獨軍の砲、爆撃に克く耐え、外廓防禦線の一角敗れれば更に新に補強して之に據り、市街は一面のバリケードを張り廻らし、家は獨軍の進路に面して悉く射撃の設備を爲し、最後の手段たる焦土戰術を執行して一物も遺さず、獨軍が泊るに一軒の家なき凄慘な廢墟と化せしめんとした。かくの如くソ軍には頑強に死守する特徴がある。即ち一地を守るとなれば其の防禦力は恐らく最大の力であるとの確信を持つてゐるやうである。即ち一獨逸軍の統帥振りの鮮かさ！

これに反し獨逸統帥は古來傳統的に一種の自信と誇をもつてゐる。モルトケの戰略、シュリーヘンの攻防策、ヒンデンブルグの神謀鬼策と古來續々名將を輩出し、加ふるに近代兵學の名家である「獨逸の統帥」は傳統的に一絲亂れざる不動の源泉を有してゐる。殊にヒ總統は三軍の統帥者であり其の令は全軍を統一して嚮ふ所手足の如く、一たび手を舉ぐれば麾下百萬の獨軍は長驅して諸威を攻略し、山紫水明の各曲浦に翻々として獨逸國旗を樹て、二たび令すれば西歐諸邦を壓倒し、更に飛んでバルカン半島を征服してゐる。東奔西走日尙ほ足らざる赫々たる其の武勳は、獨軍全將士の頭上に輝き滿々たる自信と確乎たる信念とを以て對ソ戰に立ちあがつたのであつた。

開戦劈頭ソ軍は獨軍の陥穽に落ちて捕捉殲滅せらる

一、獨逸作戰の妙

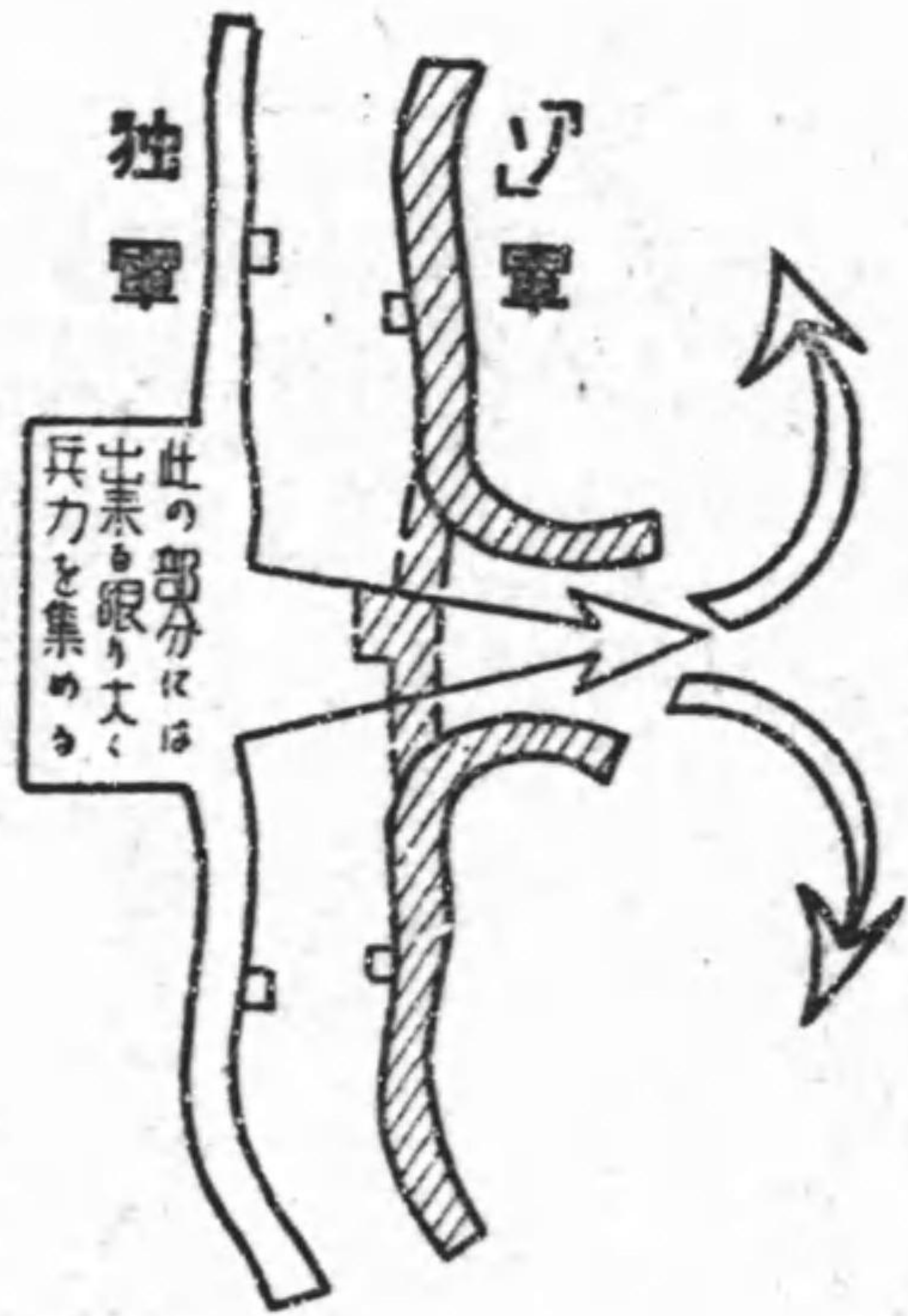
晴天の霹靂の如き獨軍の大進撃にソ聯軍は全く捕捉殲滅の罠に嵌つた。ヒ總統の作戰方針は、飽くまでソ聯軍主力の殲滅、ボルシユヴィズムの壊滅であつて、土地の領有ではないのである。

ヒ總統の進撃命令は全く電光石火であつた。六月二十二日の拂曉、夜がほのぼのとあけそめた頃には、獨の空軍は已にソ聯各地の都市上空に其の雄姿を現はし、各地の軍事工場、飛行場に爆彈の雨を降らし多大の戦果を収めてゐた。

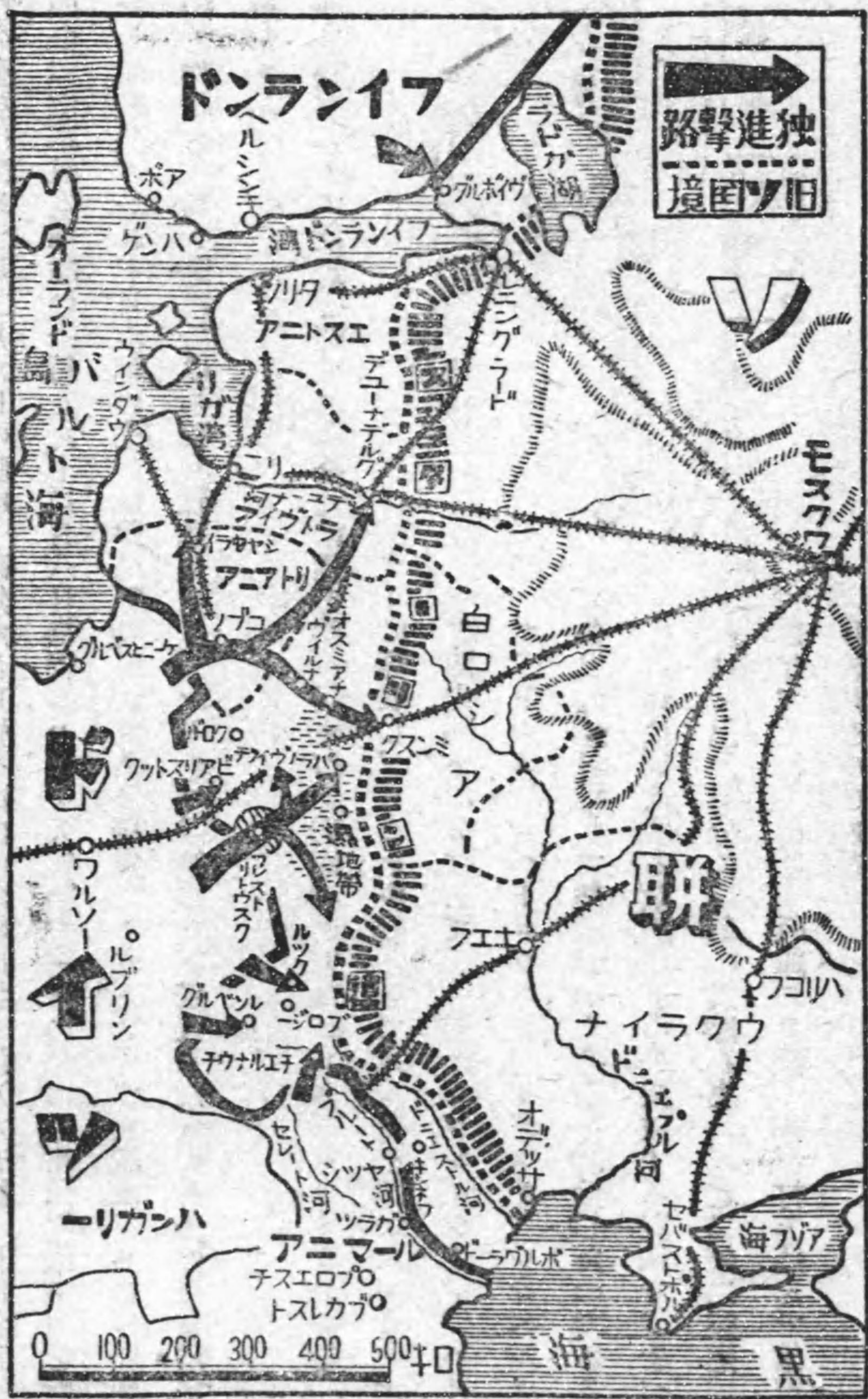
ソ聯全體が寢耳に水の證據には、其の夜爆撃されたキエフ、オデツサの各市竝にセバストポールの軍港では、皎々と電燈を點して平和の夢を食つてゐたのでもわかる。

恰度日露開戦の詔勅降下に先だち、竊かに我が聯合艦隊の主力は東郷司令長官統率の下に朦朧舳艫相含み、佐世保軍港を出航し海波を蹴つて旅順口沖に忽然として現はれ、露軍の陸海將星昨夜の祝宴

舞踏の夢猶ほ醒めざる二月八日の曉に、轟然たる巨彈を港内の敵艦に打ち込んだ奇襲、更に大東亞戰劈頭我が海軍航空部隊の決行した十二月八日拂曉のハワイ大奇襲、一舉に米の太平洋艦隊主力を撃滅したる大戦果、これぞ日本軍の先制痛撃の獨特戦法であり獨逸もこれとよく似た戦法である。今回の獨逸の作戰は、前大戦に於ける獨參謀總長ルーデンドルフ元帥の立案畫策したものをそのまま踏襲した感がある。



即ち獨軍としては最も祕密に萬全の準備を整へ、まづソ聯國境の要衝ブレスト・リトウスクを一舉に奪取し、ここを中軸として宛も扇を開いたやうに大軍を四方八方に分進して、一氣にレニングラード、ハリコフ、ドニエプロペトロウスク、オデツサ、レンベルクの各目的地目指して怒濤の如く進撃を開始したのである。これはいはゆる敵陣地を中央突破する戦法で、まづこれはと思ふ部分に攻撃の重點を集め、遮二無二突進、大きな穴を打ちあげ、敵陣の奥深く楔を打ち込んで敵軍を中斷するのである。



これが爲にソ聯軍第一線兵團として、國境に集結してゐた約二百五十萬の赤軍は南、北戦線の連絡を完全に遮断せられ非常な混亂に陥つた。

作戦第一日、第二日(六月二十二、二十三日)の如きはソ聯軍は見事に奇襲せられたので全く指揮、命令が徹底せず其上中央を突破されて、獨軍の機甲兵團は奔流の堤を切つた勢で其の快速力を極度に利用し陣地の奥深く突進し戦場の至る所にソ軍を各個に包圍撃滅したのであるからソ軍の指揮組織は徹底的な打撃をうけ、手の下しやうがなく漸く第三日頃から部下諸隊を掌握し得たと言ふことである。

前大戦にはルーデンドルフ元帥がこの作戦指導で、ウクライナ並に舊露領ポーランドを忽ち攻略してしまつたのと同じ筆法であつた。

然しながら今回のプレスト・リトウスク要塞の攻撃戦は、その激烈なことは、フランダースの大殲滅戦、マヂノ要塞線の突破、ギリシアのメタクス線の攻略にも劣らぬ史上未曾有と言つてよい程の大修羅場を現出し、兩軍の決戦であり大死闘戦であつたと共にソ軍は大打撃を受け全く獨軍の罠に陥ちてしまつたのである。

二、獨軍の注文通りに包圍殲滅戦は完遂された

獨逸大本營の觀測では開戦當初ソ聯軍の主力たる約百八十師團は獨ソ國境に集結してゐて、而かもピアリストツク、ブレスト・リトウスク（獨軍が中央突破をした方面）がソ聯軍陣地の突端部を成してゐる弱點を捉へ、獨軍主力の精銳をこれに對して包圍する如く配置してソ軍の薄弱部を狙つた作戰計畫であつて、獨軍の機甲、重、野砲成し得る限りの兵團を集め、空軍爆撃の主力を参加せしめ、空陸呼應し速戦即決的にソ軍の第一線兵團主力を粉碎し緒戦の勝利を最大に獲得せんとしたのは何んと言つても統帥の巧妙なる大戦略であつたのである。

若し赤軍最高統帥部がポーランド戦以來、現實に發揮した獨軍の實力を見、その作戰方針竝に戦闘指導を能く研究してゐたならば、これに對抗するにはソ聯としては傳統的なる長期作戰、即ち後退戦術に出るのほか策も略もないことは自明の理であらねばならぬ。果してソ軍は其の大方針に即應するやうに作戰處置を取つてゐたであらうか？ 舊ソ、波國境線に沿つて、スターリン線を設けたことは既に相當前のことであつて、一昨々秋獨波戦に乗じて舊ポーランド領の東半部を領有した地域はスターリン線の前地とし、特に快速兵團に對する緩衝地帯として極めて有利な條件になつたのであるに拘

らず、ソ軍は之を前地として利用せず國軍の主力をスターリン線を越へて其の前方に配置したことは何んと辨じても一大失策であることは世界の評論が一致してゐるところである。

近代戦で快速兵團の攻撃を受けてからの後退は殆んど不可能だ！一たん快速部隊と接觸してから、後方に適宜離脱して新陣容を整へると言ふことは非常に困難であり殆んど不可能と言ふことになつてゐる。殊に急襲なり奇襲を受けた場合は更に其の困難の度を増すのである。果してスターリン線で態勢を恢復せんとしたが、獨軍の猛進撃はソ軍に尾撃してミンスクに迫り、あつと言ふ間にスターリン陣地に突き込まれた。

この様に見て來ると、ソ軍の作戰は豫期する其の大方針に副はず、寧ろ政略に動かされたものと言ふべきであらうか？

ソ聯軍としてまづ採るべき軍の配置としては其の主力軍の約半數を、モスクワ附近に控置するか、或は第一線兵力の主力をスターリン線に堅固に據らしめ、其の前方地帯たる舊ポーランド領は一種の前進陣地位として、獨軍の進攻状況を觀察する要があつたのである。然るにソ聯軍は結局獨逸軍の誘ひに引ずられて其の注文通りに乗ぜられたかたちとなり、遂には思ひもよらぬ強襲をうけ、捕捉殲滅を蒙る配陣を布いたも同様な運命に陥つたものとみるのが至當であらう。

三、興味ある大戦車兵團の死闘戦！

獨ソ戦勃發と共に最も興味を以て世界の耳目をひいたのは、兩國軍の世界最大機械化軍の一大決戦であつたらう。

なにしろソ聯軍戦車六千五百臺、獨軍戦車五千五百臺と推定される大量の近代戦の花形科學兵器の威力は、如何に運用されるか、どれだけの威力を發揮するか、其の決戦後の彼我の戦果はどうであらうかと恐らく各列強軍當事者は固唾を呑んで待ち構へてゐたのだ。

早くもルツク、レンベルグ（何れも舊ポーランド領内で獨軍の主力中央軍の前進路に當つてゐる）の戦車戦では、獨ソ四千臺以上の戦車が正面衝突して、史上未曾有の驚くべき「動く要塞の遭遇戦」が展開された。

其の勝敗は兩國軍の發表區々で眞偽は一時判断出来なかつたが、今日では概ね明確となつてソ軍戦車は甚大な打撃を受けたことは確かである。ソ聯が絶対秘匿してゐた六十トン級の重戦車、又新聞報道によれば或は百トン級の怪物戦車も現はれ、それこそ小山のやうな大怪物が轟々たる響をたて大小數千の戦車群に入り交つて砂塵をあげ轟進して來たに違ひない。之に對し獨軍戦車は概して二〇―三

〇トン級中型戦車で立あ向ひ、廣漠たるポーランド東部地區の大平野で、兩軍大小無數の戦車が蟻の如く密集し、四千臺からなる敵味方の撃ち出す大小火砲がお互に火を吐きながら地軸を揺がせつゝ闘つた光景は、想像するだに壯烈であり又慘烈で到底筆紙のかきあらはすことの出来ぬ凄絶なものであつたらうと思ふ。

四、ソ聯の創造した「走る砲臺」の猛威力！

戦車數千臺、轟々として地に吼え、煙塵を天に沖して殺到し、更にその眞黒な集團の戦車を中心に凄しい音を立て、火を吐きつゝ疾走し來るものは何者ぞ！これぞソ聯が初めて持ち出した自走砲（自ら走る大砲）であつた。この大砲は無限軌道をつけ砲手が乗つて自由自在に移動し、移動中にも砲撃することが出来る。いはば「走る砲臺」で、戦車威力を一層強烈にした新兵器である。こんなものをソ聯が創造してゐやうとは、さすがの獨逸側でも豫期してゐなかつたらしい。

尤も獨逸でも何んとかして戦車の火砲の威力を強めたいといろく研究した結果、十五センチ歩兵砲を古い戦車（例へば銃後戦車）の如きものに載せて既に西部戦線で英、佛軍をたたきつける際使つたこともあるが、その後鋭意工夫改造し、稍々完備した砲戦車（原名シュツルム・ゲシュイツ）と云ふの

が出来上がつて敵方を驚かせた。

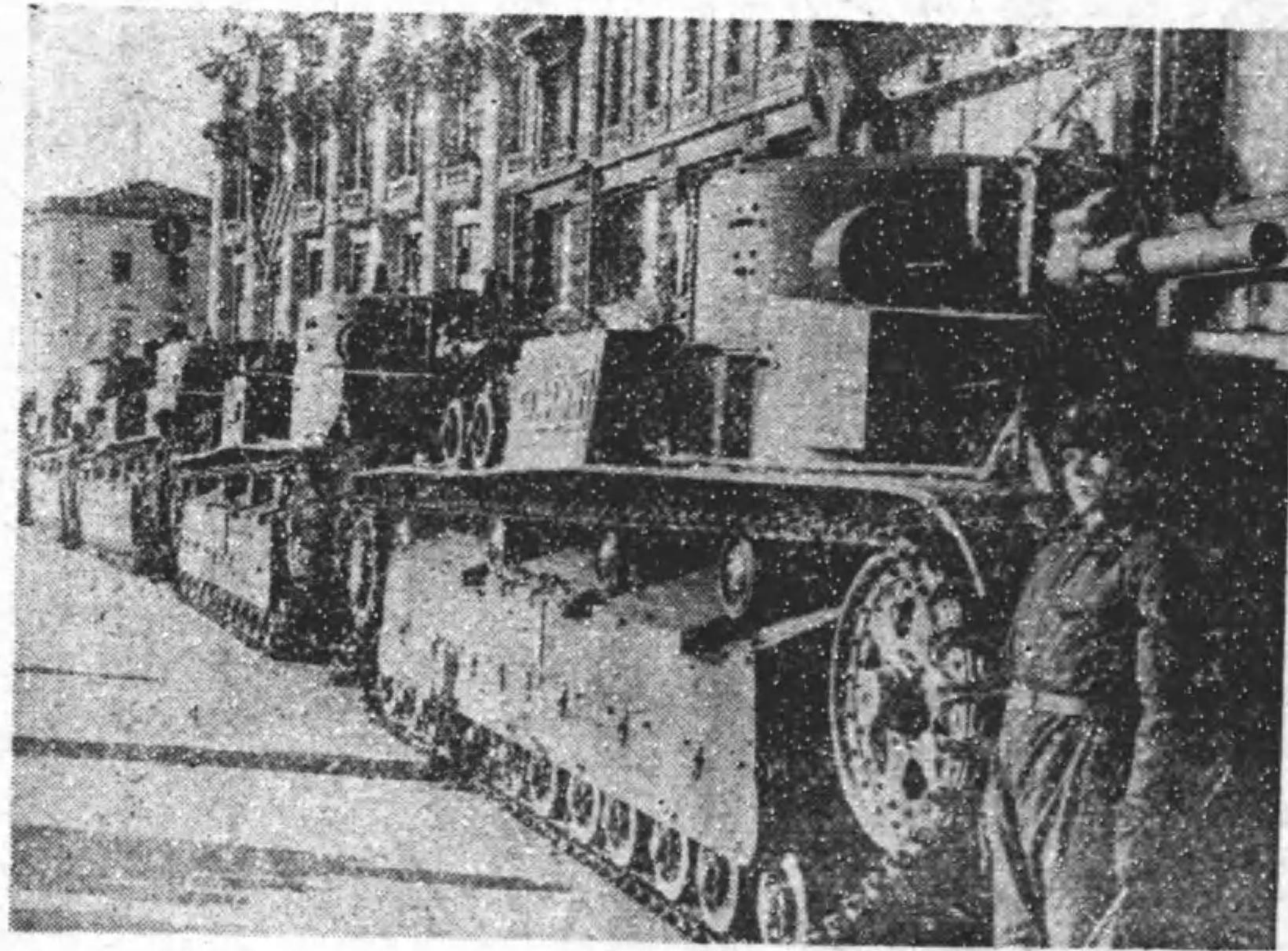
この砲戦車と言ふのは塔載砲は七・五センチ(野砲位)だが、一般戦車と異なる點は、砲塔を極めて低くし固定式で左右に旋回はしない。そして従來の山砲、野砲の代りになつて戦車群なり時には歩兵とともに驚進してトーチカのやうな頑強な抵抗防禦物を突破するに用ひるのである。序にソ聯重戦車が惨敗したわけを一述べて見やう。

獨逸が臥薪嘗膽二十年、眞剣に努力研究して作りあげた兵器は、さすがに科學の國の優秀と威力を持つてゐた。開戦早々餘りにも獨軍の猛進撃は破竹の勢を示したので、一時世界的に傳へられたやうに前人未知の、幻想的怪兵器を持つてゐるであらう。即ち百トン戦車とか、ペトン(ペトンを熔かす高熱弾とか、神經を麻痺さす怪光線、長射程の火焰砲等々)を使用したものであると云ふ事は結局は敗者が驚愕の餘り其の眼に映じたる幻影をまことしやかに言ひふらしたのであつた。

獨軍の新兵器は勿論科學の粹を集めてはあるやうだが、別に神變魔可不思議の奇術を使つたわけではない。量に於てソ聯の優勢しかも絶対秘匿した九十トン級の重大戦車と走る砲臺の自走砲を向ふにまわし、よく今次の大戦果を獲得し得たのは、たしかに獨軍の戦車速度の速かなる事と、操縦輕快である事殊に路外運動性の優秀に加へて常に奇襲的效果を發揮した指揮運用の妙と相俟つて、電撃戦



ソ聯の機械化砲兵部隊



ソ聯の誇る重戦車部隊の出動準備

に成功を収めたものである。

獨ソの戰場として彼我兩軍の活躍した地形は西部ポーランドやフランス、ベルギー平地と違つて、概して泥濘惡路の地方が多く、戦車の戰場としては條件に恵まれてゐないから、戦さに勝つためには性能の優秀と兵員の精到なる訓練により常に優位を占めねばならぬのであつた。獨の戦車には一臺に完全な無電機をもつてゐる。殊に指揮官戦車は強力なる發信機があり遠距離から戦闘中作戦命令を即時に傳達し手足の如く號令することが出来るものである。

これに反しソ軍戦車は九十數トンの重戦車を始め大小無數の戦車があり、量に於ては慥かに優位を占めてゐるが、何しろ夫々の性能が英、米、獨に模倣したものであるから、速度も違ひ威力も差があり、中には大砲も大きく戦車の装甲も厚くはしてあるものもあるが、それはあまり重すぎて行動が鈍重となり、機械の故障が起り易く、未だ戦はないうちに獨軍の砲弾に破壊されたものが多く、自然指揮は亂れ、隊伍は混亂し、力はあるながら十分發揮することが出来ずにあの惨めな惨敗をしたものらしい。

五、赤軍は果して對獨戦備が出来てゐたか？

最高潮に乗つて東攻西略向ふところ敵なき獨軍に對して、創設二十有餘年の新らしき歴史を有する赤軍として、果して自信ある對抗戦備を以て立ちあがり得たであらうか？

開戦直後のソ軍の混亂、ドイツ空軍の絶對優勢、ソ聯各都市の猛爆、寝込みを襲はれた國境配備の赤軍は獨逸機械化部隊の蹂躪に任せて潰え、つゞいて三方面より突入した獨逸各集團軍は、息つくひまなき快足進撃にリトアニア、舊ポーランド、ベッサラビア等を席卷し、一舉にスターリン線に迫つて全面的にソ軍を崩壊せしめた鮮かな手ぎわと、ソ軍のまごつきぶりとを回想しつゝ世界の軍事評論家の意見の一致してゐた獨逸の短期即決戦は案外にも、最後の土壇場になつて今一息の所で嚴寒の爲戦闘至難となり一時獨軍の猛攻は中止されたとしてもソ軍のレングラード籠城戦なり、モスクワ死闘戦なり其の抵抗振りは靱強で執拗、全市を要塞化し、死守奮闘市民最後の一人までも戦線を墓場としたあの慘烈悲壯な場面と照し合せて、一通り赤軍の價值とその底力の強さを研究して見ることは、吾人としてソ聯の總力を推知する上に於て價值尠からざるを感ずるのである。

赤軍の近代戦裝備と假想敵國

ソ聯赤軍の本格的な對獨作战は、嚴密に言へば一九三五年、かのスターリン肅正工作の槍玉にあげられた當時の國防人民委員代理のトハチエフスキー元帥の畫策した東西兩正面獨立作战の確立からで

ある。當時ト元帥は獨軍の着々たる再建に刺戟されて、赤軍を近代戦に適應する軍隊に改編するの必要を認め、戰略的に於て従來傳統的の防守戦を一變し飽くまで攻勢戦方式を採り、攻撃精神を極度に推奨しソ軍の一大缺陷たる鈍重性を嚴戒し、獨斷專行の信念を奨勵し狀況の變化に應ずる能力を練成する等大に割期的大肅軍の成果を企圖した。即ち西部國境に於て獨軍を目標とし、東部戦線を豫想して日本軍を目標とし、同時に東西兩方面戦を行ひ得るやう、赤軍の増強と近代戦化に努め、徹底的進攻戦を推奨し、戦場を敵國內に求めて敵を包圍殲滅せんとする積極果敢な戦闘指導の方針を決定した。所がこの大改變にあきたらない舊赤軍幹部連は各々戰略、戦術上の意見を固執して容易にト元帥の新戦法に遵ふを肯んじないのみならず、スターリンはこの急轉直下の大方針に不安を抱き、遂に反政府陰謀露見の科を以て、一九三七年その一味徒黨と目せられる優秀なる赤軍幹部とともに折角出來あがりかけた新赤軍を抹殺してしまつた。

赤軍は再建途上で獨と開戦した

ト元帥一味徒黨を暗に葬り去つてからの赤軍は、所謂重大なる缺陷を生じたが、赤軍の近代戦化工作は、ソ聯軍需工業の進展に伴つて着々として進められ、ウオロシロフ國防人民委員の後を繼いでこの地位に立つたチモシエンコ元帥が、赤軍の再建に邁進し各種の軍制改革を行つて、赤軍の缺陷補

充に躍起となつてゐた。しかしなんと言つてもト元帥事件は赤軍の弱體暴露であつて、これがため赤軍は對獨戦に自信がなく、政府の政治工作援助にかゝつて、暫時對獨休戦に甘んじ、その間に赤軍の再建を完了し、周邊に軍事基地を擴張して來るべき對獨戦に備へんものと汲々たる準備時代に偶々ソ芬戦が開始されたのである。

一昨年十二月の對芬戦にソ軍の攻勢は惨敗

ソ軍は狙撃十二師團、機甲二軍團（戦車約八〇〇）特別砲兵一七聯隊、飛行機約一、五〇〇の優勢を以て芬軍僅かに十二師團飛行機約一〇〇の劣弱軍に對し十二月一日各方面共零下三十度積雪一米の酷寒を冒して、ソ芬國境を突破し攻撃行動を開始したが、天候氣象の困難を利用する芬軍に阻まれて作戦は意の如くならず、加ふるに晝間の短少と寒氣の到來はソ軍をして全く作戦行動を滯滞せしめた。殊にカレリヤ地境（ラドカ湖とフィンランド灣との地境）のソ軍の對芬軍攻勢は一週間の攻撃準備と兵力狙撃師團十二、戦車五旅團及多數の砲兵を以て急襲戦法により一舉に突破せんとしたが、芬軍の頑強なる抵抗に阻まれ約十日間の攻撃も、徒らにソ軍の損害を増すのみで、陣地突破は勿論、一部の陣地さへも奪取することが出來ず、一方彈藥資材は缺乏し戦意は喪失し全く醜體を暴露して一時攻撃を斷念するより外に手段はなくなつたのであつた。のみならず十二月下旬より一月月上旬に亘りソ軍は

スオサルミ附近に於て二ヶ師團、ラドカ湖北岸では一ヶ師團と戦車一旅團は芬軍の奇襲に依り全く殲滅的大打撃をうけて惨敗し、ソ軍が一時占領したベッサモ地方も奪回せられ、其の機に乗じ百機足らずの劣弱なる芬軍飛行機は斷然攻勢に出で、ソ軍根據地を片端から攻撃する等意氣頗る軒昂たる氣勢を示しソ軍は散々な目に遇つて世界的に面目をまる潰しにしたことがあつたのである。

ソ軍統帥者の貧弱

對獨作戦にソ聯が北方にウオロシロフ元帥、中央にチモシエンコ元帥、南方にブジョンヌイ元帥を配置して陣容を整へ、尙ほクーリク元帥、シヤボンニコフ元帥を控へ一見五元帥の威容堂々たるの感あるのみならず、その下に大將格としてジュエーコフ、メレツコフ、チュレネフ、アバナセンコ等の將星威儀を正して、三軍を叱咤する物凄さの形態を備へてゐるが、さて其の統帥能力はどうであらうか。もつともこの内でウ元帥とブ元帥とは國內戰當時何れも騎兵團を指揮し歐露平野を東西に馳驅した體驗はもつが、何んと言つてもこの國內戰は相手が訓練も裝備もない一種の烏合衆團を蹶散らす位の戦さで、到底近代戰の機動作戦、而かも優秀な獨軍を向ふに廻して一大運動戰を展開し雌雄を決せんとするには餘りにも舊戰術型のものばかりであつた。爾餘の將軍連の顔振れも、一軍團長としての指揮技能位はあらうけれども、現代の軍組織が量的に膨脹し、老大なる形態となり、しかも速戰即決

を要する野戰の運動戰を指揮運用するには餘りにも未経験者が多かつた。これをト元帥とかブリユツヘル等の過去の大物に比すれば頗る貧弱で、うたたソ聯としても今更ながら痛惜の感が深く、家貧にして良妻を想ふの實情にあつたであらう。

獨の精銳を相手に長期後退戰を策したのはソ聯の誤策か？

元來ソ聯軍としては、近代戰化の裝備と積極的攻勢戰略を極度に推奨はしたけれども一面に、ソ聯の地理的立場と國民性とに立脚して防勢作戰の傳統的自信を破棄することは一寸困難な問題であつた。なぜなればソ聯の如き曠大なる地理的地位と人的資源（約一億七千萬人）及び極寒襲來（十二月中旬以降零下三〇度内外一月酷寒時には零下四〇度に下ることがある）等の關係から、ソ聯としては侵入軍を成るべく奥地深く誘致し、焦土戰術と寒氣の襲來、寒さと飢とに惱ませ後方輸送線の延長よりする補給の困難に乗じ、主として後方擾亂による敵軍の疲勞困憊によつて自滅的崩壊をせしめるのを唯一無二の最後の手段たる傳家の寶刀とし、國を擧げて自信滿々の確信を持つてゐたのであつた。例へば國內戰當時竝に外國干涉軍との戰に於て、彼等が勝利を得たと思ふのは結局この戦法すなはちバルチザン戰術ではゆるクツトゾフ戰術であつた。

ところが今回の對獨戰は、初めから獨逸の畏に陥つて、其の主力軍を遠く國境の第一線に集結し、

而かも獨逸から急襲的打撃を受け、さんさんの惨敗をなめてスターリン線に引込み、いざ立ち直らんとすれば獨軍は其の直後に追撃尾撃し、四方八方に飛び廻ると言ふ快速進撃をやつたのでソ軍としては手も足も出す餘地がなくなつた。これは初めから、しつかりした赤軍建直しの積極戦法でやるのか或は傳統的の後退戦でやるか、何れにせよ確實なる統帥方針がつかかなかつた關係もあらうが畢竟するに曖昧な立ちあがりになつたのが、そも／＼の手違ひであらう。モスクワ危し！の危険信號は、已に十月上旬頃より屢々全世界に放送された。十月十五日にはソ聯政府の一部は已にスヴェルドロフスクに移轉を開始し、各國大、公使に重大事態の切迫を告げ不祥事件の惹起を避ける爲館員並に居留民の避難を勧告し來り遂に首都モスクワの放棄を決意したほど、ソ聯としては危機増大を直感してゐたに拘らず、尙ほ那翁軍撃退の夢醒めず、焦土迎軍の僥倖を頼みとして一意國民の愛國心喚起に躍起となつてゐたのである。これはソ聯軍國防方針が、依然として性格的にバルチザン戦に魅力を感じてゐることを證するものであると共に、その實施は獨逸軍に誘致されて虹蜂とらずの海鼠戦略になつたやうである。

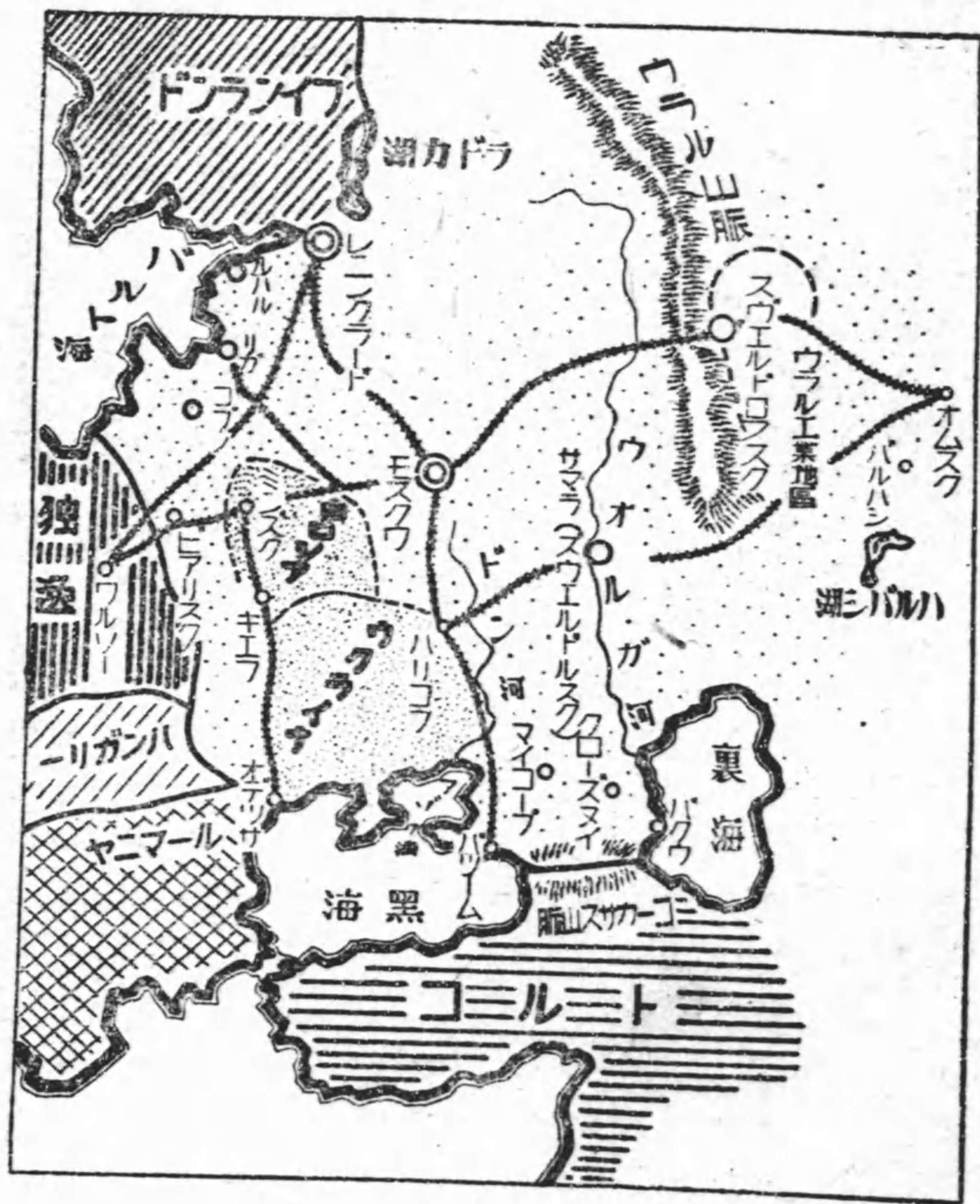
近代戦で果してバルチザン戦術がどれだけの効果があるか？

空軍の最も發達せる近代科學戦殊に優勢無敵の獨空中艦隊の活躍で制空權を握られてゐるソ聯軍が

果して傳統的誇りとしてゐるバルチザン戦法が克く奇效を奏するかどうかと言ふことは、ソ聯でも最も論議されてゐた點である。スターリンのごときもいち早くソ聯重工業基地が南露ウクライナ地域に偏在して、一朝これら重工業地帯が敵機によつて潰滅された場合、ソ聯の戦闘能力は甚大の危局に直面し、遂には戦力の喪失を來す懼れあるのに著目し、第一次五ヶ年計畫當時よりウクライナのドネツ・ドニエプル（略してドンバスと呼ぶ）の綜合工業地帯に代るべき、第二のドンバスをウラルに建設すべく調査に著手し、ここにウラル・クズバス綜合工業地帯を建設した。

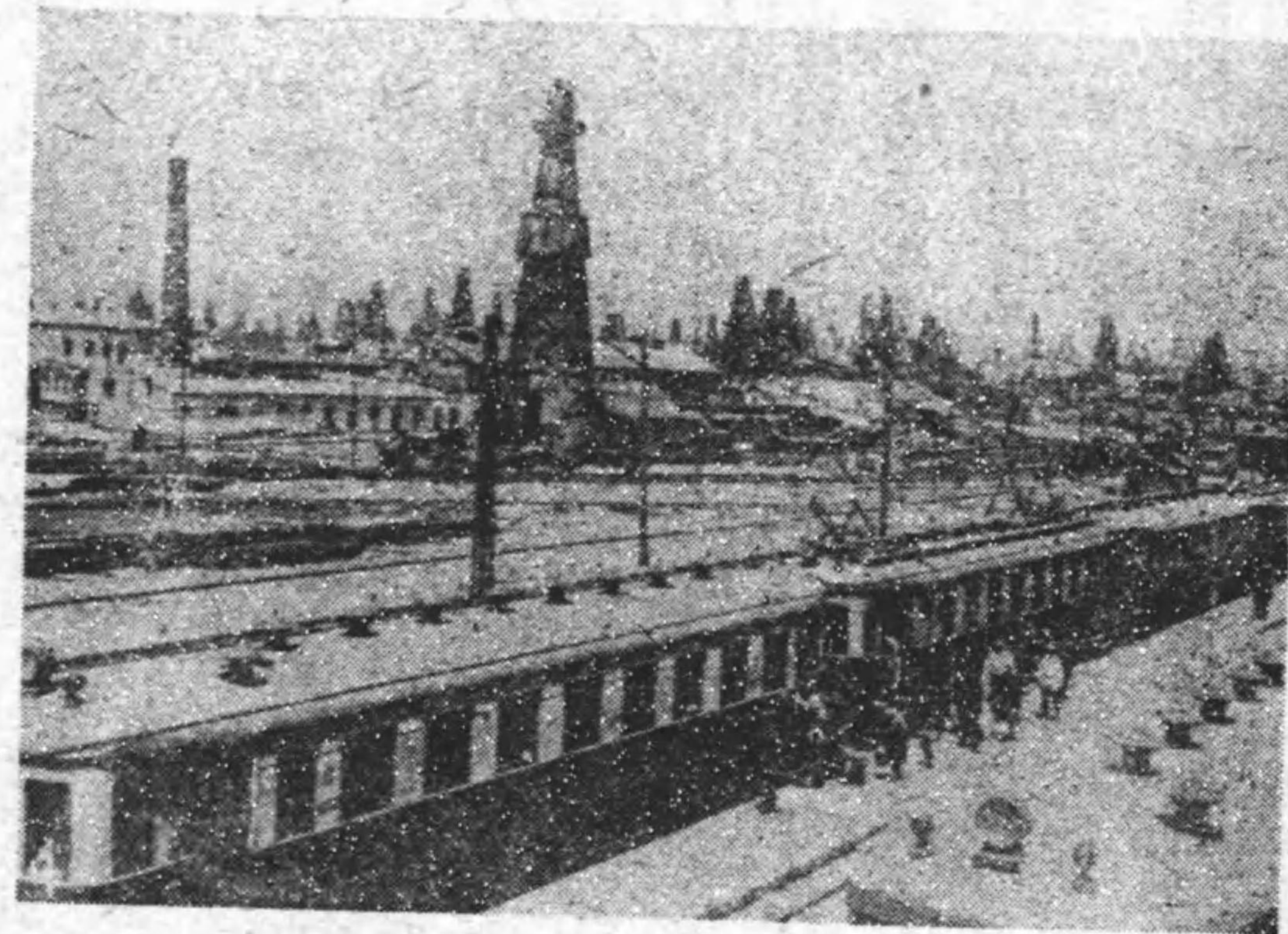
即ちクズバスを中心とするウラル一帯に一大工業都市が出現しウラルの鑛産物とクズバスの石炭とを結合し、諸種の冶金、機械、化學工業を起しマグネシウム、アルミニウム、鉄、鋼、銅、鉛、亜鉛、ウラルの精銅能力年五萬トン以上、ニッケル製造能力一萬五千トン、アルミニウム二萬五千トン、クズバスの製鐵能力は二百萬トンと言ふ盛況を呈してゐることは、ソ聯政權が將來ヴォルガ河以東に退避してゐる場合此等の資源は見のがすことの出來ぬ原動力である。

ソ聯が長期戦を企圖すると言ふ根本は、このウラル山脈を背景としてスヴェルドロフスク（歐露と西比利亞との國境で、ウラル山麓の都市）一帯の資源構成地帯を培養地とし、遠く西比利亞のバカイル湖畔、沿海州コムソモルスク、中央亞細亞にも重工業地帯が建設される事を條件としてゐる。カラ



六五

り一度コーカサス作戦開始せられこの資源を失ひ又ウクライナの穀物及各種の機械工業、農具類等を獨軍に占據されたときは、生命線の切斷であり、赤軍潰滅の致命的打撃であることは當然であらう。そこでソ聯が豫ての寶刀としてゐるバルチザン戦法を行ふとしても、軍需原動力



田油ータバの岸沿海ビスカ

六四

カンダの石炭、コウンラドの銅とを結合する中亞のバルハシ・コンピナートの製銅能力は約十萬トン其の他一九三七年ウラル以東の鉄鐵生産高はソ聯全部の三二% (五百十七萬トン、製鋼七十二萬トン) を有し、各種の食糧品、織維工業、木材加工等も各地に發達し、専ら歐露依存の脱却に努めつゝあつたから、將來モスクワ陥落しヴォルガ河以東に退避したソ聯としては佛蘭西の一敗地にまみれたやうな惨めなことはない。

然しながらウクライナ、コーカサスを失つた曉はソ聯としては重大な大打撃で、ソ聯石油の八〇%はバクウの油田 (一九三八年の年産二千三百九十一萬トン)、グロズヌイ油田 (同年二百八十萬トン) マイコープ油田 (同年二百三十萬トン) であ

たる石油の缺乏、武器製造能力の減退は、近代戦に於ける大なる疑問であると共に、獨軍が之に對應して萬遺漏なきを期する所以であらう。

一舉にモスクワ攻略を眼ざす獨逸軍の進撃

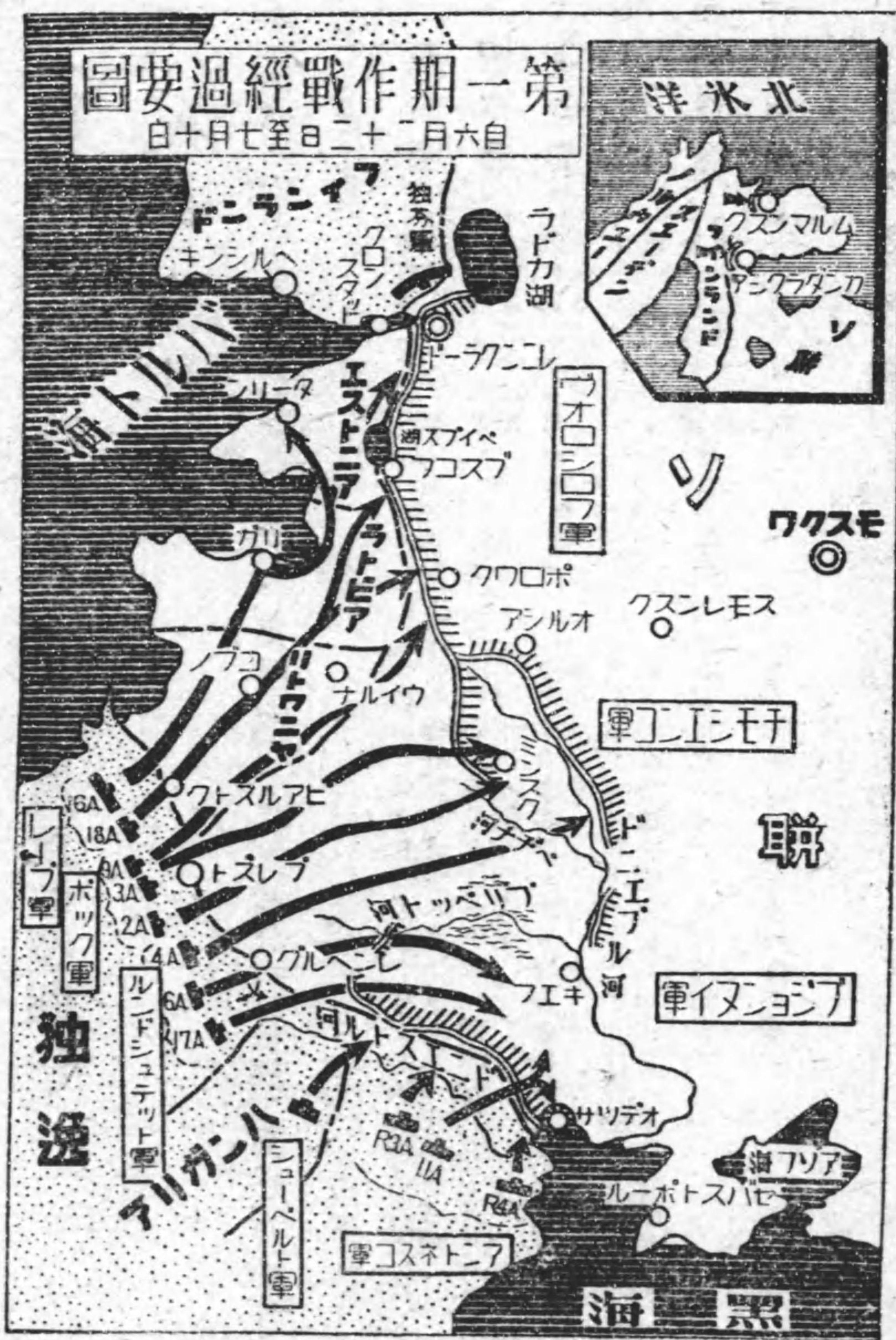
作戰期別

獨逸軍攻勢作戰の經過を大體左記の様に區分し、更に北部、中部、南部の三戦線方面に分け順序を追つて述べることにする。

- 第一期作戰 (自六月二十二日 二十日間) (主として國境突破舊ポーランド領内殲滅戰とバルト沿海國の席卷スターリン線一部の突破戰)
- 第二期作戰 (自七月十六日 一ヶ月間) (主として中央軍スターリン線の完全突破とモレンスク地區の攻略戰)
- 第三期作戰 (自八月二十三日 一ヶ月間) (主として南部ドンバス地方の作戰と黒海沿岸地區の掃蕩戰)
- 第四期作戰 (自九月二十四日 一ヶ月間) (主として中央軍のモスクワ進攻戰並に南部ハリコフの攻略戰と北部レニングラードの包圍戰)
- 第五期作戰 (自十月二十五日 約四十日間) (主としてモスクワの包圍戰容)
- 第六期作戰 (十二月八日以降) (冬季作戰中止と春季作戰準備)

第一期作戰 (自六月二十二日 二十日間)

第一時期作戰經過要圖
 (自六月二十二日至七月十日)



一、獨逸空軍の疾風の奇襲戦！

獨逸空軍の活躍とソ聯空軍の壊滅

獨逸空軍司令官ケツセルリング大將、レール大將等の率ゐる三空中艦隊約一萬機の飛行機は、六月二十二日午前三時五分地上部隊の全線に亘つて國境突破の火蓋が切られたと同時に、まづ爆撃飛行隊は舊ポーランド領域並に西ロシア各地のソ聯飛行場に對して低空飛行を行ひ奇襲攻撃を行つた。ソ聯側では何れも敵機の來襲とは夢にも氣が付かず情眼を貪つてゐて、キエフ、オデッサ(黒海の港)、セバストポール等はあかくと電燈を點じ、不夜城を現はしてをり、爆撃目標としては好個の指針を與へられたやうなわけで、獨逸は地上乃至格納庫にあつた敵飛行機に、思ふ存分爆撃を加へ悠々と猛威を揮ふことが出來た。

ヒ總統大本營六月二十九日の戰果發表に依ると、開戦第一日だけで次のやうな驚異的爆撃戰果の數字と制空權の獲得を認めてゐる。

空中戦に依り撃墜したもの 三百二十二機
 地上爆破した機數 千四百八十九機

計

一千八百十一機

七〇

獨機の損失

三十五機

第二一日（六月二十三日）

空中、地上の撃墜乃至爆破

二千五百八十二機

これによつて見るとソ聯空軍の第一線機数は概ね約六千機と推定されてゐたから、開戦第一、第二日で約半數機は喪失したわけで、何れにせよ赤色空軍は無敵獨空軍の前にひとたまりもなく壊滅の悲況に陥り、其の空中勢力は全く均衡を失し、獨機をして思ふがままに猛爆を行はしめたものである。

とは言へ、赤軍飛行機も全くうち疎められてゐたわけではない。二十二日の第一日には愈々獨、ソ開戦と知るや直ちに出勤して、東プロイセンとポーランド國境方面の獨逸軍基地（軍需、資材の集積してある作戦上樞要の土地）襲撃を企だて、爆音勇しく天を覆つて編隊攻撃を行つたが、何しろ獨逸戦闘機メツサーシュミットの時速七五〇キロに較べるとソ聯機の速力は格段の差があるので、忽ち獨逸戦闘機の追撃を受け、壯烈なる空中戦となつたがばたくと撃墜されてしまつたのであつた。

現に其の日ポーランドの戦線上空に姿を現はしたソ聯空軍は、例の米國製マーチン爆撃機三十五機であつたが、待ちかまへた獨逸の最新型戦闘機メツサーシュミット一〇九F型ハインケル等の猛鷲は飛びつくやうにソ聯のマーチン機の前後、上下の四周から追取り巻いて空中戦闘を開始し、射撃が始まると間もなく、ソ聯機七機は火を吐いて撃墜されてしまつた。赤軍機の編隊はかなわじと、意氣地なくも直ちに踵を返し四散しつゝ逃亡を企てたが、獨機は快速を利用し前後左右から縦横の攻撃を加へ、更に二十六機を撃墜し辛じて逃亡し得たのは僅かに二機に過ぎなかつた。

撃墜された赤軍機からは飛行士がソ聯獨特の四角の落下傘で飛び下り全部捕虜となつた。

かくて獨空軍は引つゞいて地上部隊と協力し、急降下爆撃による敵陣地の粉碎、敵戦車には爆弾攻撃等による焰焼打撃で、片ばしからソ軍の戦闘力を喪失せしめた。殊に追撃機、戦闘機は到る處に敵を求めてソ聯機を空中、地上に撃墜破し六月二十七日までに其の數實に四千百七機に達し殆んどソ空軍は約一週間で潰滅したのであつた。

二、沿バルト海を進撃した左レープ元帥集團軍の戦果

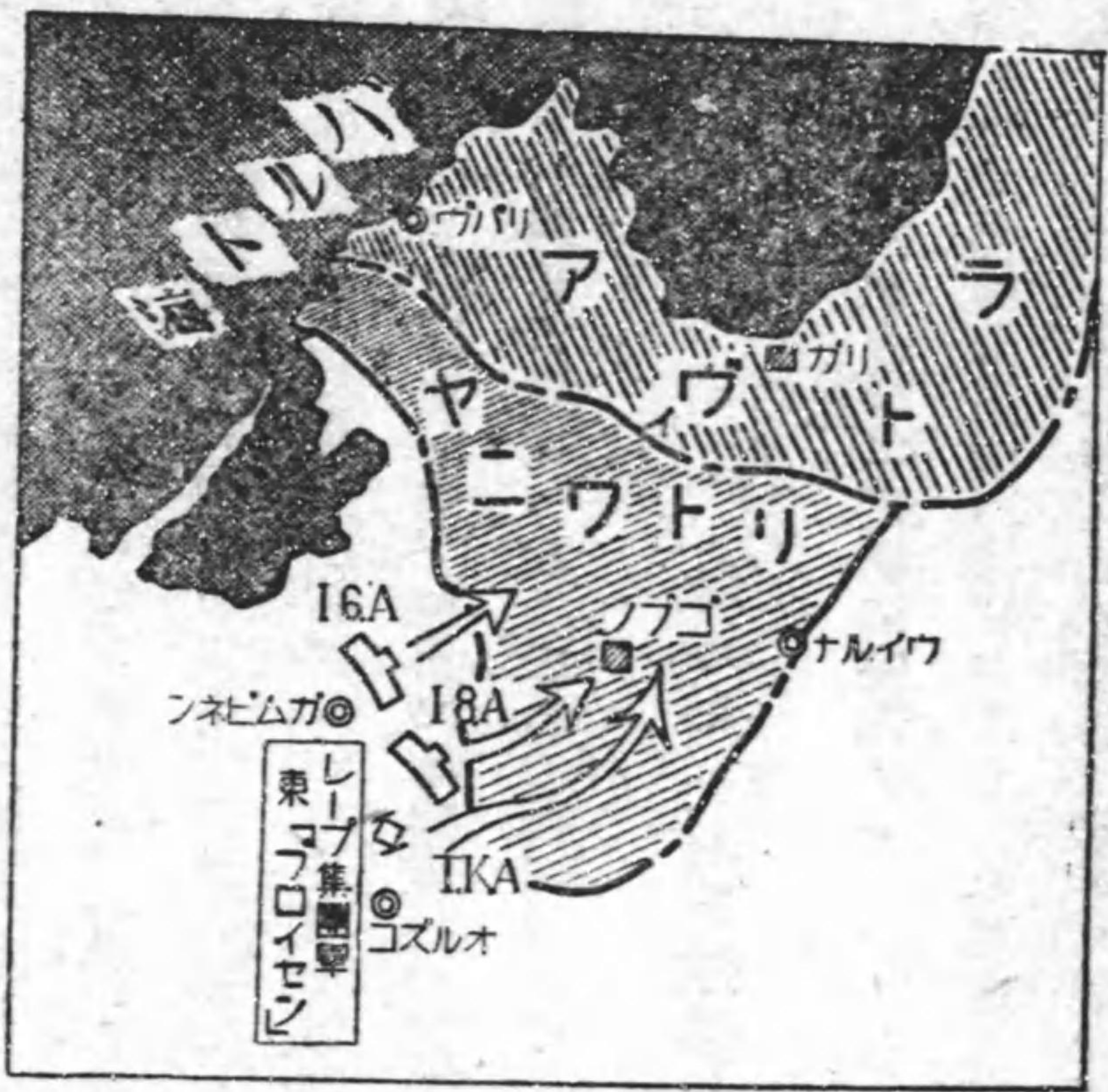
疾風迅雷リトワニア國に突進す

レープ元帥の集團軍は六月二十二日早曉、東プロイセンのオルズコ、ガムピネン附近に、前進を準備してゐた。其の前進配置は右に第十八軍、左に第十六軍、右側後に装甲集團軍であつて、命令一下

一齊に前進を始めた。

沿岸に於ける赤軍状況バルト海

ソ聯は曩きに獨、英兩軍が鎬をけづつて相闘ふ最中に何等の理由も、確たる聲明もなく獨外相リツベントロツプの發表にあるやうに、突如軍を進めてバルト海沿岸の小國リトワニア、ラトヴィア、エストニアの三國を侵略併呑し漁夫の利を占めて赤化した。赤軍の兵力は昨年に入つてから俄かに増大しあらゆる暴虐を擅にした。そして昨春三月頃から赤軍の將校や各方面に入込んだソ聯政治委員等は、戦争が極めて近き將來に逼迫してゐることを一般住民に警告し、戦争準備を促しはじめた。例へば有識階級の人々には次の如く宣傳したものである。



とを一般住民に警告し、戦争準備を促しはじめた。例へば有識階級の人々には次の如く宣傳したものである。

「獨軍の英本土上陸作戦なるものは殆んど不可能である。若しそれを強行すれば必ず獨逸は失敗する

であらう。然し軍事力と国力の不平等であると云ふ獨逸の最大の弱點は、現状のまま獨英が脱合つてゐては長期戦に耐え得るものではない。兩國ともに疲勞困憊の途を辿るであらう。赤軍が本來の使命によつて武器を執つて立つのはその秋である。而もその機は眼前に迫つてゐる」と。

ここで注目すべきことは、ソ聯としてはまさか今直に獨逸軍が突如として奇襲作戦によつて猛然攻勢作戦に出でソ聯領に進撃して來ると言ふことは、全然豫期してゐない迂濶な點であつたやうだ。つまりソ聯首脳部の觀測判断の基礎は、この二年間全歐洲にやむなく戦火を擴大して行かなければならなかつた獨軍が、到底ソ聯に向つて進攻する餘裕などある筈がない。現在（つまり開戦當時）獨ソ國境に集結してゐる約百數十個師團の獨軍は、我が赤軍の動きに對する東部防衛策であり豫防的な措置に過ぎないと誤斷し、ソ聯側では上下悉く枕を高くしてゐた事實は見逃すことの出來ない實狀であつたらしい。

赤軍の周章狼狽と獨軍無敵の進撃

事實バルト海沿岸地方に進駐した赤軍は、其の數は確實ではないけれども數十萬の大軍であつた、そして其の駐屯目的は主として休養主義をとり、宿營に便利な各都市や富有な村落に徒らに集結して無爲に日を暮らし、苟くも戦路上の措置である國防第一線の防備強化である陣地の構成とか、兵力配

置、交通整理、輸送機關の整備とかは殆んど抛擲して顧みなかつたことは確なやうである。

赤軍の考へとしては、自分からイニシアチヴをとらぬ限り、獨逸軍は到底ソ聯に對し攻勢動作はなし得ないと言ふ樂觀的見地を持ち、上一般に油斷大敵の大錯誤を平然として抱き、恰も火山巔頂に享樂しつゝ仙境に遊ぶを夢みてゐた感があつた。其の原因は赤軍首脳部が明らかに獨逸の國力、兵力、戰鬥準備の認識を誤り獨逸何をか爲さんの見縊りが、開戦初動の戰鬥を、甚しく一方的ならしめたものと觀測が出来る。

これはソ聯全體の雰圍氣で七月三日スターリン首相は正直に次のやうに告白して世界に發表した。「若しもソ聯領土の一部が獨軍の爲に占據さるるが如き事態に立到るとも、それは主としてこの獨ソ戰が獨逸に有利、ソ聯に不利なる條件の下に開始された一事に原因するに外ならぬ。即ち獨逸は開戦に先だち百七十個師團と装甲兵團の大量、空軍の殆んど全能機數をソ聯國境に集結、命令一下直ちにソ聯領内に侵入する爲の萬全の用意を講ずべき準備命令を下してゐたものである。然るにソ聯の動員は未完了、裝備は不十分であつた。獨軍侵入の報を受けた時は我が軍隊は國境方面に輸送途中であつた。

然しながらここに特に重視すべきことは、獨逸が全世界から侵略者の烙印を捺されると否とを何等

顧慮することもせず、突如として獨ソ不侵略條約を侵犯した裏切行爲に出たことである……」

要するにソ聯は獨軍の進撃に對應する準備がなかつたと正直に言つてゐる。つまりソ聯首脳部の判斷では「戰爭は不可避で必ず来る。しかしその戰爭は赤軍にとつて犠牲少く、絶對有利な條件の下に戦はれる」と言ふ結論の下に、悠然と戰備を進めてゐたのであつた。かうした情況の下に、突如として獨軍の奇襲的攻撃を受けた赤軍の心理的動搖が、如何に甚大且深刻であつたかは想像し得るのである。

獨軍の著實な戦法とリトワニア國の中心都市コブノ、ウイルナの陥落

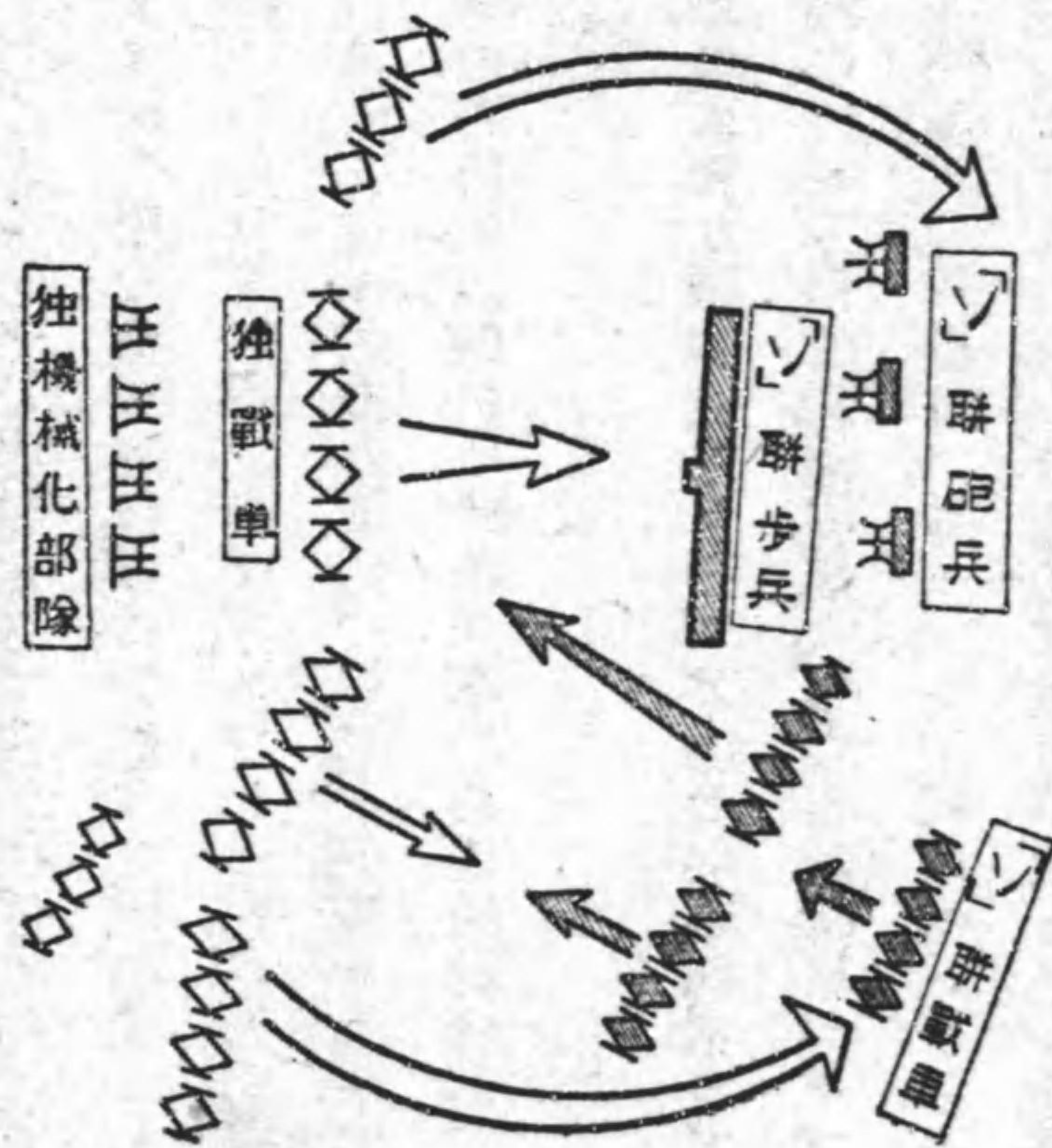
獨逸のバルト沿海諸國に進入した左進撃軍レーブ元帥麾下の第十六軍並に第十八軍、ヘーブナウ中將の装甲機械化集團は、リトワニア國に進入すると共に二日間で首都コブノ、並にウイルナをも一舉に攻略した。而かもこの地方は赤軍が最も多く兵力を集結してゐたところで、この二日間に赤軍のなした凡ては、殆んど抗戦にあらずして只だ上下面喰らひ全軍周章動搖して、如何にして自己軍隊を纏めて後退するかといふ努力だけであつて、二、三ヶ所に起つた激戦の外は何等戰鬥らしい戰鬥は行はれてゐないのである。殊に獨軍はソ軍が食糧や物資を奥地へ移送する追さへない程急迫してソ軍に餘裕を與へなかつたのである。

赤軍の退却路に沿つた各大小の村落、部落は、獨空軍の爆撃と砲撃とに加へて赤軍自身の砲火の犠牲になつて全村全滅の慘狀を呈した。

コブノ(リトアニアの首都)附近の戦車戦闘

ソ聯軍は算を亂して敗退し、獨の装甲兵團は其の快速を利用して四方八方から追撃した。

コブノ北側獨の戦車戦闘思想要圖



六月二十五日(開戦第四日)雪崩をうつて退却するソ聯軍の間を縫つて、突如ソ軍の大小數百の戦車群は轟々の音を立て、健氣にも勇躍して追撃中の獨軍機甲兵團に向つて反撃を開始し、友軍の危機を救はんと突進して來た。獨逸のヘーブナウ司令官は小賢かしきソ軍戦車のふるまひに一舉殲滅の好機到來とこれ又陣容を立て直す追もななく果敢に、突進してはしなくもここに一大戦車戦は展開された。

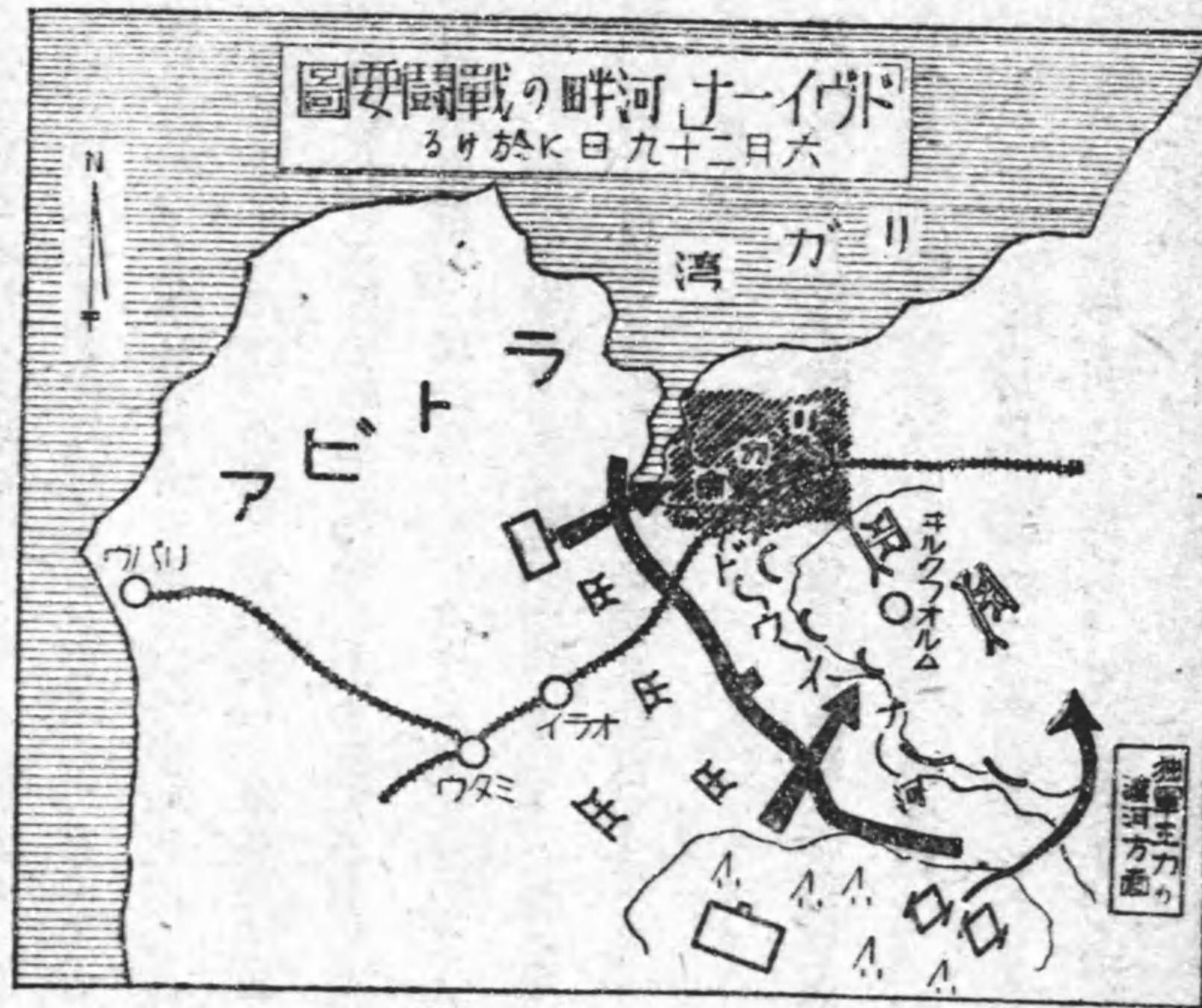
このソ聯戦車軍の逆襲は、餘りにも友軍の惨めな敗退ぶり、このままでは遁ぐるも死！ 戦ふも死！ の窮地より突嗟に案出されたものであらうが、其の攻撃は果敢に實施せられた。ソ聯の戦車群は獨軍に向つて突進したが、或は獨逸機械化砲兵の爲に正面から猛射され、または側方から射撃された。獨軍戦車は正面、側面、背後からソ軍戦車をおつとり圍んで各戦車火砲は火を吐いて猛撃し、殊に一絲亂れざる輕快敏活な指揮行動の鮮かなのに反しソ軍戦車は大小俊鈍取まぜ、速度まちまちな不齊行動戦車群で、獨逸戦車隊が凡ての點に優れてゐるのみならず、戦車指揮の卓絶巧妙なる威力には到底敵し得ず、遂にソ聯重戦車二百臺以上は爆破又は捕獲され、約百五十門の大砲と數百臺の自動車は獨軍の爲鹵獲された。新な戦場には至るところ、破壊された戦車の殘骸と人馬の屍が横はり悲惨な光景を呈した。

リガ市(ラトビア國の首都)附近の激戦と荒廢された死都

ドウイナ河畔(首都リガの東南側)の激戦！

六月二十八日獨逸北方集團軍の左進撃軍である第十六軍團はリトワニア國を席卷し、其の勢に乗じて一舉にラトビア國に進撃した。其の首都リガ市を攻略せんとするや、ここに端なくもドウイナ河を隔てて其の河畔一帯にソ聯軍の構築した砲兵陣地から一齊に獨軍に向つて砲戦は開始せられた。

獨砲兵團は直ちに之に應戦、ドウイナ河兩岸は彼我の戦闘激烈となり、其の附近一帯の家屋は殆んど破壊せられ、炎々たる火焰は天に沖し物凄い光景の裡に、ソ軍は遂に退却に決しドウイナ河にかけてある三條の鐵橋を爆破し、獨軍の渡河進攻を阻止しようとした。第一、第二の鐵橋は轟然たる響と共に爆破せられたが、將に第三鐵橋に裝藥填火しようとする刹那、獨逸決死の挺進工兵隊約三十名は奮然としてソ聯軍の彈雨を冒して突進し、身を以てソ軍の爆破作業隊に突進し、遂に獨軍挺進工兵の大部は華々しく戦死したが、それが爲辛じてこの橋だけは爆破せらるることなく獨軍戦車の突進に役立つた。引つゞきラツ



シユ大佐の率ゐる部隊はリガ市に突進し、その附近陣地の争奪戦と共に他面には壯烈なる市街戦を展開した。

三日間に亘るリガ市の市街戦

ソ聯軍は飽くまで抵抗する意氣を以て、市内目抜き議會議場を中心とするドイツ居留民區域一帯の家屋に堅固なる防禦施設を爲し、殊にセント・ピータ寺院、圖書館、ドイツ銀行等を占據して壯烈なる市街戦が展開された。これが爲リガ市街の約四分の一は全く焦土と化し、ソ軍が據つて抵抗したドイツ居留民地區一帯は、原形を止めぬまでに壊滅され、死屍累々として凄慘を極め、ソ聯軍の戦車、火砲、武器等は各所に遺棄散亂し、あるひは鐵兜等が焼落ちた煉瓦屑の間に散亂し、リガ市は全く死都の形狀に變り凄慘な形相を現はした。

かくして七月一日獨軍は堂々と、この死都の如きリガ市に入城した。獨軍の顔面は目といはず口といはず埃と油煙に燻つて黒人軍隊のやうであつたが、意氣はますます旺かんであつた。

ソ聯軍は主力の潰滅後、逃げおくれたものは、ちり／＼になつて附近の山林に隠れ、ユヂヤ人や共產化した一部農民と共に、赤色バルチザンとなつて、獨逸軍の手薄な部署を襲撃したが間もなく掃蕩されてしまつた。

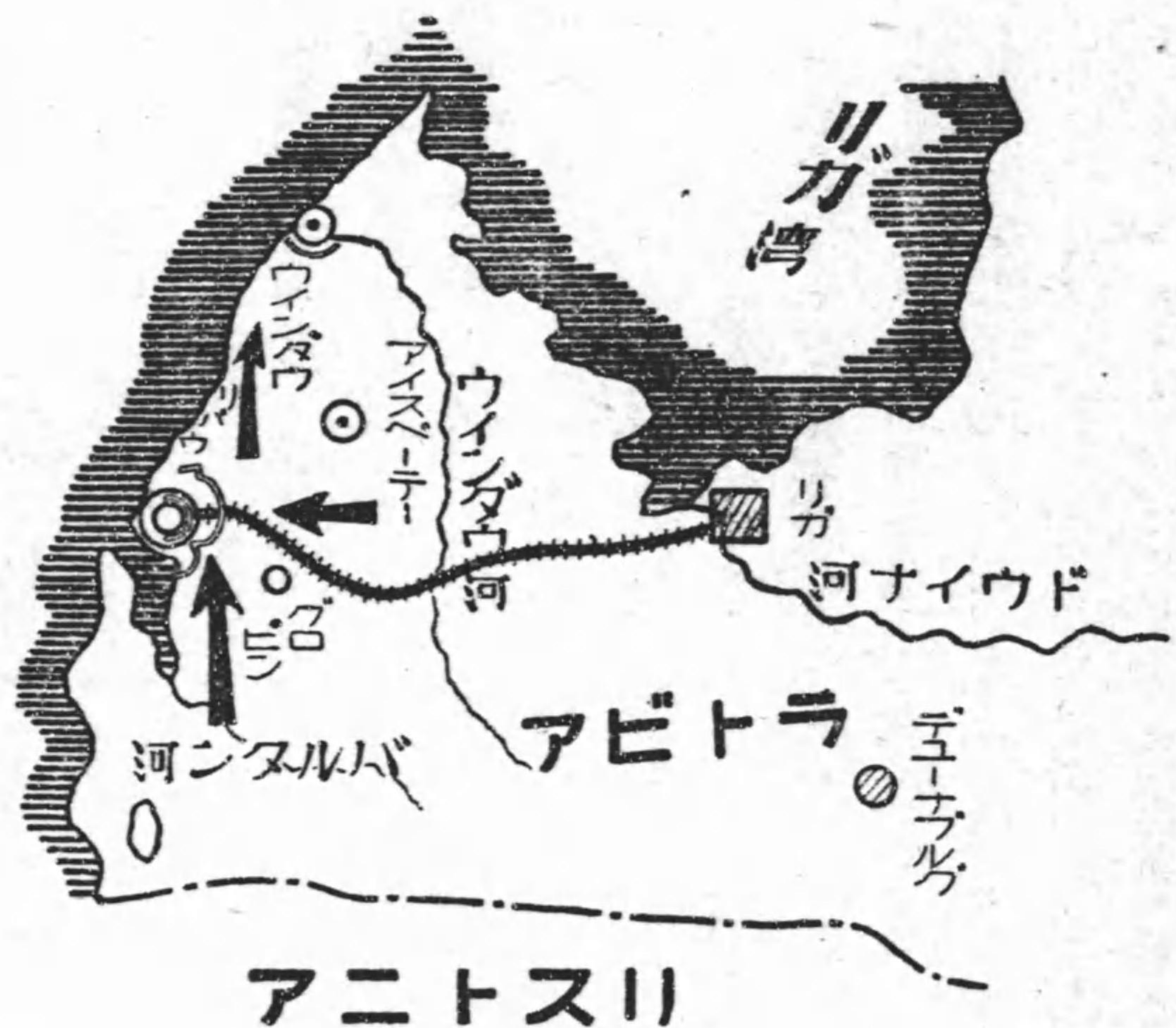
決戦死闘五日間、リバウ(ラトビアの西南にある港市)戦

リバウ海港占領戦は獨ソ兩軍の間に五日間に亘つて慘澹たる市街戦が行はれソ聯としては必死の決戦であつた。

當時の戦況の一端を獨逸通信記者は次のやうに報道してゐる。

赤軍はリバウ市防衛の爲、ありとあらゆる手段を總動員した。獨逸軍が全市を東、南、北の三面から包圍し巨弾の雨を降らしたので、彼等はなんとかしてこの重圍を脱出せんものと、水陸兼用の戦車をもつて各方面に夜襲を決行した。

共産黨員は女装して、獨軍砲兵陣地に潜入し若干の獨軍兵士を狙撃した。これは獨軍としても思ひもよらぬゲリラ戦であり又戦闘手段であつた。又屢々女兵士の陣中にあるを目撃した。ソ軍の最後と頼む堡壘を奪取攻略するためには先づ海岸至るところに設けられた堅固なトーチカ陣地を陥れなければならなかつた。市街戦は愈々其の抵抗峻烈且つ頑強で、獨軍としては新戦車砲、火焰放射器、手榴弾、重機關銃等あらゆる武器をもつて、これを撃滅せねばならず、しかも一軒一軒に破壊工作をして進まねばならなかつた。周圍の家の中からは、文字通り雨のやうに銃丸が降つて來た。家の窓ぎわには凡て土囊が積み重ねてあつて射撃設備があり、そこから婦女子が夫と共に銃をとつ



て抵抗した。やがて全市は濛々たる火焰に包まれ、黒、黄、白の煙はうづまき起つて一寸さきも見えない有様だつた。すべての防備線が突破されても敵の抵抗は煙のうちから續いた。街上至るところに、捕虜となつた赤軍兵士が見られ、その大部分は水兵で、中には武装せる市民もあつた。この様な凄惨な市街戦は恐らく今までにはなかつたらうと思ふ程だつた。

リバウ海港の占領は、まさに血をもつて購はれたのである。

かくて獨軍は戦場に休むまもなく、直ちに北進してウイダウ港(リバウ港の北方リガ灣北西岸)を占領した。

ウイндаウ港は十四世紀から十六世紀頃まではクールランド第一の港市であつたが、後繁榮をリバウに奪はれた。ウイндаウ河口にあり凍結期間極めて短かく輸入は石炭を主とし、輸出は木材、穀物、亞麻である。第一次大戦には一九一五年五月以來獨軍ニーマン方面部隊の陣地の一翼であつた。

獨逸空軍は沿バルト國方面のソ軍退路を遮断す

獨軍は地上作戦で沿バルト海のリトワニア、ラトビアを席卷すると共に、其の空軍は之に協力して爆撃機、驅逐機、追撃機よりなる空中艦隊を以て赤軍の後方連絡遮断に活躍、多大の効果を擧げた。即ち六月三十日まで、獨逸空軍はレニングラードに至る鐵道を數ヶ所に於て、殊にベイブス湖（エストニアとソ聯との國境にある。要圖参照）畔のプスコフ（レニングラードの南方三百キロ要圖参照）後方地區に於て鐵道を破壊し、赤軍の退路を完全に遮断した。

赤軍の焦土戦術と獨軍攻略戦法の妙味

さすがにリトワニア國に進撃した獨軍の眼には、ソ軍が焦土化した模様餘り多く見えなかつた。だが然し一度びラトビアに進入して見ると、開戦後獨軍の來著までに約一週間程あつたので、ソ軍としては苟も獨軍を益すると思はれる食糧の大部分は奥地へ搬び、輸送の餘裕のなかつた貯藏品倉庫には火を放ち、刑務所やゲベウの政治犯收容所の罪人まで手ぎわよく處分して退却した。

最もひどい惨状を見せたのは、デューナブルク、シャウライ等の都市で、全市が文字通り瓦礫と化したと言つても過言でない。ストーブの煙突だけが寂しそくに焼跡に突立てゐるのであつた。然しこれはソ軍の積極的な抵抗を示すものでなく、獨軍來攻にひまさへあれば、至るところ放火して焦土抗戦の消極的な戦略の犠牲に行はれたものである。

エストニアに至つては徹底的の焦土化である

エストニア占領には、さらにその後十日間を要してゐるが戦線が北へ行けばゆく程、又東へ延びれば延びる程、赤軍の焦土抗戦は徹底してゐたのである。

即ちエストニア國の町々や村落は、焼野ヶ原と化し、食糧は奪はれ、屋根のない家で、何百何千といふ避難民が全く食ふに食物なく、住むに家なきありさまで、悲惨な彷徨をしてゐたのであつた。

何しろ赤軍は、至るところ獨軍の電撃戦に包圍殲滅され、指揮の統一を缺き、戦略的に展開戦を指導する餘裕もなければまた闘志もなかつたやうで、結局赤軍が局部的に頑強なる抵抗をしたのは組織的統一ある指導でなくて、いはば各隊各個に、眼前の獨軍に對處したに過ぎない感があるのである。

したがつて赤軍がなぜかくも惨めな後退ぶりを餘儀なくされたかと言へば、赤軍全體に有機的な戦争指導が缺けてゐたこと、竝に獨軍に比較して軍の素質、兵器の優劣が主なる原因で、其の外いくら

も理由はあらうが、要するに獨ソ、不侵略條約以後の共產黨のヒットラー研究が、いたづらに理論的に走りすぎて、獨の東方出撃は獨英戰爭中は現實せずと、樂觀しすぎて甘く見てゐたことが根本的に大きな背景をなしたのであらう。

つまり共產黨の理論も、ソ聯の戰爭科學も、ヒ總統の心理分析に敗れたのである。スターリンにふさはしからぬこの「甘さ」は、ヒ總統の端倪すべからざる「強さ」と對照して、モスクワ陥落一步前まで進展した戦果を味ふべきであらう。

翻つて獨軍の戰術なり戰爭指導を見ると、そこには別段從來と異なつた新戰術や新兵器は登場してゐないことは前述「第三章獨逸作戰の妙」で書いた通りである。ただ對ソ戰では獨逸軍が西部戰場で英、佛、白、蘭軍を打倒した場合と少し趣を異にしてゐるのは次の點であつた。中央突破に成功した装甲師團を先頭とし、次から次へと敵陣地帯を突破するのであるが、ソ聯軍は獨逸の装甲師團が陣地を突破前進後、其の兩側から反擊的に突破孔を閉塞して、先頭に行く装甲師團を孤立無援になさんとするから、獨逸軍としては西部戰場のやうに遮二無二に装甲師團を獨立させて敵の側背後に突進せしめ、遺憾なく其の機動力と戰鬥威力を發揮せしめる戰法は危険であるとして、必ず慎重に後方の機械化師團及歩兵師團と密接に連繫しなければならぬことになつた。其の爲、先頭に突進する装甲師團が

或る距離を前進すると、一時停止して後方部隊の來著を待つと言ふ方法をやつたから、戰況發展の景況が西部戰場のフランゲース殲滅戰のやうに華々しく水ぎは立つて、あつと言ふやうにやれず自然間歇的であつた所もある。

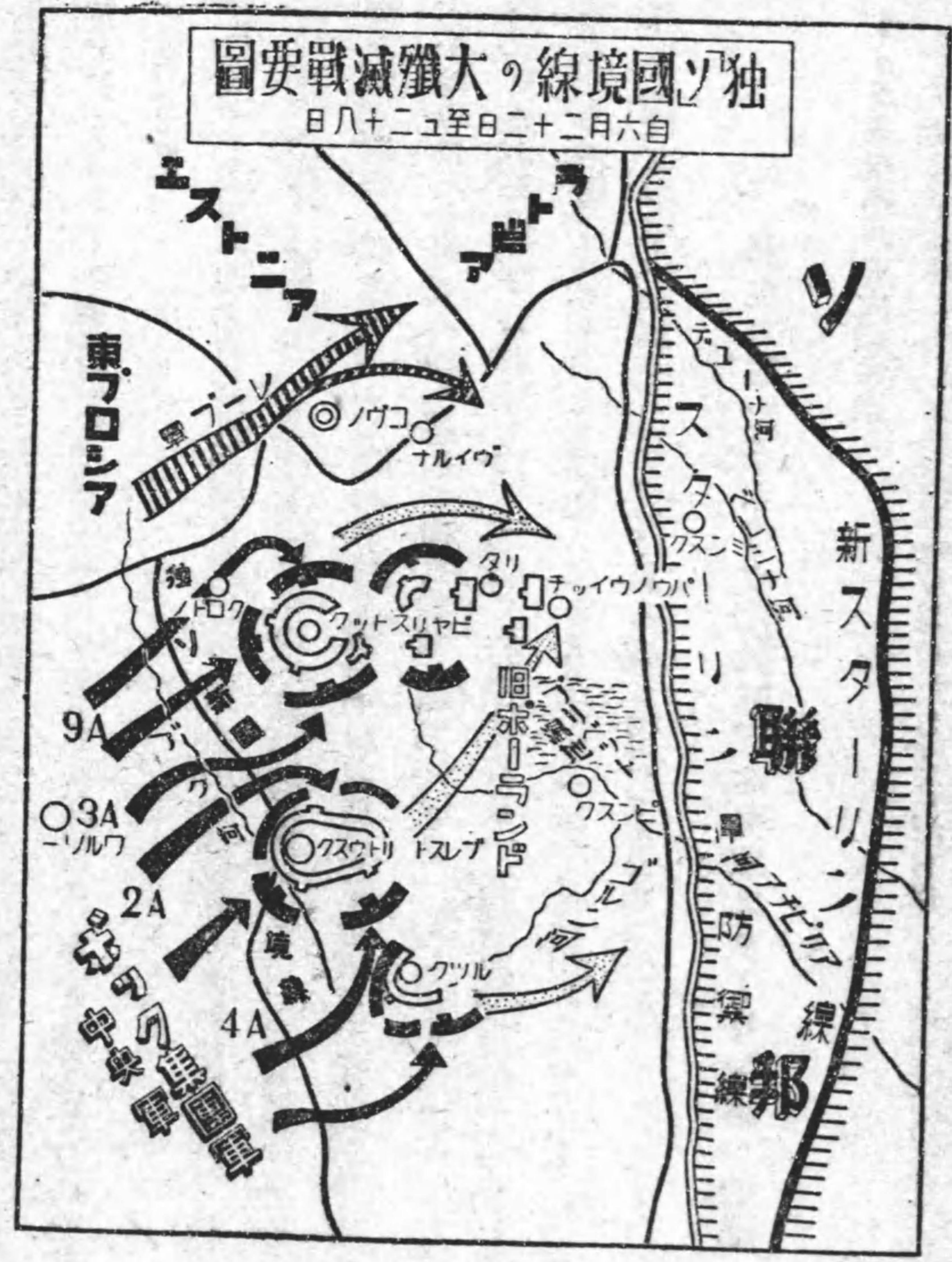
然しながら所謂ヒ戰法の根本方針は不變であつた。中央突破に成功した装甲師團は、後續機械化師團と連繫しつゝ、急轉二分して、一隊は更に敵軍の心臟部（指揮組織である司令部、大砲兵群等）に向つて突進させ、別の一隊は側面から敵の背後に廻つて包圍態勢をとると云ふ戰法を、廣大なる戰場の各所で大小の規模とりどりに繰り返して捕捉殲滅したのである。

和蘭攻略にはさかんに落下傘部隊を降下させて活躍させたが、英佛對戰には殆んど用ひないのと對ソ戰でも尨大なる地勢と赤軍兵力とを顧慮してあまり落下傘降下は採用してゐないのは、獨軍の妙味が狀況に應じて機宜の戰法を講ずるところにある事を物語つてゐる。

三、獨主力軍たるポツク元帥麾下中央軍スターリン線へ進撃

プレスト・リトウスクの大殲滅戰

開戰第二日六月二十三日には、獨ソ國境の最要衝たるブタ河右岸のプレスト・リトウスク市が獨軍



に占領された。

獨軍の對ソ電撃戰は疾風迅雷的にソ聯國境を突破し、まづ空軍の猛烈な爆撃と、大規模な砲兵集團の砲撃によつて、舊ポーランド領のソ軍第一線兵團の據點であるブ市に強烈な急襲を決行した。

二十二日早曉、ブク河左岸地區には獨砲兵團の大展開の下に、歐戰開始以來未曾有の大砲撃は午前三時十五分を期し一齊に開始され、大小の巨弾は雨霰と瀧の如く市内に落下し、砲煙は天を蔽つて暗く、加へるに上空からする雷雨の如き爆撃は、天地を震動し獨軍の砲、空爆によつてコンクリート製の各燃料倉庫はさながら燃ゆる薪のやうに飛散し、周圍一帶は火の海と化し、火藥庫は轟然たる音響と共に爆破して凄慘たる修羅場と化した。

ソ軍砲兵は全く沈黙し、戦慄と狼狽のうちに手も足も出でず、その間隙を狙つて、獨歩兵部隊はあらゆる歩兵火砲、機關銃掩護の下に手に手に手榴彈を投じつゝ敵堡壘に剽到、次から次へと敵陣地を奪取し、遂にソ聯が新國境の護りと頼むブ要塞はまたたく間に蹂躪されてしまつた。このプレスト・リトウスク攻略につき某從軍記者は左の如く報じた。

ブ市はソ聯西端の戦線に於ける最強の防壘であり、最も近代的な要塞である。市の外郭にある城砦は三つの小島からなり四平方キロの地域を畫してゐる。この防禦陣を攻略することは獨軍に

とつては實に容易ならぬ仕事だ。ブク河の渡河に成功しても、攻者は河中の小島にある堡壘を一つ一つ攻略してゆかねばならぬ。この島壘は地面には灌木や雑木を巧みに植ゑつけた上に、さらに地下道を掘りめぐらして至るところ迷路同様にしてあるから、進む道を見つけ出すのが大變である。かうしておいて附近にはソ軍の狙撃兵が潜伏してゐるのだ、もとよりソ兵は逃げ道をよく知つてゐる。しかし獨軍の將兵はこの難問題を勇氣と闘志を以て解決した。即ち獨軍部隊は早朝の奇襲によりブク河の鐵橋を奪取して直ちに城砦島攻略を開始、數時間のうちに三つとも手中に收めた。先鋒部隊はさらに突撃してソ聯陣地の中核に突入したが、これより先獨軍は空から傳單を撒き、地上では擴聲器をもつてソ聯兵に降伏を勸告した。これは慥かに效き目があつた。多くの脱走兵が投降して來た。大部分のものは對岸からブク河に飛びこみ河を泳ぎ渡つて來た。獨逸軍歩兵の強引の突撃が彼等の志氣を揺り動かしたのだ。今やブ市は町も城砦も獨逸軍の手に確保され、其の軍團は潮の如く東へへと進撃した。

ビヤリストツク地區のソ軍五十萬全く獨軍に包圍せらる

ボツク集團軍の猛進撃は、ルツク市、プレストリトウスク市と左ビヤリストツク市の各方面に向けられ、其の攻防戦は最も凄絶を極め兩軍の戦車數千臺、歩兵師團數十ヶ師が亂戦激闘、加ふるに兩軍

の戦闘機、爆撃機群の最精銳がこれに参加し、眞に空陸兩軍の立體戦を實演し、約二晝夜にわたつて行はれた。其の損害の莫大なることは言ふまでもない。殊にソ軍が陣地の左翼として堅固に守備してゐたピアリストツク地區は戦闘の激烈であつたことは當然であつたらう。今ソ軍の配置兵力状態を判断すれば次のやうであつた。

ソ聯は舊獨ソ國境線であるスターリン線を越へて、舊ポーランド領北西部の新領土地區に特に大軍を集結してゐた。その全兵力は慥でないが歐露にある對獨作战兵力の約七割と言ふことであつた。

即ち前記推定要圖にある兵力は其の一部分であるがピアリストツク地區だけでも四軍團(狙撃二十師、装甲二師)更にピアリストツク市を半圓形に取まいて狙撃十九師、騎兵七師、装甲二師と五旅を第一線として配置し、第二線兵團としてバラノヴィツチ市を中心に歩兵十師、装甲二旅を控置してゐたので、この地區の集結兵力だけでも總兵力約五十萬、装甲四箇師團と七箇旅團と言ふ龐大なものであつた。

このソ聯の大軍も獨逸軍の三方面からの進撃即ち左から前進したレープ元帥軍がコヴノ(リトニアの首府)ウイルナ(舊ポーランドの東北端にある都市)を攻略し、其の一部が右折してソ軍の側背に進出し、更らにミンスクに突進するボツク軍の中央部隊と、プレスト・リトウスク(ブク河右岸に

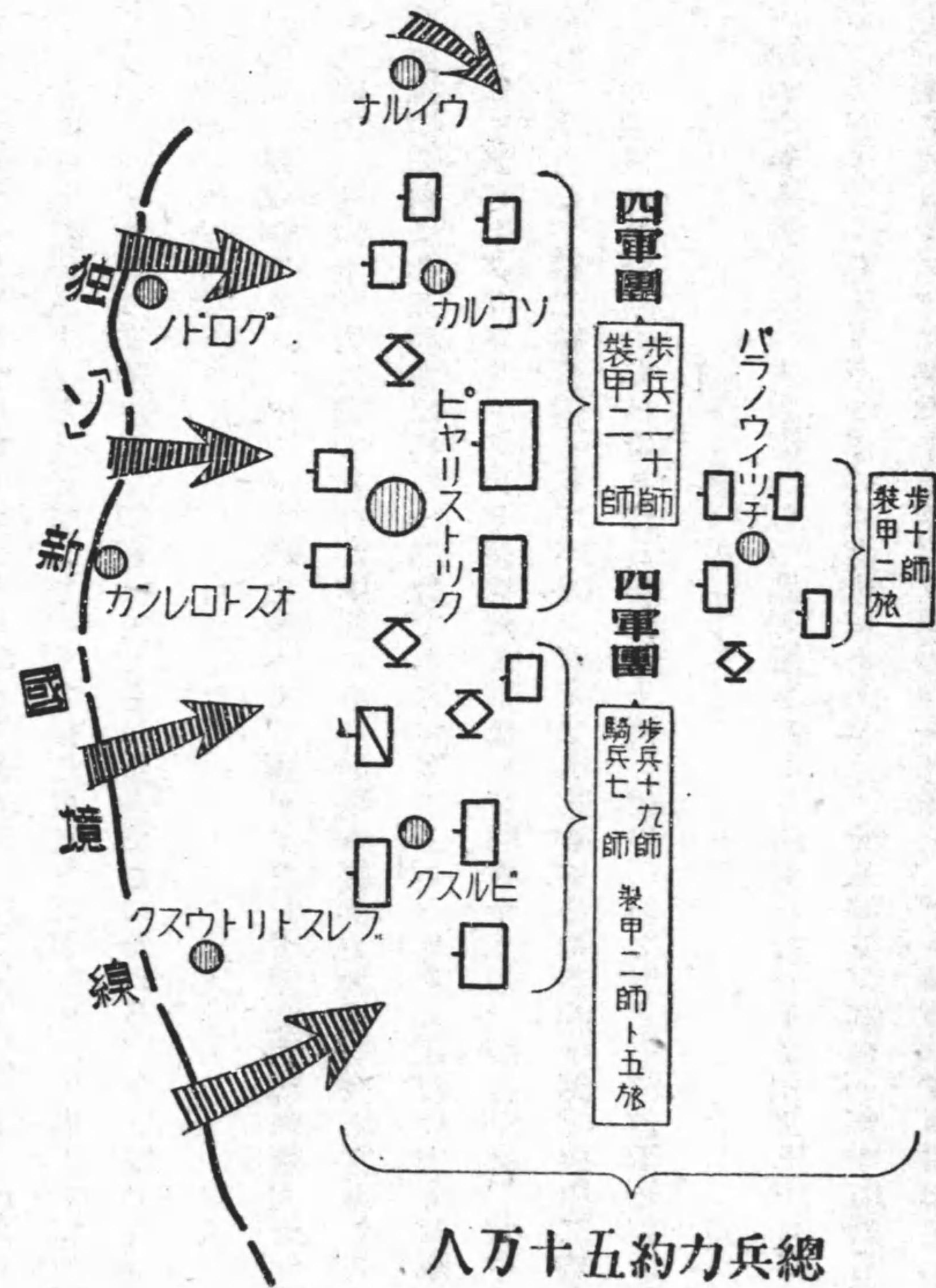
ある前記の大殲滅戦場) 方面から戦勝に乗じてバラノヴィツチーミンスク目がけて肉迫する部隊、尙ほクロドノを陥れて東進する部隊等前後左右より相呼應して突進し、完全にソ軍を包圍鐵環下に陥れ、ると同時にこの五十萬のソ軍の運命は決定的に斷案を下されたのであつた。(要圖参照)

米人軍事通信員の視たピアリストツク激戦状況

永らくその實力を疑問符に包んでゐたソ聯赤軍は、今次獨ソ開戦以來精銳獨逸軍の前に脆くも敗退に敗退を重ね忽ち舊ポーランドのソ聯領土から一掃されその眞價を完全に暴露するに至つた。獨逸の精銳電撃部隊が、何故かくも見事にその鐵槌をボルシエヴィキの敵地深く打込み、如何にしてかくも耀しき戦果を擧げ得たか、六月末から七月初にかけてのピアリストツクの大森林中に展開された華々しき歴史的大殲滅戦に於て、遺憾なく鮮かに描きだされた。ソ聯側第一線防禦の一主軸が怒濤の如き獨逸軍進撃の前に無残に打ち碎かれ、少くともソ聯二箇軍團が包圍殲滅に陥つたその戦況を具さに視察することが出来た。

大森林内の激戦

ソ聯大軍の持つてゐた老大な兵員、武器、あらゆる彈藥は、この大森林地帯の撃滅戦に於て悉く其の墓場と化した。この戦闘こそは赤軍の實力が獨逸軍の電撃的殺到を前にして、到底これに敵



し得べくもないことを如實に實證したものである。

廣漠數十マイルに亘るこの新戦場には、行けどもく、獨軍によつて破壊され、或は赤軍の遺棄焼却した戦車、装甲車、大砲、高射砲、トラック、自動自轉車、その他の車輛の殘骸が無數に轉がり、言語に絶した混亂と荒廢の狀を呈してゐる。ソ聯側はこの方面の國境五十マイルに亘り、多數のトーチカ陣地を構築し、老大な大軍を集結（狙撃師團約三十、装甲師團二師團と七旅團、騎兵師團等兵力約五十萬人）してゐたのであるが、獨軍得意の奇襲をうけ、その上優勢な獨空軍の猛爆に壓倒されて一たまりもなく潰滅の悲運に遭遇した。

獨軍の大勝は空軍の活躍に因ることが大であつた

この戦闘で特に獨空軍の活躍はもの凄く、この戦ひの勝利の原因の大半は獨空軍のものであると評價してゐる。即ち獨のスクーター機の急降下爆撃はソ聯機甲師團を完膚なきまでに急襲して大混亂に陥らしめ、息をもつかせぬ連続的猛攻により、戦列再編の餘裕を與へずして片端から撃滅した。そして赤軍が如何に不意を喰らつたかの一例を、余はソ聯國境とピアリストック間の一飛行場で見ることが出来た。即ちそこには約三十機以上の赤軍機が離陸を前に地上撃破の殘骸を曝らしてゐた。撃破されたソ聯機の附近で悠々草むしりをしてゐた一農夫の語つたところによれば

「開戦當日この飛行場には操縦士、地上勤務員合せて百二十名の將兵がゐたが、獨空軍機の來襲を知るや、飛行機をそのままに捨て置いて慌てふためき附近の森に逃げこんだ」とのことであつた。現在予の眼前をピアリストックの森を横ぎる道路に「いづれも口をポカンとあけ、虚脱したやうな目つきの無量數萬のソ聯兵捕虜を積んだトラックが後から後から走り去るのである。やつとの思ひでこれらの捕虜トラックの一つを捕へてピアリストック大激戦の感情を叩いてみた。

ソ聯捕虜の語る狼狽ぶり

一臺のトラックに二、三十人はゐたらうが、どれもこれも典型的素材そのもののやうなロシア農民出の兵で、満足に口のきけるものは一人もゐない。その中でやつと一人、やや纏まつた口のきける若い兵卒がゐた。ところがこれがまた純粹のウズベック語で聞きにくいこと甚しい。何度も何度も訊き返した揚句どうやら掴み得た話は次のやうなものだ。

「昨年の夏故郷の（カスピ海（裏海）東部の生れ）から徵集されて直ぐピアリストックに來た。こんどの獨逸軍との戦闘も一體何の目的で誰れと戦ふのか全然知らなかつた。たゞ二十二日の朝戦闘準備の命令を受け、中隊長から攻撃して來た奴にはなんでも構はぬから體當りでぶつかれ、一步も退くなとピストル片手に脅かされながら命令されたきりだ。かうして捕

へられてゐて相手が獨逸人であることを知つたが、それまではまるで夢中だつた。誰も彼も不意を喰つて逆上、まるで狂人のやうだつた。この無知な一兵卒の話から推しても、ソ聯軍が不意を衝かれていかに狼狽したかが察せらるゝと共に、獨軍の進撃が如何に電撃的であつたかがわかる。眞新らしい赤い星の付いた鐵兜が、これも眞新らしい保彈帶と共に道傍に山のやうに遺棄されてゐる。凄しいのは例のソ聯軍自慢の六十五トン戦車が、スツカー急降下爆撃弾を食つて眞二つにされた残骸を何十何百とあちらの丘、こちらの道路にさらけだしてゐる風景だ。胴から眞二つにされ頭と尻が十五ヤードも離れて吹つ飛んでゐるものもある。何氣なしに頭の方を覗いてみると、若い戦車兵が未だ機關銃の銃把に、しつかり取りついたまま死んでゐる。その照準をつけたままの眼には蛆が一杯湧いて、譬へやうのない異臭がふんとくる。その慘状は文字通り目を蔽はしめるものがある。

かうした悲惨な情景を通じて何より先にピンと来るのは、ソ聯軍が完全に不意を衝かれて本來の戦闘力の半分も發揮できなかったといふことだ。赤軍の宣傳文書は山のやうに積まれて、トラツクにのせたまま道傍に轉がつてゐたなどは、今更一しほ哀感をそそられるが、これなど獨逸の電撃戦を全く豫知し得なかつたソ聯中央部の態度を如實に示すものとして、甚だ興味深いものであ

つた。

ピアリストツク附近に包圍されたソ二軍團全く捕捉殲滅さる

ピアリストツク、ミンスク間の大圓内に包圍された赤軍二個軍團約十數個師團の運命は、獨軍の包圍圈直徑三百キロ以上に互る大鐵環内に全く袋の中の鼠となり、獨軍の大膽不敵の作戦は再び其の獨特の戦法を發揮し、至る所にソ軍を捕捉殲滅した。とりわけ美事に思ふ作戦指導は何んと言つても、北から進んだ獨逸第九軍のシュトラウス大將の指揮する部隊と、南方から猛追撃してゐたフォン・クルゲー大將の統率する獨装甲兵大集團並に第四軍主力とがミンスク西側地區で完全に握手し、一舉に赤軍の退路を斷ち、後方にある兵站連絡線を破壊し、赤軍をして全く孤立無援の窮地に陥らしめた大成功であらねばならぬ。

死物狂ひの赤軍の抗戦

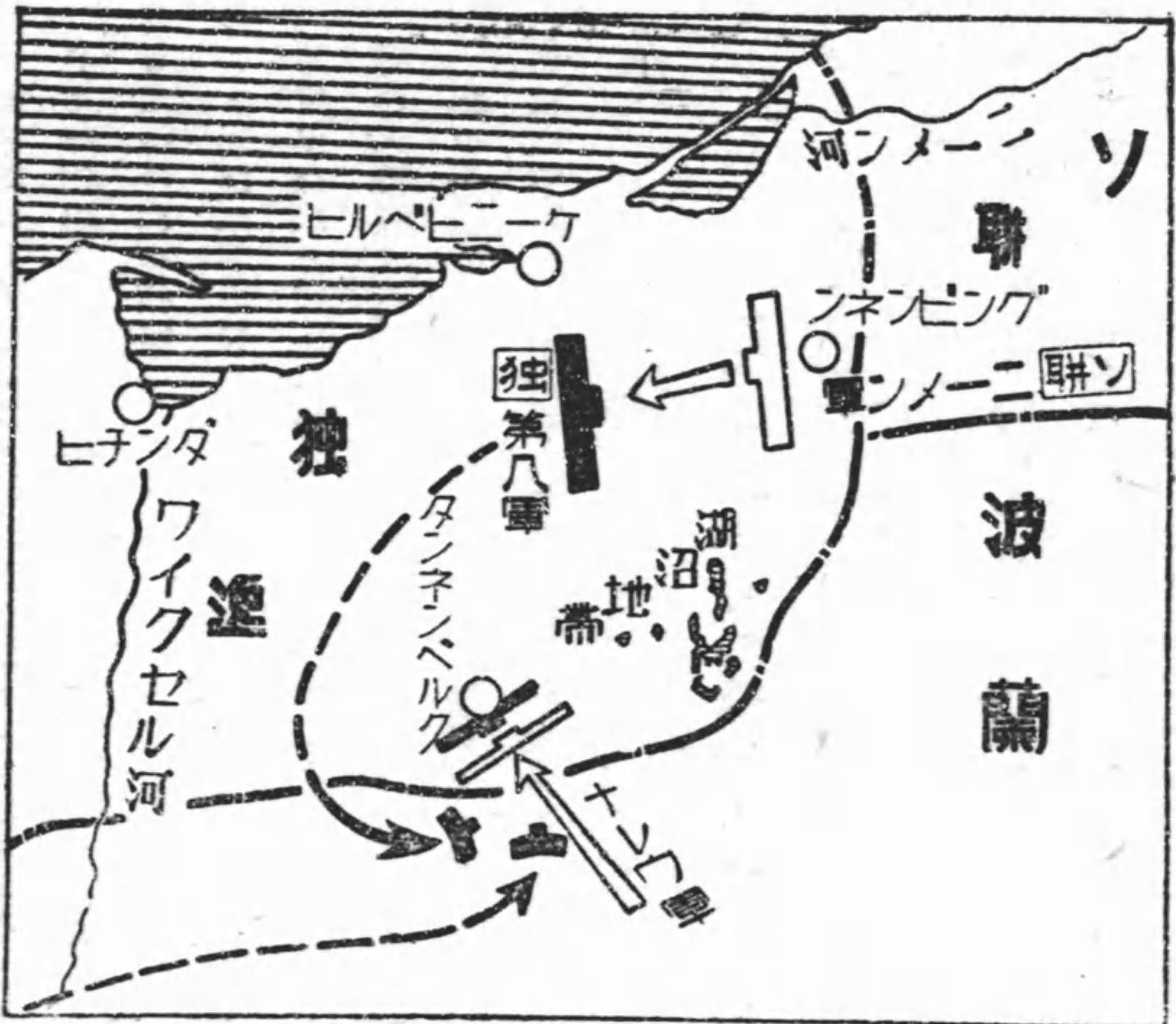
最初は餘りにも突發的であり、急變的であつた爲、ソ軍の將兵は狀況不明のままに立ちあがり應戦はしたものの、指揮組織は混亂し部下の掌握は、意の如くならず只だ上へ下へと動搖するばかりであつたから、其の抵抗もさ程眞剣味を帯びてゐなかつたが、さて四方八方取り巻かれて、見渡す限り敵軍！ 全く重圍のうちに陥り事體容易ならずと氣がついて見れば、さすがのソ軍も死か生かの土壇場

になつたことを知り、急に各所の局部毎に死物狂ひの抵抗をはじめ、なんとかして一方の血路を求め、獨軍を突破せんと、ありとあらゆる戦車、装甲車を繰り出して獨軍の横腹にぶつかり突き抜かんとした。このありさまを見てとつた獨逸急降下爆撃機は虱つぶしに反撃するといふ空、地の凄惨な戦闘が展開された。なにしろ開戦劈頭制空権を獲得した獨逸空軍の活躍は自由自在にソ軍の虚を衝き、獨逸軍地上部隊を有利に誘導して、水の低きに流れこむやうに次から次へと撃滅された。全くソ軍が獨逸軍にかくも大規模な包圍に陥つたことは自殺に等しい大失策であつたのである。

従つてソ軍の抵抗は激しいことは激しいが、統制なきゲリラ戦法より外に手段も方法もなく、盲滅法に暴れ廻つた。獨逸軍もこれには相當惱まされて、包圍を脱出しようとする決死のソ軍と、それを阻んで捕捉撃滅しようとする獨逸軍とは茫漠たる森林地帯内で、敵味方入り混れてゲリラ式白兵戦を演じ銃砲の響と阿鼻叫喚のをたけびとがものすこかつたが、結局獨逸軍戦果は捕虜十萬、戦車四百、砲三百門を鹵獲し遂に赤軍の大部を殲滅し、尙も急進してミンスクに突進した。

西部國境にあつたソ軍主力は壊滅した

このピアリストック東方地區の大殲滅戦に於てソ軍が一大打撃を受けた。實際兵力は今尙ほ確實なことは不明であるが、それが西部國境に於けるソ聯軍の主力であつたことは明らかで、前大戰に於け



るタンネンベルクの殲滅戦が再びここに演ぜられたのであつた。

タンネンベルクの殲滅戦はどんな戦さであつたか？

レネンカンフ將軍の指揮する露國ニイメン軍は獨逸軍の主力が佛蘭西戰場で戦闘してゐるので、對露作戦の爲獨逸東部にある獨逸軍は極めて小數且素質が劣つてゐることを觀破して、盟邦佛軍に策應するため旗鼓堂々東プロイセンに進出し獨逸軍を散々に打ち破つて進撃して來た。そこで獨逸の東普一帶の地區は露軍の馬蹄に蹂躪せられんとする悲境に陥ち入り、獨逸東部軍司令官は一擧にワイクセル河の線に退却して一時露軍を拒止せんとする劣悪なる作戦を採らうとした。

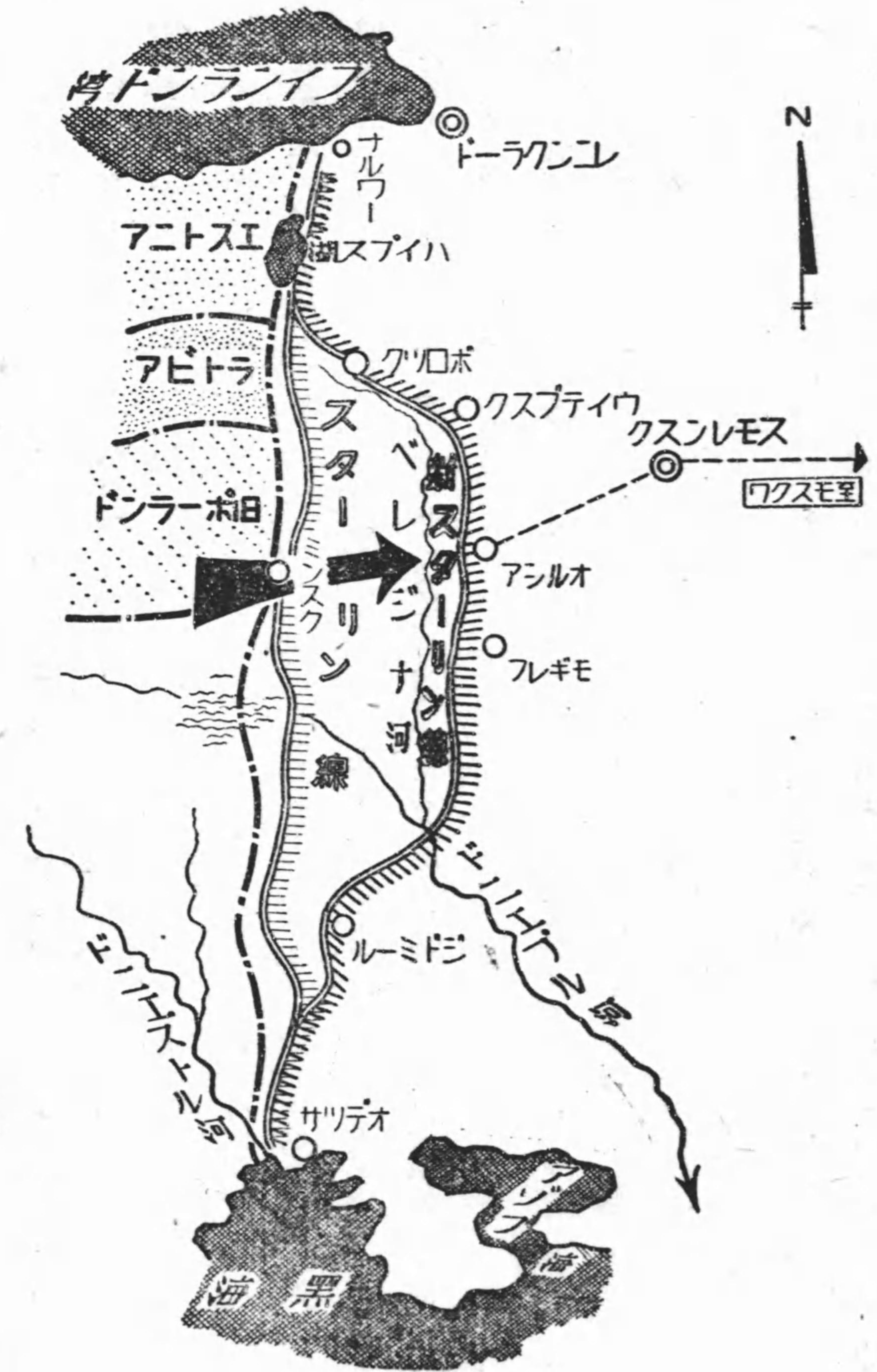
この敗退の責任を問はれて獨の軍司令官は即時革職せられ、當時退職中で悠々自適してゐたヒンデンブルグ元帥を起用し、東部軍司令官に任じ急遽して露軍を撃滅すべき大任を課した。
ヒ元帥の作戰指導

ヒ元帥は直ちにワイタセル河に向つて續々退却中であつた各軍團長に電報命令を發して之を中止せしめ、露軍が今二方面から前進中で未だ分離してゐたのと、その左方面から進撃中のナレウ軍がマズールの湖沼地帯の大障壁に遭つて困難してゐるを知りまづ各個に撃破せんと決心した。

此の企圖の下に行はれた戦闘が所謂タンネンベルヒの會戦で、ヒ元帥の統帥良ろしきを得たため露のナレウ軍は軍團長以下全兵力の約半數十三萬人の死傷を生じ殘餘の生きのこりは全部捕虜になり、全く露軍は全滅し、更に獨軍は急轉北進してニーメン軍を粉碎し眞に赫々たる大勝利を得たのであつた。

四、スターリン線の正體と其の價値

スターリン線とは一體どんなものか、マチノ線(佛蘭西)、ヂーグフリート線(獨逸)のやうに、人工の技術を加へた永久的の防塞陣地であるのか、或は單に據點式にトーチカが配置された稍、堅固な野戦陣地であるのか、ソ聯そのものの正體がはつきり不明であるやうに、恐らく世界列強の専門家も、つきとめた詳しいことはわからなかつたであらうと思ふ。現に獨逸からソ聯に旅行する武官連中에서도汽車の窓から眺めた位ではさつぱりわからんと言ふ人が多いのである。のみならずソ聯政府の本年八



月頃の發表ではスターリン線などと言ふものは事實存在しない、これは獨軍が戰況停頓した爲の口實だと言つたことがある。だが滿洲事變の末期、ソ聯當局は「ポーランド及滿洲國境には、獨佛國境に築設せられあるが如き築城地帯を構築した」と發表したことは今尙吾人の耳に新らしく残つてゐる。

更に獨軍の發表によれば「七月十五日ウイテブスク（ミンスク東北方要圖參照）東方スターリン線の要點に突入之を占領し、装甲部隊はスモレンスク（ミンスク東方ナポレオン街道上要圖參照）を迂回して其の東方に進出した。この附近の陣地は相當堅固な陣地設備をなしあり」とある。

そこでスターリン線はソ聯の十年前の發表の通り、たしかに築城地帯として夫々陣地が構設されてあつたことはたしかであつたらう。

戦後各方面の視察により判断して見るとこの防備線は（要圖參照）ナルワーブスコフ—ポロツク—ミンスク—ジトミール西側をドニエストル河に沿ふソ聯の西部舊國境千六百軒に互る築城陣地帯が其の正體であろう。

陣地設備として重要な戰略地點には前に鐵條網を張り、背後にベトン製の最新式築城を試み、附近に空軍根據地を設けて一步たりとも外敵をして侵入せしめない工夫を凝らしてゐたやうであつた。

起工當時はフィンランド海岸から黒海に至る、西部國境延長千六百軒に蜿蜒として連らなつてゐた

が、その後更にフィンランド灣から北氷洋に互るソ芬國境千百軒を延長し全長二千百軒に達した。

この防禦陣地の様式は、縦深十キロ—二十キロに及び、其の背後にさらに幅四十キロの無住地帯を設け空軍の根據地としてある近代式重層縦深陣地である。又陣地そのものはゆる鱗形陣地と稱する一種の縦深陣地で、その第一線陣地は鱗形の三段構となり、互に地下道によつて聯絡し、陣地前には電流鐵條網が張りめぐらされてゐる上に、地下の構築は一階建あるひは二階建となつてをり、二階建には備砲塔があつて對戰車壕（三角斷面壕）と相應じてゐると言ふことである。

尙更に第二線、第三線陣地と完成されてゐて、マチノ要塞線に比べて縦深が非常に厚く出來てゐるのが特徴らしい。

ソ聯は赤軍二十週年を期して三ヶ年間日夜五十萬の勞働者を動員し竣工したもので、血の肅清の犠牲となつたトハチエフスキー元帥が國防次官として全軍の智囊となつてゐた頃、英帝ジョージ五世の御大喪の歸途フランスに立寄りマチノ線を見學しこれによつて立案したものであつた。然るに其の築城地帯内にあるべきミンスクが一舉に占領せられたので、ソ聯側では一步退つた新スターリン線（ポロツク—ウイテブスク—オルシア—モギレフ—ジドミールの線、要圖參照）を以て從來のスターリン線なるかの如き口吻でこの線に立籠つたのである。

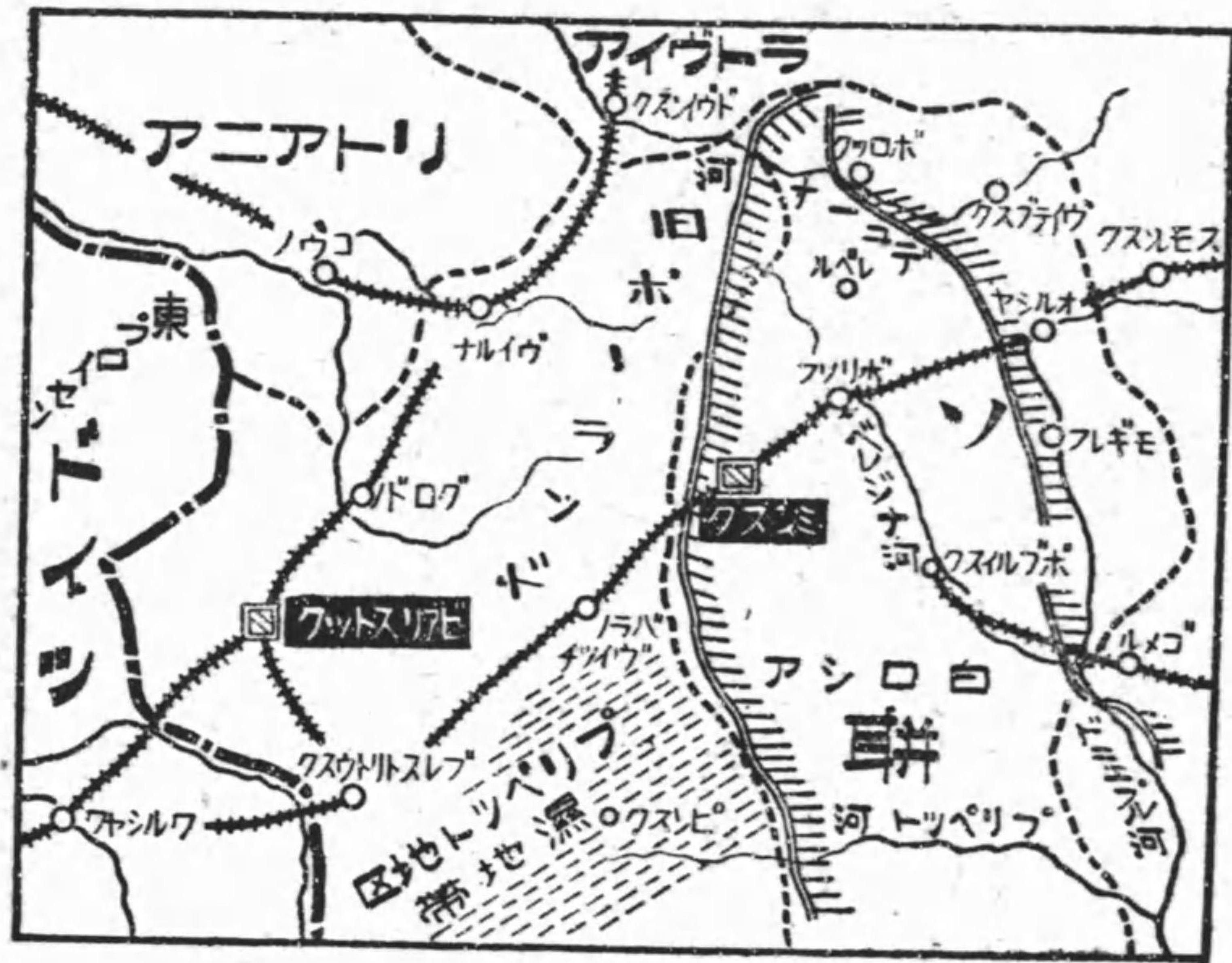
最も當時の戦況ではあまりにも獨軍の急迫、猛進撃に怯びえあがつて施す術もなく周章狼狽の極陣容を立ち直すことも出来ず、已むなく新スターリン線に辛じて陥み止まつた形となつたのであらう。もとくソ聯としてはフランスがマチノ要塞陣地に期待したやうに、スターリン線を絶對的に信賴したわけではない。ここにソ軍獨特の戰略的後退戰術が意義を持つのである。即ち第一次防備線スターリン線、第二次防備線ドニエプル河畔陣地、第三次防備線レニングラード、モスクワ、ハリコフの線、最後陣地としてヴォルガ河の線と豫定してゐたらしい。

然しながらなんと云つても、ソ聯の國境防衛第一陣地としてはこのスターリン線であることは明瞭な事實で、陣地前にある湖沼、沼澤、濕地帯等の天然の大障礙を控へ、加ふるに技術の粹を集めて構築した獨ソ國境の生命線であることは確實であつた。かのフランスがマチノ線の崩壊でヘナクになつて精神的に降伏したのとは少しくちがふが、ソ軍その後の作戰經過から考へて凡てが事志と違ひ、ひた押しに押されたのもこの線の崩壊に起因することは甚大な關係があると言ひ得る。

スターリン線突破の壯絶な白兵戦

ミンスクに突入した獨軍は、北方よりデューナ河に、南はプリペット沼澤地一帯に進出したポツク軍の先鋒部隊と共に一舉にベレジナ河を渡河し、新スターリン線によるヴァイテブスク、オルシア、モギ

ミンスク附近要圖



レフ、ゴメル各陣地のソ軍がここを先途と防戦して一大決戦は展開された。これぞスターリン線を破るか否かの勝敗の運命を荷ふ彼我兩軍の死闘であつた。

獨軍は一トーチカ、一堡壘毎に壯絶な白兵戦を演じ、壓倒的優勢な獨空軍の威力を十二分に發揮し、要塞線の後方連絡線を断ち、一方各トーチカ、堡壘に對する急降下爆撃機の連續的猛爆により風潰しに痛撃を與へ、其の機甲師團はソ軍が重機關銃、自動加農砲等に依る必死の抵抗を排除し、日夜二日間に互つて同要塞線の數地點に致命的な楔を打ち込み、刻々其の戦果を擴大した。なにしろ陣地の縦深が非常に大であり一面の連鎖堡であり各所に機關銃座群、地雷原、鐵條網地帯、戰車壕

地帯の難所が多いので一舉に陣地を攻略することが出来ず、其の間ソ軍も怒濤の如く押しよせる獨戰車群の前進を阻止するため、十五サンチ砲を備へ十四人乗りの九十トン超重戦車を前面に狩出して必死の防戦をつゞけ、各所に混戦亂闘を演じ遂に十二日朝スターリン線を全線に互り突入し五十軒の地點まで進出して、あえなくもソ聯の頼む第一次防備陣地は破れたのである。

ピアリストツク、ミンスクの二大作戦戦果の發表

獨大總統本營は七月十日突如左の如き華々しい大戦果を發表した。

「世界戦史上最大の激戦たるピアリストツク及ミンスクの二大包围作戦は遂に獨逸快勝裡に完了を告げた。右作戦に於て我が方は、數名のソ聯司令官級將官（師團長を含む）以下三十二萬三千八百九十八名の將兵を俘虜とする外に戦車三千三百三十二臺を撃破又は鹵獲、各種口径火炮千八百九門その他夥しき量に上る武器、軍需品を鹵獲した。

右戦果を加算すれば開戦以來（十八日間）東部戦線に於けるソ聯兵俘虜總數四十萬を突破し、撃破又は鹵獲せる戦車數は七千六百十五臺各種口径砲四千四百廿三門に達し、ソ聯機撃破數は實に六千二百三十三機の多數なり。」

スターリン首相の危機呼號

スターリンソ聯首相は七月三日開戦以來最初の國民に對する呼びかけを行ひ、ソ聯を襲ひつゝある危機の重大性を認識せしめあくまで焦土戦術とゲリラ戦を以て血の最後の一滴まで戦ふべきことを要請し左の如く悲壯な激勵の辭を放送した。

獨軍今やソ聯の牙城に迫る

我が赤軍はヒトラーの軍隊に對し英雄的抗戦を以て反撃、隨所に多大の損害を與へてゐるに拘らず敵の優勢なる部隊の進撃は一步一步ソ聯の牙城に迫らんとしてゐる。即ちリトワニア全部、ラトヴィヤの大部分、白ロシア西部地區、西部ウクライナの一部分は遂に敵の占領するところとなつた。然しヒトラーの軍隊は必ずや曾てのナポレオンの如く、又カイザーの如く最後に於て敗北を餘儀なくされるであらう。國民の間には余に向つて、ソ聯政府は何故かの怪物の如きヒトラーと不侵條約を結ぶが如きことを敢へてしたのであるかと詰問するものが多いかも知れぬ。だが不侵略條約は隣國との間の和平的條約である。従つて吾々としてはヒトラー、リツベントロツプ等の怪物を相手とするとはいへ、これを拒絶するわけにはいかなかつたのである。今次戦争に於ける正義はあくまでもわれわれの側にある。卑怯且不正の途を選んだ敵は必ずや敗滅するであらう。今やヒトラー軍隊の進撃によりリトワニア、ラトヴィヤ、エストニア（何れもバルト沿海國）

の國民は獨逸化されるか、或は獨逸の奴隸になるか、何れにせよ不安な脅威を受けるに至つたがこの問題はソ聯がファシスト達の前に奴隸となつて屈伏するか否かといふ重大な問題である。然し敵を粉碎すべき重大事業のためには、すべてのものが前線の利益のもとに集まらなければならぬ。吾々は多くの銃砲、彈藥を造つて怪物どもやサボタージユを行ふスパイどもに對し、間斷なき闘争を続けねばならぬ。又戦争遂行の爲には凡ゆる輸送機關を動員せねばならぬ。

ソ聯は立ち遅れた

今次の戦争は獨逸ファシズムの軍隊に對するソ聯民衆の戦ひである。それは祖國擁護の爲の戦争であるのみでなくナチズムによつて奴隸化されたドイツ竝にドイツ民族を解放する爲の戦である。獨逸軍は對ソ侵略戦を敢へてするまでは敵らしい敵の眞剣なる抵抗に遭遇してゐないのだ。故に今次の獨ソ戦に於て若しも獨逸粒擧りの精銳軍隊が、我が赤軍に撃破せられるならば恰も一八一二年の昔佛のナポレオンが敗れたる如く、一九一八年獨のウイヘルム二世が敗戦の慘を喫せる如く、ヒトラーのナチス軍も究極に於いて一敗地に塗れることであろう。併しながら若しもソ聯領土の一部が獨逸軍の爲に占領されるが如き事態に立到るとも、それは主としてこの獨ソ戦争が獨逸に有利、ソ聯に不利な條件の下に開始された一事に原因するものに外ならぬ。即ち獨逸

は開戦に先だち百七十箇師團をソ聯國境に集結、命令一下、直ちにソ領内に侵入する爲に萬全の用意を講ずべき旨命令を下してゐたものである。然るにソは動員未了の状態にあつた獨軍侵入に際しても軍隊は國境方面に輸送中であつた。しかしここに特に重視すべきことは獨逸が全世界から侵略者の烙印を捺されると否とを何等顧慮することもせず突如獨ソ不侵略條約侵犯の裏切行爲に出たことである。

今や死活の關頭に立てり

今次戦争勃發の結果、我が國は最も慘猛且裏切者ドイツ・ファシズムと喰ふか喰はれるかの死闘を決するに至つたが、今や我が軍は十二分の戦車と飛行機を以て武装した敵の鐵牙に對し英雄的抗戦を續けてゐる。赤軍主力は數千の戦車及飛行機掩護の下に、また海軍と協力してソ領土の凡ゆる地點で滅私犠牲的精神を以て抗戦に従事してゐる。しかも我が軍の勢力は全ソに互り續々増強されつゝあり國土防衛に起ちあがらんとしてゐる。敵は吾々の汗を以て潤した土地を奪ひ我等の勞働によつて獲得せる穀類と石油を奪はんとしてゐるのだ。更に敵は地主の支配やツァーリズムを回復せんとしウクライナ、白ロシア、リトワニア、エストニア、ウズベク、タタール、モルダヴィア、チヨルチア、アルメニア、アゼル、バイジアンその他のソ聯自由人民の國民的文

化及現狀を破壊しこれをドイツ化してドイツ王侯貴族の奴隸としようとする企圖してゐるのだ。全ソ人民はかくの如き我が領土に襲ひかかりつゝある危機の重大性、即ち我國土と人民が今や死活の關頭に立つてゐる事實を十二分に理解せねばならぬ。

焦土と徹底的ゲリラ戦による敵軍潰滅戦法

我が赤軍にして萬一撤退する場合はすべてのものを持去らねばならない。一臺のエンジンも、一輛の客車も、また一粒の穀物も、一滴の石油たりとも残してはならない。集團農民はその所有せる全家畜及穀物を後方地帯に輸送するため、政府機關の監理に移さねばならず、而かも持ち運び不能な有用資材にして敵軍占領地區内にあるものは、凡てこれを容赦なく破壊すべきである。同時に歩、騎兵よりなるゲリラ部隊を創設し、また破壊行爲に當るものは橋梁、道路、通信機關を破壊し、しかも森林、停車場及び列車には火を放つてこれを焼き拂はねばならぬ。かくして我が陸海軍及一般市民は國土防衛のため寸土と雖も敵の侵略を排し血の最後の一滴に至るまで戦はねばならない。ソ聯今次の對獨戦は、歐洲、亞米利加就中ドイツ人民をナチズムから解放するに役立つであらう。この點に於てチャーチル首相のソ聯援助に關する言明及び米國の對ソ援助用意の聲明は歴史的のものであり、ソ聯國民の胸奥を感謝の念で満した。ソ聯國民よ、諸君は赤軍の

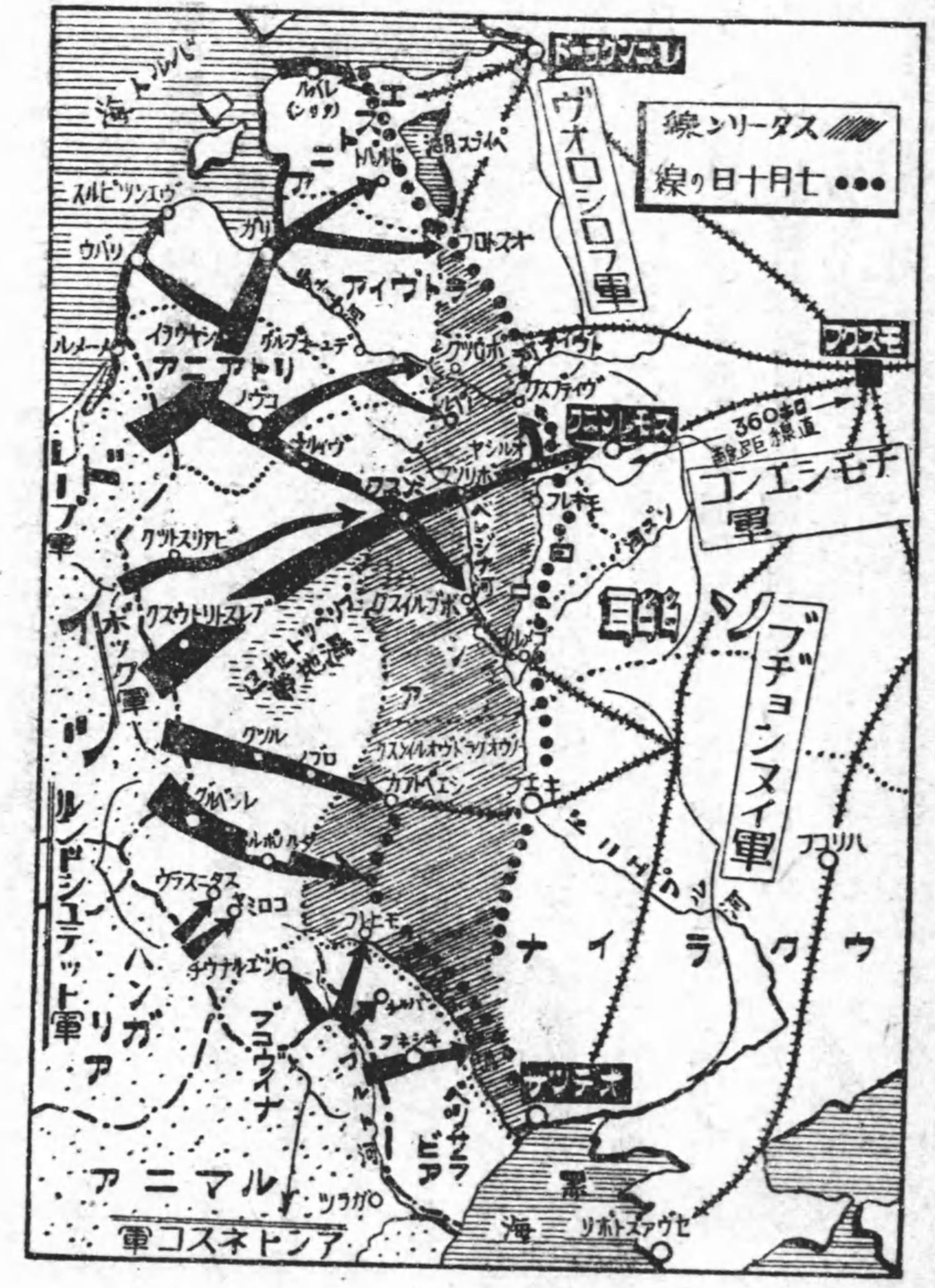
最後の勝利のために、こぞつてソ聯陸海軍に渾身の支援を與へよ。

第一期作戦の戦果と獨軍の進出態勢

七月十五日までに、獨軍の戦果赫々としてソ聯軍を壓し、要圖のやうな態勢となり、今や算を亂して敗走するソ聯軍を追つて旋風の如く、モスクワへ〜と猛進し其の進撃速度の目ざましさはスターリン線到達までにくらべて遙かに快速で、一方ソ軍は到るところに死闘を展開して頽勢立直しに努めたが、何しろ當時の戦況は、赤軍が系統立つた指揮統帥を失つた幾多の歴然とした缺陷を暴露し、戦線の隨所に於て、其の大部隊は獨軍鐵桶の罠に嵌り込んでむざ〜好餌に供せられ、西部戦線で蒙つた打撃は既に致命的なものであつて、爾後の回復は餘程至難であらうことが推察出来る。

獨逸軍當局者も「ピアリストツクの大敗戦竝にスターリン線の崩壊によりソ聯軍の戦闘力は正に致命的打撃を蒙り、歐洲に於ける共產主義の運命に最後の止めを刺すべき審判は遂に下された」と稱した程であつた。しかして獨軍全線は宛ら疾風枯葉を卷く如く東へ〜と猛進したのである。

第一作期(迄日五十月七)戦況要圖



第二期作戦

(自七月十六日約一ヶ月
至八月二十二日)

(主として中央軍スターリン線の完全突破とスモレンスク地区の大殲滅戦)

一、獨逸中央軍(ボツク集團軍)の進攻

ベレジナ河畔の會戦

スターリン線を突破した獨軍は、ポリソフ、ポプリスク(ベレジナ河畔要圖参照)の兩地區竝に其の左右一帯の地區に進出した。ミンスク附近に執着してゐたソ軍も又々獨軍包圍下に陥る危機を懼れ、一舉にベレジナ河右岸地區の新スターリン線に後退し、この新陣地を強化し必死の防戦準備を整へた。

急進猛撃の獨軍は今や各方面共相呼應して怒濤の如くベレジナ河畔に殺倒し、新スターリン線を粉碎しようと空、陸一體の猛攻を開始した。餘りにも迅速果敢な獨軍の進撃はソ軍に其の前進部署を偵知せしむる餘裕さへ與へず、眼前に現はれた雲霞の如き獨軍の進出にたゞ茫然自失! たゞ無意識に

抵抗をつけたと言ふありさまで、折角の防壁堅壘も指揮統率の系統亂れては、至る所獨軍の爲各個に分斷され、殊にヴィテブスク、モギレフ（何れもスモレンスクの西側にあり要圖參照）から前進した獨軍は相會して、スモレンスクの挾撃態勢を整へて急迫した。

當時獨軍の猛進撃は組織的に行はれたが、機甲兵團は餘りにも敵陣深く突入したため後方輸送の連絡絶え、遂にエンカーハ八八型輸送機を以て彈藥、糧秣の兵站輸送をせねばならぬ状態にあつた程である。

ソ軍の戦線分裂してスモレンスク全く包圍せらる

七月十七日ヒ總統大本營は次の如き戦果を發表した。

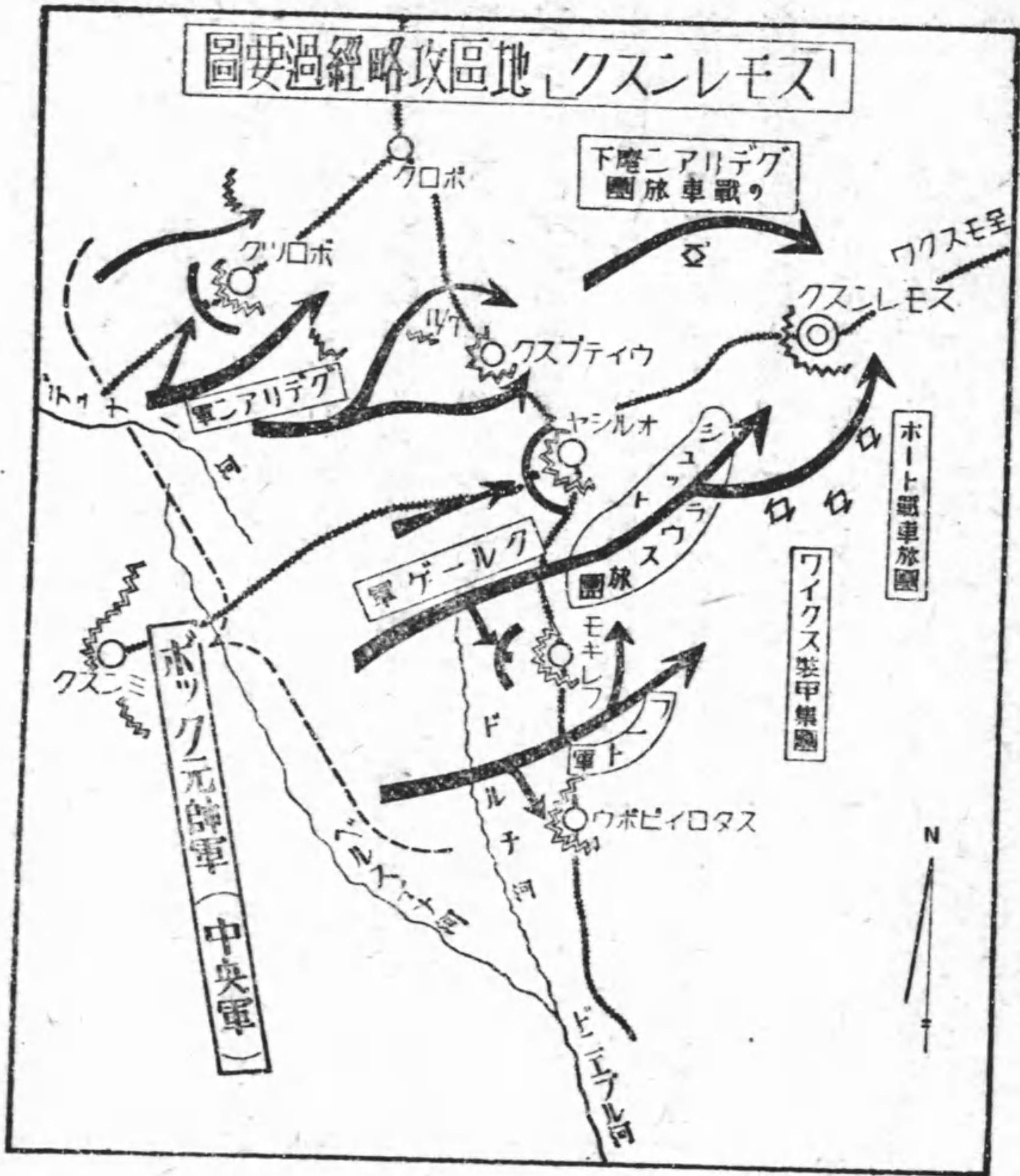
東部戦線では目下獨ソ兩軍約九百萬の大軍が、史上未曾有の大規模な死闘を展開しつつあつて、獨逸軍はまさに偉大なる戦果を獲得せんとしつつある。ソ聯は最後の豫備兵まで第一線に動員して獨逸軍並にその聯合軍の進撃を阻止すべく必死の抗戦を續けてをり、東部戦線全線に亘り、大規模なる決定的戦闘が續行中である。

これによつて見ても當時獨ソ兩軍が如何にこの攻防戦を重視し、激戦奮闘死力を盡くして輸贏を争ふたかを想像することが出来る。

そして獨ソ開戦以來過去三週間の戦局にあつては、全戦線に亘る大規模な統一的戦線が存在してゐたが、一たび新スターリン線が崩れ、獨軍がベレジナ河を強行渡河し、ドニエプル河左岸に進撃した後は、ソ聯軍の態勢全く一變し、南部戦線ウクライナ地區ではキエフを包圍され、北部戦區（レニングラード地區）ではレニングラード全く孤立化し、更に中央方面（モスクワ街道地區）では破竹の勢を以てモスクワに向ひひた押しに突進し、スモレンスクに迫り、ソ軍戦線の統一は完全に打破され、戦場は局地的分裂戦闘が至る所に於て惹起さるる特異の戦況となつたことは見逃すことのできぬ戦線破滅の一大變轉期とも言ひ得るのである。

スモレンスク地區の攻略戦

中央集團軍たるポツク元帥軍の第四軍（司令官フオン・クルーゲ大將）並に第二軍司令官（グデリアン大將）の戦車旅團及ワイクス大將の装甲集團は、ミンスク陣地を突破すると直ちに、ケツセルリング元帥麾下の空軍艦隊と協力して、ソ軍がポロツク、ヴィテブスク、オルンヤ、モギレフ、スタロイビボウの各要塞地帯に據る所謂新スターリン線に向つて攻撃を開始した（要圖參照）。かくて北方に於てデユナー河を強行渡河し、ポロツク陣地帯に肉迫し、激戦の後その兩側地區に前進基地を形成することに成功した。



第二軍司令官麾下の戦車旅団はヴィテブスク陣地に突進してこれを占領し、オルシア南側地区よりワイクス装甲集団、ホート戦車旅団はモスクワ街道兩側地区よりスモレンスクに邁進、シュツトラウス旅団はオルシアを包圍して敵の退路を断ち、フート第三軍はモギレフ、スタロ

イビボウ中間地區陣地を席卷してクルーゲン軍主力と相呼應しソ軍を殲滅しつゝ全軍勇躍して、東方の廣汎な戦線に向つて邁進した。



先遣部隊はソ連戦車に致命弾を浴びずモスクワを指す

七月十六日敵の死守してゐたスモレンスクは凄壯激烈な戦闘の後遂に獨軍の機械化集團の前後周邊からする猛攻と歩兵師團の突撃戦法によつて陥落した。次いで獨機甲兵團はその突破區域をスモレンスクの東南及び東北一帯地區に擴大して、幅二百五十キロ、深さ百五十キロの大戦線を現出した。しかしなが

らポロツク、ヴィテブスク、オルシヤ、モギレフの各堡壘に残存してゐるソ軍は頑強に抵抗し、獨軍の包圍下にあつて弾薬、糧食の補給を断たれながらも四週間の永きに互つて孤軍奮闘必死の闘争をつ

け、其の間屢々死物狂ひの突破を試み、日夜反撃戦は繰りかへされたが、刀折れ矢盡きて次第に戦力を喪ひ獨軍の爲各所に捕捉殲滅され、ここに劃期的なスモレンスク地區に於ける大戦闘は終結した。この戦場に、獨ソ兩軍に如何に壯烈なる死闘が展開されたか其の光景の一端は次のやうであつた。

ソ聯軍の損害

捕虜三十一萬、鹵獲装甲自動車三千二百五臺、大砲三千二百二十門、莫大なる軍需品、空軍の損失一千九十八機

落城後のスモレンスク地區は、新らしい殺氣、生血を吸つた草原の青い大地一面を所きはらずナイフで悪戯したやうな爆弾の跡、砲撃の彈痕と、赤い地肌を切り剝ぎ縦横無盡に草を捲取つた無限軌道の二條の線が絡み合ひ唾み合つて、如何に獨ソ兩軍の戦車群が格闘死戦を演じたかの様相を描いてゐた。焼夷彈を浴びたのか、砲彈の曳火によつてか、附近一帯の大森林は炎々として黒煙が天に押し物凄

壯烈であつた市街戦

獨逸軍最後の總攻撃は七月十五日拂曉開始された。空軍の爆撃、地上砲火の猛撃は、スモレンスクの四周を包み、各所に立ちのぼる濛々たる黒煙、炎々たる紅蓮は、この世ながらの地獄をあらはし、

市南側面のソ軍陣地向つた獨軍は、一舉に市街に突入せんとしたが、必死のソ軍防止に阻まれて突撃は頓挫した。獨軍の決死突入隊は更に市の東側及び南側から勇敢に全面的突入を試み、この三方面からの猛攻にさすがのソ軍の抵抗も遂に其の一角を突破され、獨軍の一部は怨濤の如く市内に突入した。直ちに壯烈な市街戦は展開され、まる二日間の死闘に焼け爛れた家屋の壁に血痕を付け、家は悉く破壊され、市街十字路の真ん中に擱坐してゐる戦車、舗道に塵のやうにバラ撒かれたガラスの破片、至る所に横はる屍體、いづれもこの市街戦が如何に激烈悲惨の極みであつたかを想察することが出来たさうだ。

全市悉く焦土化

獨逸軍が遂に市内の一角に突入したと見るや、ソ聯軍はスターリンの命令による焦土戦術を實施し劇場、大學、寺院、軍司令部用の建物等凡そ目ぼしい大厦は勿論、家といふ家は悉く火を放つて、市街は忽ち炎々たる火の海と化し其の九十パーセントは焦土となつた。この状景の裡にあつて、我國の銃劍術を眞似て白兵戦の訓練を受けたソ聯兵は、土囊、家具で作られた急造胸牆の物蔭から射撃を爲し機を見て一齊に突撃を行ひ、獨軍も負けてゐず獨逸魂を發揮し、手榴彈を抛りつゝ重、輕機關銃を以て應射し、猪突して來るソ兵を邀へて果敢な肉弾戦を演じ、燃え上る火焰の中にこの彼我入り亂れ

ての大死闘は宛然焦熱地獄繪圖の觀があつたらうと思はれる。いはば人間が一瞬にして猛獸となつて吃哮し掴み合ふ怖るべき姿をまさしく闘争の實場面として深刻慘凄な狀景を呈したのであらう。

一望曠野大平原戰の苦痛

見渡す限りの大平原、如何にもロシア大陸的な廣漠單調の大戰場だ。こんな茫漠たる地表面で戰爭するのは、兩軍共に戰術上なり戰略上からいつても相當に苦難であつたらうと思ふ。例へば攻撃する獨軍としては何んらの遮蔽物もなく全くソ聯軍の砲火に暴露し、空軍直下の監視をうけ、部隊を隠匿することも出来なければ、移動することも危険に曝されて敵火を浴びつゝ行動せねばならぬ。又うつかり友軍と連絡を絶てば、何處が敵やら味方やら判らなくなり、各斥候が友軍と思つて敵の陣地に飛び込む等の喜劇はさらにあつたらしく、山もなければ谷もなく、まるでロシアそのものを表現したやうな平原である。獨逸兵なども「いままでの戰場ではともかくも地名なり、地勢なりが常識的に頭に入つてゐたから、搜索なり偵察なりが左程困難でもなかつたが、一度びこの大平野に入つて見ると地名がチンブンカンブンの上地理的目標が全くないので閉口した」とこぼしたといふことである。

ソ聯側にしても同じであつたらうと思ふ。成る程防者としての砲火の威力は展望が限りなく廣いから最大射程までぶつ放すことは出来るが、一たび出でて行動するとなると地形、地物の何等據るとこ

ろがない。陣地そのものも遠くから敵に發見される。陣地内の行動は手にとるやう見られる始末、殊に獨逸側の報告によればソ軍は軍用地圖が極めて少く、各師團に漸く數枚しか配布されてゐなかつたといふことで、如何に自國內の作戰とはいへ命令の徹底には相當困難が伴ふたことであらう。その上邊境から輸送された軍隊の將兵は、この邊の地理は無論不案内、其の上この大曠野の中央で包圍されたソ聯軍團は、獨の重圍を脱するにしてもどの方面に進出するのが容易なのか、地圖による判斷も出來ず、更に敵情を偵察するにしても樹に登つて展望する位が關の山とすれば、獨軍の何れの部面を突破すれば適當であるか、そのへんの判斷に迷ひ、結局はぶつかつて見なければわからないといふわけでも文字通りある程度盲滅法の行き當り戦となり、そこに豫期しなかつた慘憺たる當時のさまざまの様相が眼前に浮ぶ感がある。併しながら兩軍共よく戦つたものだと思ふ。ソ軍は恐らく彈丸の盡きるまで逆襲又逆襲してスラブ魂の本領を發揮したものであらうが、獨逸陣容は鐵桶の如く堅く嚴として揺がなかつた。

ソ軍の弱點は通信連絡設備の不備にあつた。之に對し獨軍は無電連絡の網を戰場一ぱいに擴げ、見事な指揮組織の下に系統整然として有無相通じた包圍態勢の強さは蓋し天下一品であつたらう。

かうして勝ちつゞけてゐる限り、そして偉大な統帥と指揮組織が不變不動である限り、獨逸武力は

確に鋼鐵の強さを持ち獨逸兵は機械の如く整然たるものである。

110

獨の精神的督戦とソの加罰的督戦

獨逸は其の將兵に對し武功拔群な表彰に飽くまで名譽と武功の布告とによつて督戦する。殊に最高勳章の上にまた新最高勳章を作り、獨將兵の自信と發奮を促す手段に依る精神的督戦に對して、ソ聯は捕虜になれば、その家族を殺し、敗戦すれば本人を死刑に處すといつた絶望的督戦をなしたと云ふ對照も民族性を反映して面白いが、督戦も餘りにスターリン式に苛酷になると飛んでもないことが起るといふ一例がこのスモレンスク地區の戰場であつたといふことである。

それは獨逸軍が占領後一日、一臺のソ聯輸送機が同地の飛行場に着陸した。獨軍としては空からのゲリラ戦ではないかと、即刻銃を構へてかけつけて見れば、機上から降りて來たのはソ聯の一將官と其の幕僚であつた。スモレンスクの陥落を全然知らないで、前線督戦にモスクワから飛んで來たことが判かつたが、將官以下不意に獨兵に包圍されたただ茫然として其の儘捕虜にされたといふことである。これはモスクワとの通信連絡が不可能であつたのかも知れないが、要は敗戦の報告をスモレンスク司令官が故意にいかなかったのではないかと思ふのである。

獨逸將兵の克苦堅忍の意氣

グ德里アン大將麾下の第二軍機甲兵團（中央軍）の一中尉がスモレンスク東方約八十キロの最前線に到達した後、一旦ベルリンに歸り外國記者團に同機甲兵團の活躍狀況とソ聯軍の狀況を左の如く發表し如何に獨將兵が堅忍克苦してゐるかの真相を述べた。

我が機甲兵團は、第一線尖兵と共にミンスクを経て一氣にスモレンスクまで突進したが、現在獨逸軍の最前線陣地はスモレンスク東方約八十キロの地點まで進められてゐる。

スモレンスク地區の攻略戦では全く焦熱地獄のやうな苦痛を體驗した。炎天下の熱砂はさながら砂漠の黃塵の如く、自分自身の手さへも見えない有様であつた。戦はまるで熱帯戦の如く何一つ憩ふ蔭はなく、そのため進撃の速度は著しく低下された。又この方面のソ聯軍の抵抗は未だ會て見ない程の頑強を極めてゐたため、われわれはいろくろくに戦術を變更しなければならなかつた。われわれが十六日夜スモレンスクに突入した時には全市は煙に包まれてゐた。この方面の獨軍の包圍鐵環戦術は、最初先づ左側乃至右側の線を開放して置いて、この方向に敵を追ひ込んで罠に陥れる作戦を取つた。或る時には鐵環内のソ軍は包圍線を突破しようとして、十日間も其の中で苦戦してゐた。ある時は獨軍包圍下のソ軍を救出しようとして敵將チモシエンコ元帥は外部から獨逸軍の鐵環破壊を企てたこともあつたが、彼等の企圖は何れも失敗に終つた。ソ聯軍の裝備は

豫想外によく、しかも勇敢且狡猾に戦つた。われくは物凄く熱砂の中を何處までも行軍しなければならなかつた。予は六週間生水一滴も飲むことが出来ず、戦友たちも初めて安眠し得る陣地に辿り着くまでの三週間の間一人として靴を脱いで休息し得たものはひなかつた。

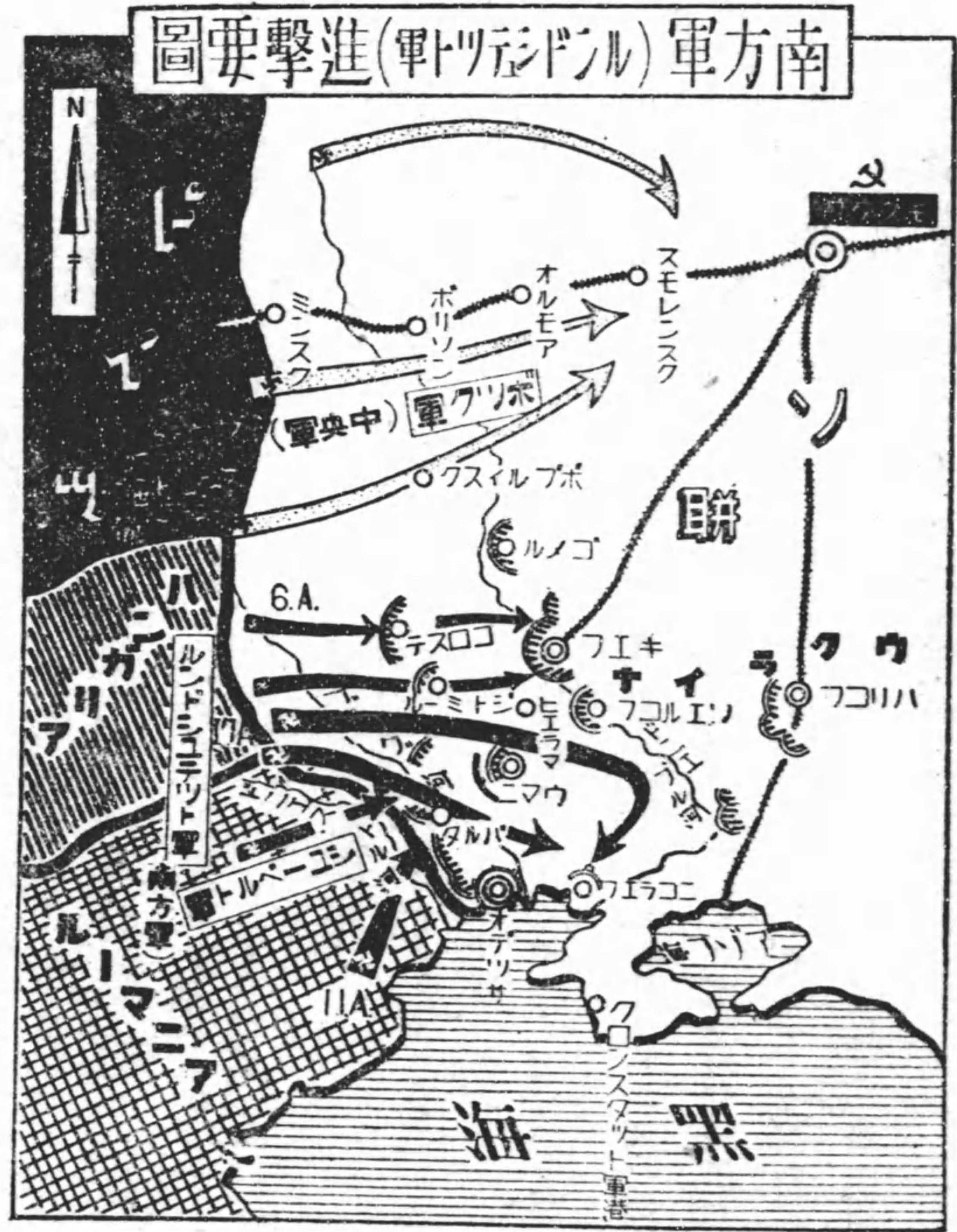
如何に獨軍が赫々たる戦果獲得の裏に、克苦堅忍、勝たなければならぬの意氣込みがあつたかが親はれる。

二、南方軍ルンドシュテット元帥麾下軍のウクライナ進撃

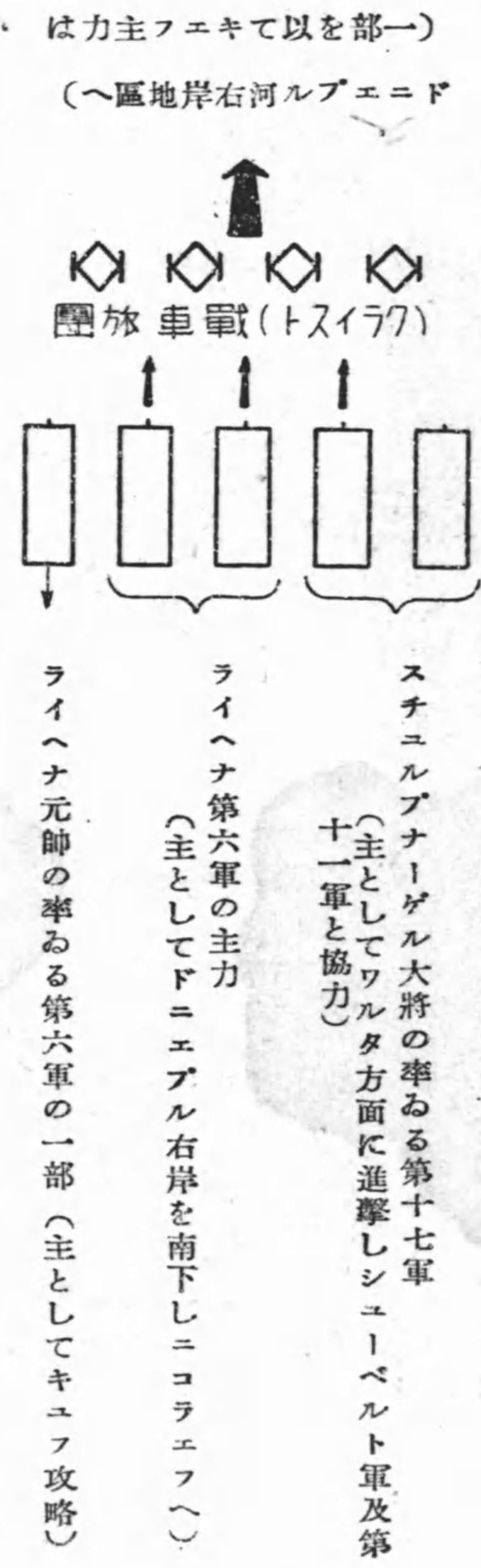
南方集團軍の進撃部署の概要

南方集團軍は、開戦當初から特に困難なる地形と悪天候を冒し、ソ軍南方集團軍司令官ブジョヌイ元帥の隷下狙撃師團五〇、騎兵師團一三、機械化師團一八、空軍師團八、總兵力約百二十萬の敵に對し、之を撃滅せねばならぬ重大役割を課せられた。従つて作戦指導も寡を以て衆に對する企圖を必要とした。そこで進撃部署として次のやうな方法と任務が各軍に與へられた。

この前進部署の要點は、速かにドニエプル河とルーマニア國境を流れるドニエストル河の中間地區にあるスターリン陣地を突破し、その正面にあるソ軍約十ヶ師團を獨軍得意の包圍作戦で捕捉殲滅し、



なし得れば黒海沿岸唯一の良港オデッサ竝にニコラエフ港を占領して黒海を制し、速かにウクライナ平地に進出しようと企圖したのであらう。



その前進部署を見ても、まづクライスト戦車旅団を以て其の快速を利用しキエフの要地を衝くと見せて、主力は急にドニエプル河に沿つて南下し、オデッサ、ニコラエフ兩港の背後に迫り、ライヘナ元帥の主力をマニ方面に進めて敵の背後から包圍せしめ、スチユルプナーゲル大将の第十七軍の主力はウマニの南側地区に進出、シユーベルト軍竝に獨第十一軍と確實に連繫して一舉に西部ウクラナイを領有するにあるもののやうであつた。

スターリン線の要衝陣地の突破とウマニの包圍戦

ソ聯軍は第六、第十二軍約三十ヶ師團を以て第一線部隊として、最前線陣地であるベイヤ、ツェルクウイ、ジトミール、ウインニツアの各都市の前方に設けられた設堡陣地を固守したが、キエフ前面では、七月五日まづベイヤ、ツェルクウイが獨逸ライヘナ元帥軍によつて突破せられ、翌六日にはキエフの門戸ともいふべきジトミールが獨軍の猛攻によつて崩壊し、獨軍の全線潮の如くキエフに向つて殺到した。

ライヘナ第六軍主力は、クライスト戦車旅団を先頭にドニエプル河の右岸に沿つて鋒先を轉じて南進し、ウマニ附近の赤軍約二十七師團を包圍し其の背後連絡を斷ち、第十七軍の主力と協力して完全な包圍鐵環を完遂してその當面のソ軍を連日連夜猛攻を續けた。

包圍されたソ軍の兵力約四十萬、包圍した獨軍約三十萬！ 全く結果から見れば不思議な戦況で、寡弱なる軍が優勢なる軍を包圍した形となつた。これこそ獨逸軍が獨特の作戦で、最も得意とする長所であらう。獨逸戦史の上でもこの陣容が成功した時は何時も勝つてゐる戦例が多い。例へば一八七〇年の普佛戦争に於けるセダンの會戦に、佛將マクマホンの優勢軍を包圍作戦で叩き潰して戦局を決定し、前歐大戦でも一九一四年八月二十三日—三十一日までのタンネンベルヒの殲滅戦(前述)で對露

戦に決定的凱歌を挙げた。

今次の大戦でも、これまでに三大包圍戦を執行して、それぞれの戦局を決定してゐる。即ち

對波蘭戰 九月十日—廿日迄

クツノの殲滅戰

對英、佛、白戰 五月二十日—三十一日迄

フランダースの大殲滅戰

對希臘戰 四月八日

ウエスクエス盆地の殲滅戰

更に對ソ戦には、開戦劈頭以來至る所に隨意隨所に大包圍戦が指導せられ、その中で最も決定的意義を持つたのはスモレンスクの大鐵環包圍であつたらう。

さて戦況は前に戻り獨軍は、ウマニにソ軍の大軍を包圍し、他方面ではキエフ、オデッサ作戦を指導し、ソ軍司令官ブジョヌイ元帥の麾下軍に決定的打撃を與へるべく銳意猛攻を行ひ、遂に八月八日にこの作戦は成功して俘虜十萬三千餘を獲得した。其の中にはソ軍第六、第十二軍司令官も武運拙なく降伏して獨逸軍門に跪いた。ソ軍の戦死は約二十萬と算せられる。かくて開戦以來まだ大きな損害を受けなかつたウクライナソ軍の大部は潰滅したのであつた。

三、北方集團軍レープ軍のレニングラード肉迫戰

パイプス湖南側地區のスターリン線突破、ソ聯領に突入す

ラトヴィア國に進駐してゐたソ軍は、獨のレープ元帥の指揮する北進軍に對し、デューナ河（ラトヴィア國首都リガ北側を流る）右岸地區に堅固に陣地を構築して頑強に抵抗した。

獨逸レープ軍は左記のやうな任務を有してゐた。

- 1 デューナ河畔のソ軍を撃破し、直ちにエストニア戰區に進撃し、ナルヴァ河地區（ソ聯とエストニア國境にある河パイプス湖からフィンランド灣に注ぐ）からレニングラードに肉迫する。
- 2 パイプス湖南側地區プスコフ、オストロフ附近のスターリン線を突破し、イルメン湖西側地區に進出し、レニングラードの側背を脅威すると共にモスクワとの連絡を遮斷すること。

そこでレープ軍は、主力を以てパイプス湖南側地區からスターリン線を突破する爲、八月五日プツシュ旅團と、ヘツプナー機甲旅團はデューナ河上流を強行渡河し、オストロフに向ひ突進し、ソ軍の抵抗を排除し、戦車と歩兵の突撃によつて遮二無二強襲し、遂に堅固なスターリン陣地線を突破しソ聯領内に驀進した。ここにレニングラード攻撃の可能性が招來せられたが、丁度連日の降雨で道路は泥濘となつて前進の如くならず、その上ソ軍は執拗に歩々の抗戦を續け、容易に後退しなかつた。然しレープ軍は逐次其の頑強な抵抗を排除してイルメン湖とパイプス湖の中間地區を目指しレニング



ラードに向ひ全軍相呼應して進撃し七月七日にはナルヴァ(要圖参照)附近に到達した。

パイプス湖北側からレニングラードに直進するためエストニア国内を掃蕩しナルヴァ河に前進してゐたレプ軍の一部隊であるキューヒラー旅団は、着々戦果を収めつゝ鋭意ソ聯國境線附近に達したが、ソ軍の頑強な抵抗を受け、パイプス湖南側から突進中のブツシユ

旅團と相策應してソ聯領内に一齊に突進することは出来なかつた。

このソ聯國境線突破戦區に於ける獨軍の戦果は俘虜三萬五千人以上、戦車三百五十五臺、大砲六百五十五門を鹵獲又は破壊し、ケラー空軍旅團も赫々たる戦果をあげ、ソ聯機七百七十一機を撃墜又は撃破した。

レニングラードは全市に塹壕を作り要塞化する

獨軍が愈々レニングラードに近迫したので、防衛司令官ウオロシロフ將軍は全市に戒嚴令を發して、ソ軍約七、八十萬を夫れ／＼嚴重な配備につけ、尙ほその外に市民義勇軍も走せ參じて防衛の爲立ち上り、どの家もどの街も、すべて家屋防禦を構へ塹壕を作つて市街戦を準備し、各工場では労働者が勤勞時間を終ると、すぐに銃を執つて射撃の練習を開始する。公園や運動場の廣場はすべて義勇軍の戦闘訓練場と化し、朝早くから労働者や學生達の義勇軍が戦闘訓練に餘念がなかつた。工場、學校、役所では盛んに集會を開いて今やひし／＼と迫る獨軍侵入の脅威の下に、悲壯な抗戦の意氣が全市街にみなぎつたのである。一方モスクワでも盛んに人民集會を開いてレニングラードを救へと絶叫し、その救援に赴かんと氣勢をあげた。

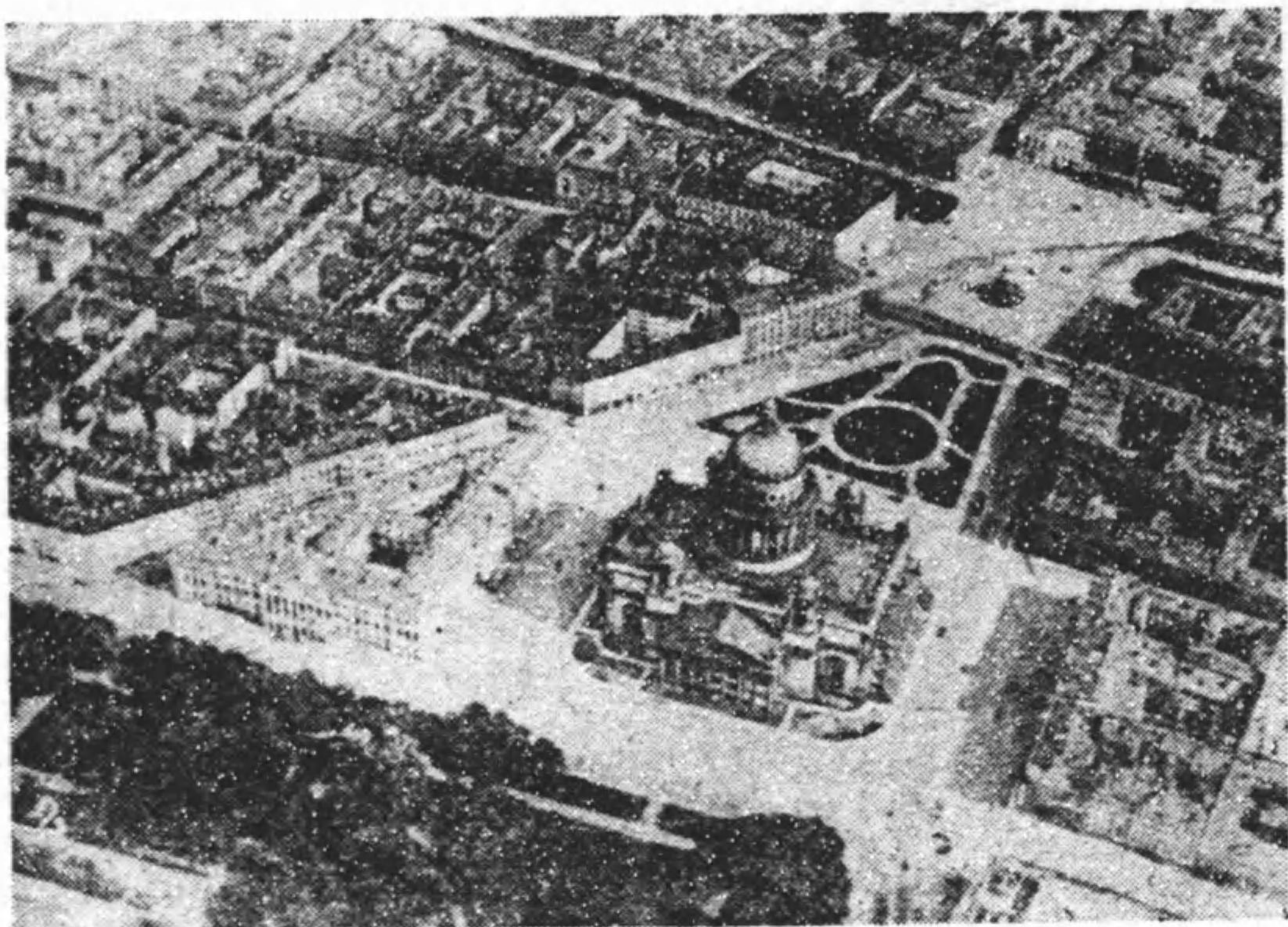
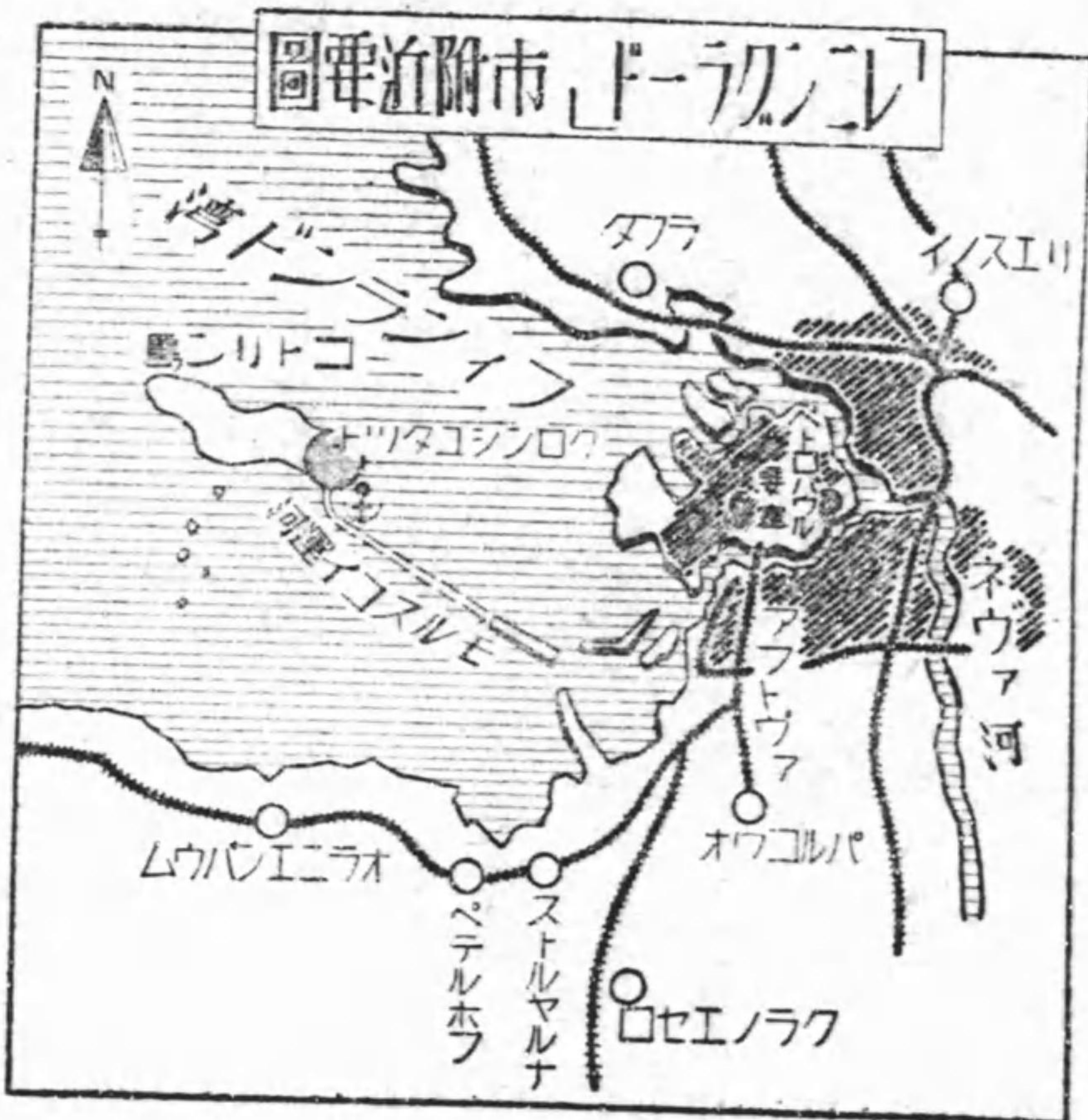
獨軍司令部では、ソ聯政府が最後の一人までレニングラードを死守せよとの命令を發し完全にその

都市を武装したに對し、獨軍としてはレ市が潰滅し盡された時にボルシェヴィキが、これに對し何等抗議をなす権利を有せざることを豫め宣言し、徹底的に破壊を斷行すべきを命令した。

戰略上から見たレニングラード市の價值

ソ聯にとつてレ市の重要性は、國防上の意義と、ボルシェヴィキ政權發足の地としての二面から考へられる。

國防上からいへばレ市はバルチック海に面する北門の要衝であつて、北はカレリア地峽に於てフィンランドと境を接し、ムルマンスク港（北海）を控へて北歐諸國並に白海、北氷洋への活躍の策源地である。三年前のソ芬開戦の直接原因がソ聯側のレ市を國防上擁護するといふ見地に立つた領土擴張と、軍事基地の要求にあつたことは既に周知の事實である。



レニングラード・フロオフスキ広場

さらにレ市の重要性はソ聯海軍特にバルチック艦隊唯一の根據地である事である。レ市の外に、その對岸のクロンシュタット軍港、ムルマンスク海軍基地（北海に面しコラス河々口）、アルハンゲリスク海軍基地（白海東岸ドウイナ河々口）、それにバルト三國併合によつて新にラトヴィヤ國のリバウ港（バルト海に面しリストニア國境に近き所）を有力な海軍根據地にした。しかしレ市はソ聯赤色艦隊の總根據地であつて、ここに大規模な造船所があつて、最近三萬五千トン級戦艦二隻（内一隻は昨年五月竣工と報ぜらる）が建造中であつた。その他軍事關係學校として、ウオロシローフ海軍大學、フルンゼ海軍兵學校、オルジョニキーゼ海軍通信學校等、赤色海軍の重要機關はここに集中

されてゐる。そこでレ市の陥落はその海軍に及ぼす打撃は致命的で、バルチック艦隊の運命も決定するわけである。

近年レ市は、モスクワ市とともに年々工業基地として完成の域に達し、兵器廠はもちろん、自動車工業、工作機械工業、化学工業、油脂工業、食糧工業等主として軍需工業地帯としての役割は重大なものであつた。

前歐戰當時獨軍がリガを占領し、レ市に迫つた時レーニンは對獨單獨講和によつてこのレ市を兵火の慘から救つた。

由來レ市はソ聯ではピーテルと呼ばれ一九〇五年の革命運動から、一九一七年の第一次革命、それに續く十日革命によつて歴史的に神聖地とされてゐた。したがつて平時レ市の探題には、スターリンに次ぐ共産黨の重要人物を支部長に据ゑ、國防的見地と黨の有力なる根據地としてレ市を重要視して來たのである。

されば獨ソ開戰と共にソ聯國防委員は、赤軍の長老ウオロシロフ元帥をこの方面戰區の總司令官に任じ、赤色陸海軍を統率してこの北門を固める任務を課したのは戰略的に見て如何にレ市が重要な地位にあつたかを推知することが出来る。

第三期作戰

(自八月二十三日 至九月二十三日 一ヶ月)

(主として南部ウクライナ地方 作戰と黒海沿岸地區の掃蕩戰)

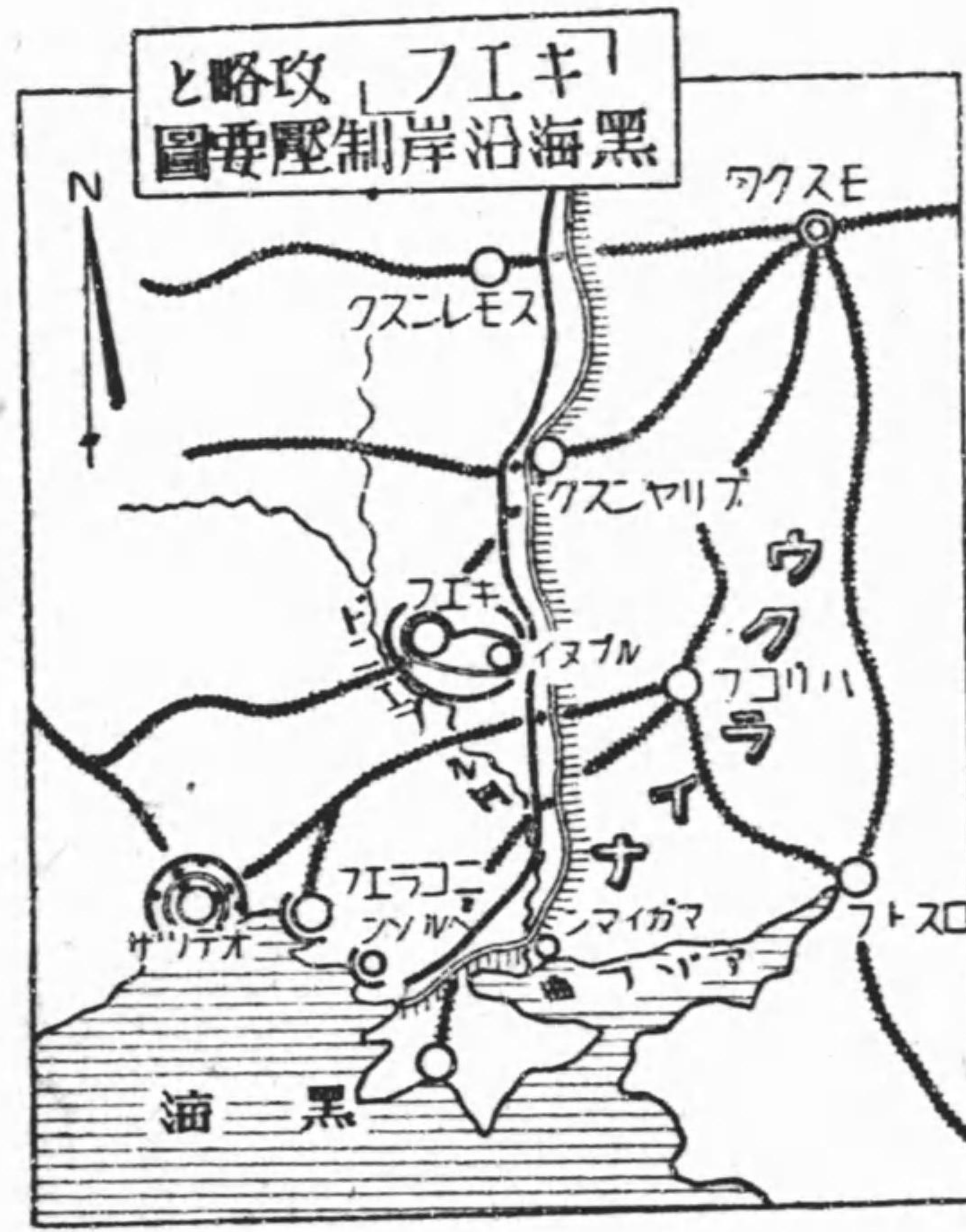
一、南方軍(ルンドシュテット軍)の攻略戰

ライヘナ元帥の第六軍精銳部隊は九月十九日午前十一時遂にウクラナイの首都キエフ市城頭高くハロゲンクロイツ旗を翻すと共に、敗走するソ聯軍を急追し、至る所に捕捉殲滅戰を敢行した。

獨逸宣傳中隊報道員は九月二十日キエフ攻略の凄慘な状況を次の如く發表した。

憶へば我が獨逸軍がキエフ目指してドニエプル河東方二百料の地點に到達したのが去る九月十三日、そして四日後の十七日より愈々同市攻略の猛攻撃を開始したのであつた。

攻撃軍はフォン・ライヘナ元帥の麾下で、同市の南方地區から西方に迂回しつ



つ激戦の幕を切つて落し、窮鼠猫を嚙むが如く荒れ狂ふソ聯籠城兵を撃破また撃破し、歩一歩この要塞に肉迫、遂に十八日夜同市の西側を流れるイルペン河畔に達した。月もない漆黒の夜だ。然し敵味方の猛射により交錯する砲弾の火の尾は、赤く河面をよぎつて凄惨限りない。河を距て、手の届きさうなキエフの街、それと見ては我が軍は休む間もなく暫し敵陣の静まるのを待つて、愈々沈黙の渡河戦は肅々として開始された。河水は氷のやうに冷たい、だが我が軍は軍装のまま、膝を腰を胸を水の中に浸して進んで行つた。ソ聯軍第一線の陣地兵は長い籠城で疲れ果て何時の間にか寝入つて終つたのか、我が軍の進撃にまだ気が付かぬ。彼等の監視不十分は天祐であつた。我々の黒い影は太い長い蛇のやうに、静かにうねりをうつて、枚を含んで敵岸に接近したが、眼前の岸の上には頑強なトーチカが闇の中にヅラリと並んでゐる。そこで我々は敵岸に辿り着いたものゝ、そのまゝ河の中で一齊に突撃の命令を待たねばならなかつた。

夜は深々とふけ互り、命令一下を待つ間の凍るやうな寒氣、これが九月晩夏の夜かとは誰しも思はれぬ、齒はがく／＼と震へて来る、と突如攻撃前進の命令だ。

それとばかり頑丈なトーチカ目がけて河中から手榴弾を投げつけた。敵のトーチカは忽ち銃眼を破られ一瞬にして平靜は化して、彼我兩軍の怒號叫喚の不夜城となつた。

然し一戦又一戦、遂次敵を壓迫して有利の態勢を占めた。あとから／＼と續く我が渡河部隊は迅速果敢に敵トーチカの側背に迫り次から次へと爆破し、其の據點を奪ひ、そのまゝ一氣に十九日の朝霧の中を怒濤の如く市街に突入した。遂にキエフ市の一角は破れた。忽ち敵司令部兵舎を占領し獨逸國旗を打ち立てた。午後一杯で我々は市街と其の附近の殘敵を掃蕩し、敵の砲兵陣地機銃陣地、戦車根據地等を占領するに成功し、全市を全く手中に収めることが出来た。

こゝに我々が特筆すべきことはキエフ要塞がソ聯苦心の構築にかゝるものだけあつて、極めて強靱であつたこと、そしてソ聯南軍の主力が集結してゐた事だ。殊に赤軍中でも最勇猛と云はれるゲ・ペ・ウ聯隊もこゝで我が軍の相手となり、凡ての軍事機關を總指揮して最後まで粘り強く抵抗した。我々の歩兵部隊と殆んど時を同じくして南側地區より我が戦車部隊も入城した。市街は至る所軍需工場で、さながら武器庫のやうな感じがした。今やそれらの凡ての活動を我軍の手によつて息の根を止めてしまつたのである。ほつと一息して見上げる目に我が光榮の旗が夕日の光りを受けてさん／＼と輝いてゐる。

この地は餘りにも迅速な獨軍の急進撃によつて、ソ聯獨特の焦土化を施すひまもなく、市街並に各種工場は比較的破壊されずにすんだが、其の附近の地區は凄惨な廢墟と化して獨軍の手中に歸した。

ライヘナ兵團、クライスト、グチリアン兵團の機甲部隊はキエフ及び其の東方地區に於ける殲滅戰で、獨逸軍の包圍圈内に陥つたソ聯軍の大半を撃滅し、其の俘虜は現在までに判明せるもの約十五萬、鹵獲せる戦車百五十一臺、砲六百二門、その他の戦利品は無數であつた。

慘憺たるキエフ附近の戰場

キエフ附近の戦闘が如何に慘烈であつたかは、戦闘直後獨軍の案内によつて視察した各新聞通信員の報ずる所を綜合して記して見やう。

ソ聯領に入ると戰場色は東へ向ふほど一步一步濃くなつて來たが、キエフ前面では附近一帯のソ聯軍陣地地區は豫想以上凄惨な戦ひの跡をまざくと見せられた。九月十九日獨軍が占領して以來すでに約一ヶ月を経過し、おそらく大半は片付けられたのであらうが、キエフに近づくほど多くなる道路の兩側に横倒しになつたソ聯戦車、軒並に弾痕で蜂の巢のやうになつた家屋の間を通つて町の入口にかゝると、鐵橋が一つまた一つ、よくもかうまで破壊出來たと思はれるほどひん曲つた橋梁とレールのくしやくしな残骸を曝らしてゐる。まるで人間の破壊力の標本である。小高い岡の彼方に夕陽を浴びて聳立するビザンチン様式の寺院の尖塔と實に奇怪な對照である。われわれのバスはその破壊された鐵橋の傍に造られた木橋を渡つて町へ入つた。



キエフ市

橋頭に「OT橋梁班(オット建設隊の略稱)と鮮かに書いた木札が立つてゐる。橋梁架設班が早くも、こゝまで建設の歩を進めてゐるのだ。人と家財道具とを乗せた馬車が三々五々町へ入つて行く、反對に町を出て行く車、づだ袋を肩にしてとぼく西へ向ふ男女も見える。しかし車の警笛やエンジンの音が高いだけで四邊は妙にひっそりしてゐる感じである。ロシア最古の町、そしてロシア宗教の總本山である町の雰圍氣がさう思はせるのかも知れない。しかしこのウクライナの古都も今度の戦争で急激にその相貌を變へつゝある。

ロシアより前にキエフがあつた。といはれるこの最古の町は、八世紀すでにロシアのメツカ(アラビアのメジヤスのメツカにたとへて)となつて

以來、十三世紀には蒙古軍の侵入、十四世紀にはリトワニア、ポーランド領となり、十七世紀にはロシア領、前大戦の一九一八年三月には獨軍占領、一九二二年再びソ聯領といふやうに數奇な運命を辿つてきた。

殊に「宗教は阿片なり」とするソ聯の治下では、有名なローラ寺院が博物館となつたのを始め、寺院教會は養老院や倉庫とされて、一時全く宗教總本山の姿を消した。今回の獨ソ開戦と共にモスクワでは、二十數年來の寺院の扉が開いて民衆の「勝利の祈願」が行はれたといふからこゝでも恐らく久方ぶりに宗教都市としてのキエフが再び民衆の心に再生したかも知れない。獨軍は占領とともにこの閉ぢられてゐた寺院教會の祈禱を復活した。博物館とされたローラ寺院の扉には「宗教は人民の阿片」と書かれてあり、倉庫となり兵營となつてゐた教會の金の十字架は無残にへし折られてゐるが、日曜毎に集まる民衆の數は増す一方だといふ。二十五年の赤色政策から今度の恐ろしい戦火を體驗したウクライナ民衆は、無我夢中で宗教にすがりついたといふところが見える。

占領後五日間は全市到る處で爆發

キエフ市は、電燈もつかなければ水道も暖房もない。ソ聯軍が水道、水力發電所を完全に破壊して退却したからである。その破壊に用ひた地雷はただに水力發電所に限らず、道路や建物等到る處に敷設され、怖るべき被害を齎らしてゐる。町の入口の二つの鐵橋も地雷で破壊され、占領後獨軍もこの地雷の爲相當の犠牲を出し、占領後五日間は隨所に爆發が絶へない。そこで徹底的地雷搜索作業が連日行はれた結果、重要な建物、たとへば官廳、郵便局、ホテル、ことに世界的有名なソフィア寺院などから掘り出された地雷が實に一萬個！ その上六千個の遲發性爆彈が発見され、そのうちには三トントン半と云ふ大爆彈もあり、今數日発見が遅れたらさらに恐るべき大被害を生ずるところであつた。

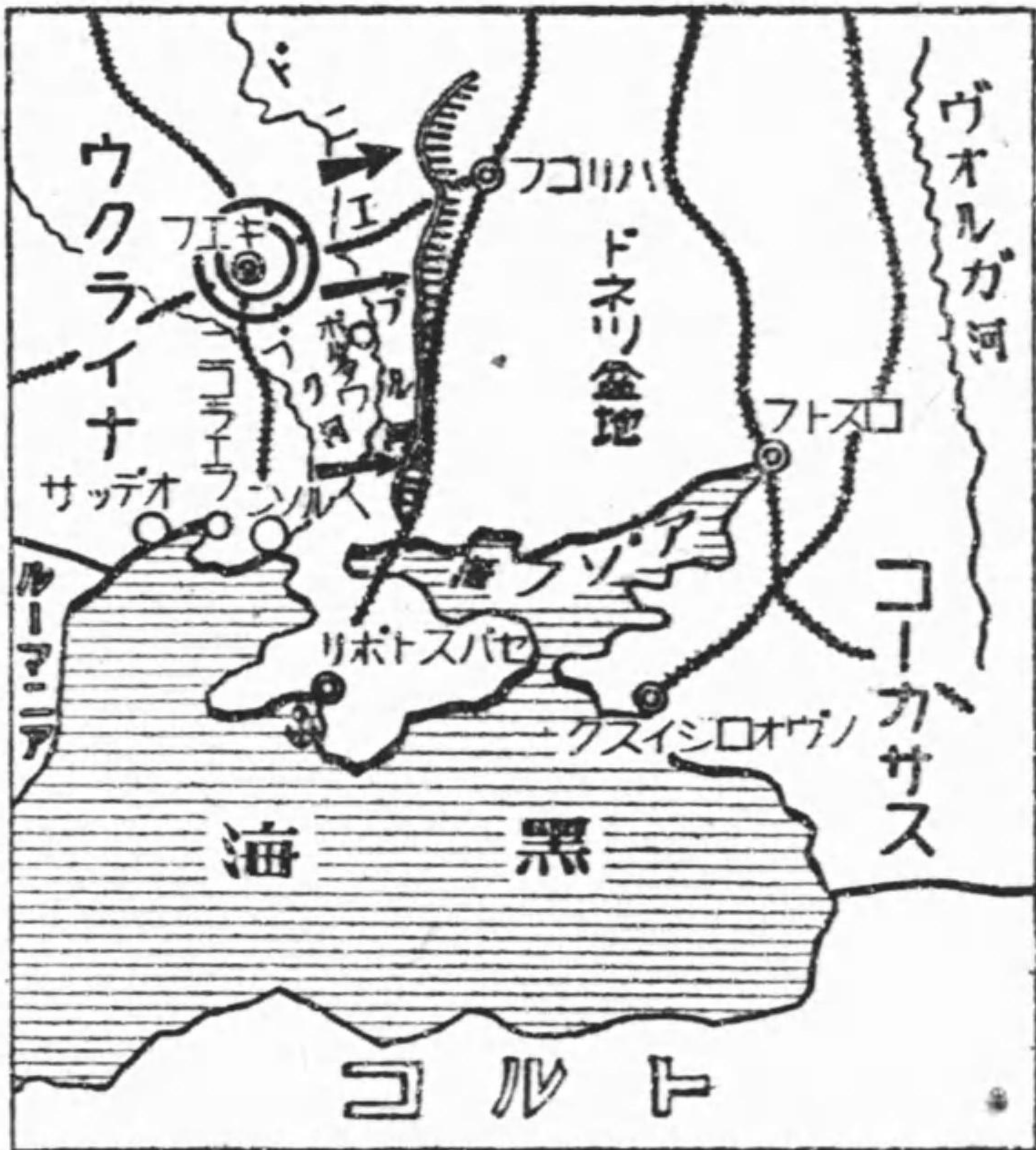
スターリンは獨ソ開戦直後、キエフを一八一二年のモスクワ（奈那軍進入の際の徹底的焦土化の例）たらしむべしと命令し、キエフへ入る獨軍は無數の獨兵の死骸を越えてゆかねばならぬであらうと云つたがソ聯軍は文字通り焦土戦術を企てたのであつた。

地雷の外にソ聯軍は退却の際、所謂モロトフ・カクテル等の強力な爆彈をもつて破壊して行つた。目抜きの大通りはもとより、殆ど全市の四分一に相當する區域がこのため灰燼と化した。

戦局の中心黒海沿岸へ—ドニエプル河の強行渡河戦

キエフ附近の陥落の前に行はれた戦闘は、先づ其の東側地區であるドニエプル河畔に展開した所謂

ウクライナ電撃戦である。キエフで意外に頑強な抵抗を受けたので、獨軍はソ聯軍を包圍して其の重
壓下に置くと共に、一面には其の主力軍を以て八月十九日ドニエプル河全線に互つて一齊に敵前強行
渡河を決行した。(要圖参照)



ドニエプル河は全長二千五百五十軒、河幅は
キエフ附近で三百二十米河口附近のヘルソン
では實に六百五十米、水深四米以上といふ大
河なので、この渡河作戦は容易の業ではない
が、獨軍は全ウクライナ地區一帯の制壓を目
指し空軍の協力下に多大の犠牲を顧みず壯烈
な死闘を展開、隨所に渡河點を確保し續々渡
河を決行した。一方落下傘部隊、グライダー
部隊を多數ドニエプル東岸に着陸せしめ敵の
背後に急迫せしめたのである。

獨軍が各所で強行渡河を決行するのを阻止するため、ソ聯軍はドニエプル河の左岸(東岸)にト

チカ陣地を占領して、敗退した諸軍を整備し、必死の抵抗を行つたが、上圖の如くソ軍陣地は、獨軍
陣地に比し土地が一般に低く、瞰制せられて不利の状態にあり非常な
苦戦に陥つた。

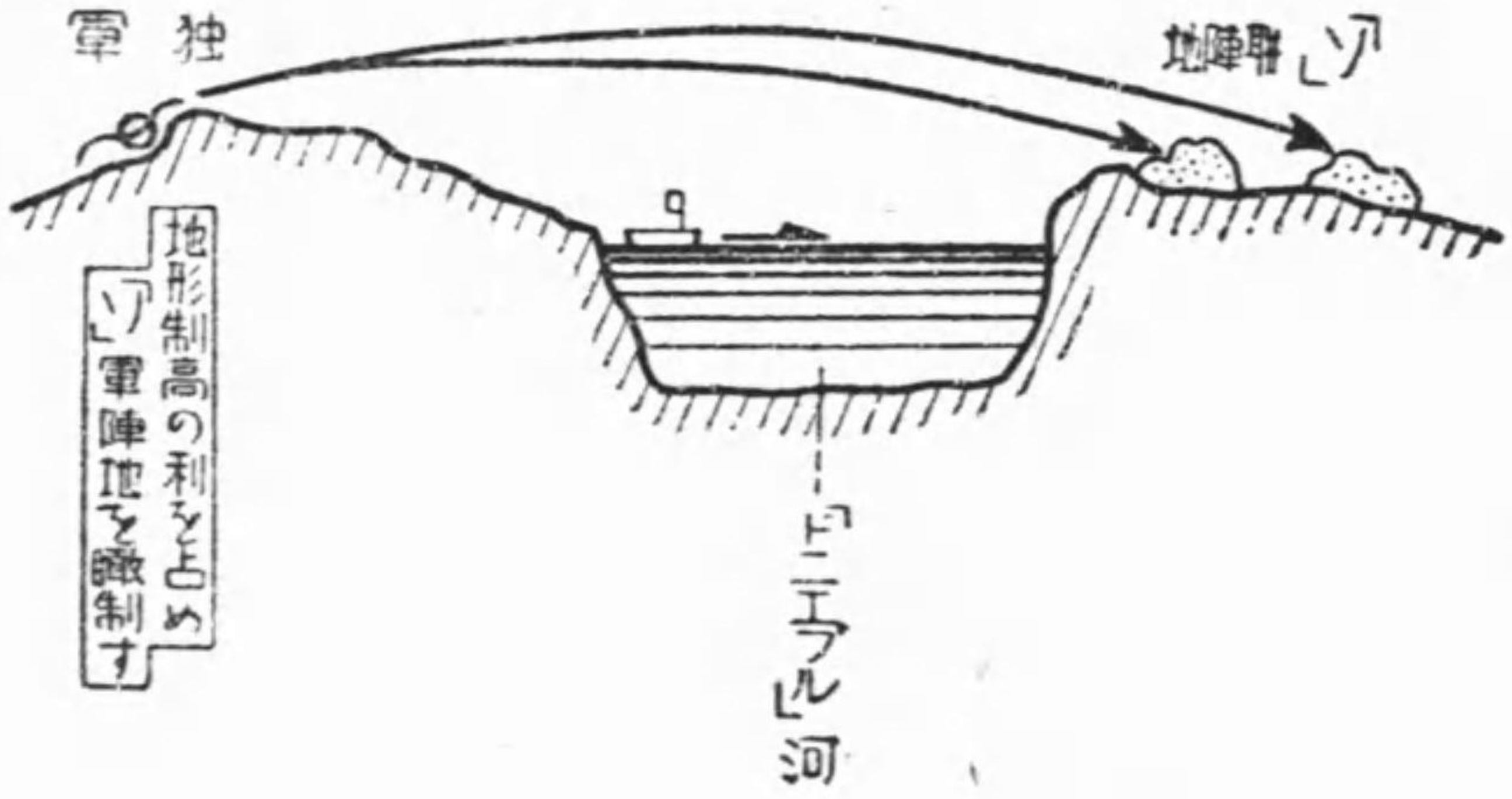
第一日の渡河戦は天候不良で若干の降雨があり、川霧深く兩岸に立
ち籠つてゐた。獨軍はこれを利用して、戦術上からいへば渡河即ち攻
撃の要領で、大規模の正面から全軍一齊に浮舟によつてドニエプル河
を機航(發動機船の曳航)で、友軍砲兵の掩護射撃と、空軍の爆撃の
協力、グライダー、落下傘部隊の敵背後夾撃に呼應して敵岸に向ひ進
發した。

ソ軍必死の抵抗を排除して敵岸にはひ上り、直ちに敵トチカ陣地
に突撃し各所に之を爆碎して次々と占領して遂に渡河戦に成功した。

獨軍の迅速なる作戦はウクライナ地方を風靡した

キエフ附近で頑強な抵抗をなしたつたソ軍の大集團は獨軍の包

圍作戦に陥り、かてゝ加へて今やドニエプル河の強行渡河に成功した獨軍は、ソ軍の弱點ともいふべ



き南部ウクライナの守備戦線に向つて快速な鋭鋒を急角度に變換して、キエフ北側地方から南下しつゝあつた伊、羅、洪聯合軍と相呼應して、ドニエプル東側一帯地區に邁進し、ハコリフ附近のソ軍に對し老大な大包圍殲滅戦を開始した。こゝに獨逸南方軍總司令官ルンドシュテット元帥麾下の精銳軍を主體とし聯合軍を合し總兵力百五十萬！ソ聯軍指揮官ブジョンヌイ元帥麾下の二百萬！兩軍は卍字巴の大混戦となり激烈な戦鬪はウクライナ大平野の各所に展開され、膠着したかに見えた獨ソ戦線は特に南方に於て急に躍動を開始した。

獨逸機甲部隊の活躍と赤軍の惨敗

本會戦で最も目ざましく活躍したのは獨軍機甲兵團であつた。一日平均三十餘キロといふ猛進撃振りで、不意をつかれたソ聯軍は至る所に周章狼狽、ひたすら獨逸軍の包圍鐵環内に捉はれることを恐れ、抵抗を試みるよりはむしろ如何にして安全に退却するかを一意焦慮するといふ醜體を演じた。勢に乗つた獨軍は、息つくひまもなく交通上の要衝であるウマン、キロヴォ、ペルウオマイスク鐵鑛業の中心地であるクリヴォイログ等の各都市を次々に攻略した。

他方黒海の要港オデッサも、アントネスコ軍とシュューベルト軍によつて忽ち包圍され、ブク河口の造船業の中心ニコラエフも南方軍たる第十七軍のため陥落した。

かくの如き獨軍の神速果敢なる包圍體制にソ聯のブジョンヌイ軍は、もはや赤軍の矜持も誇りもかなぐり捨て、ドニエプル兩岸地區を潰走し、幸ひにも襲來した數日間に互る豪雨を利用して、晝夜を分たずありとあらゆる手段によりドニエプル西岸地區の軍を集結しようとしたが、意の如くならず慘澹たる大混戦に陥つた。二百萬のソ軍は隨所に散亂し、少くも百萬は獨軍の好餌となつたのであらう。たしかにこの一大會戦によつてうけたソ軍の打撃はフランダーズの大殲滅戦にも劣らぬ慘劇であつた。

獨軍の發表した十日間のウクライナ戦で三十三萬の俘虜と、戦車二千五百臺、大砲三千七百門を破壊又は鹵獲した大戦果によつても推知することが出来る。

ドニエプル大發電所ダムの爆破

ウクライナ工業地帯が危機に陥つたのを看破したソ軍司令官ブジョンヌイ元帥は、スターリンの呼號する焦土戦術の一端としてソ聯最大のドニエプル大發電所を斷乎として爆破した。即ち其の中心であるサボジエのレーニン・ドニエプログスの大ダムをソ軍の工兵隊は二十日曉闇を利用して、同ダムに大量のダイナマイトを仕掛け、元帥の命令一下ウクライナ工業の生命線である同ダムを惜げもなく木葉微塵に爆破してしまつた。そしてこのためキエフに到るドニエプル上流一帯は奔流逆巻く大洪水と

なり、同方面の獨逸の渡河作戰は遂に一大障礙に逢着するに至つた程であつた。

オデツサの包圍戰

黒海唯一のソ聯の要港オデツサは、羅國首相アントネスコ將軍の率ゐるアントネスコ軍（獨第十一軍、ルーマニアの第三、第四軍）によつて八月十七日から二ヶ月間完全に包圍せられ、連日連夜の猛攻に、同港はまるで孤島の如く取り殘され、ソ軍の籠城部隊は惡戰苦闘、殊にオデツサ北側のルストドルフ地區では、獨羅聯合軍の強力な部隊によつて、屢々強引なる攻撃を受けたが善戰して死守した。其の他の周邊地區に於ても、同様に日一日と肉迫せられ、市街には砲彈炸裂爆裂して、至る所に火災を起し、限りある守兵は逐次減損して戦力は消耗し、殊に食糧の缺乏は一般市民に多大の恐怖心を與へた。アントネスコ軍は、連日早曉から猛爆と猛砲撃を加へたがソ軍は克く抗戰に堪へた。

オデツサ防衛陣地は市外十キロ前後のダルニクを最後の決戦陣地として、相當堅固に各種の堡壘が構設せられてあつた。攻撃軍は約二ヶ月逼迫攻撃により、十月中旬遂に此の陣地線に肉迫し、包圍線を完成し二百三十門の火砲を以て總攻撃を行つた。十月十五日に至りソ聯防衛司令官は急に市内の工場、住宅の破壊を命じたので、直ちに夫々焼夷彈、地雷、爆藥は装置され次々と爆破された。それが終ると市民に強制的避難を命じ、その夜約五十隻の輸送船は港内に現はれ、市民の多數を乗せて急遽

出帆した。その日までにはソ聯軍としては約二ヶ月間あらゆる手段と方法で全市民に抗戰を呼びかけ、全市武装を要求し、道路は悉くバリケートを張り廻らし、石と土囊を積み重ねた各種の胸牆陣地が街の入口は勿論、要處々々至る處に築かれ、鐵條網は農家といはず、工場といはず一軒々に張り設けられ、共産黨が市街戰に備へて民衆を驅使し「最後の一人まで」の抵抗を企てたのである。

彼等はスターリンがオデツサの英雄といふ讃辭に答へて、巴里のコンミュン革命、近くは西班牙のマドリッドの籠城を企圖してゐたのであらう。食糧は幸ひにも海上封鎖をうけてゐないので全部海から運んでゐたらしい。

かくてアンテネスト軍はソ聯軍が全部撤退した翌十月十六日入城したが、其の際一部の市街戰が行はれた。かくして焦土化された無慘な硝煙尙ほ漂ふオデツサを完全に占領した。

南方軍主力は今やコーカサスを目指し猛進を開始せり

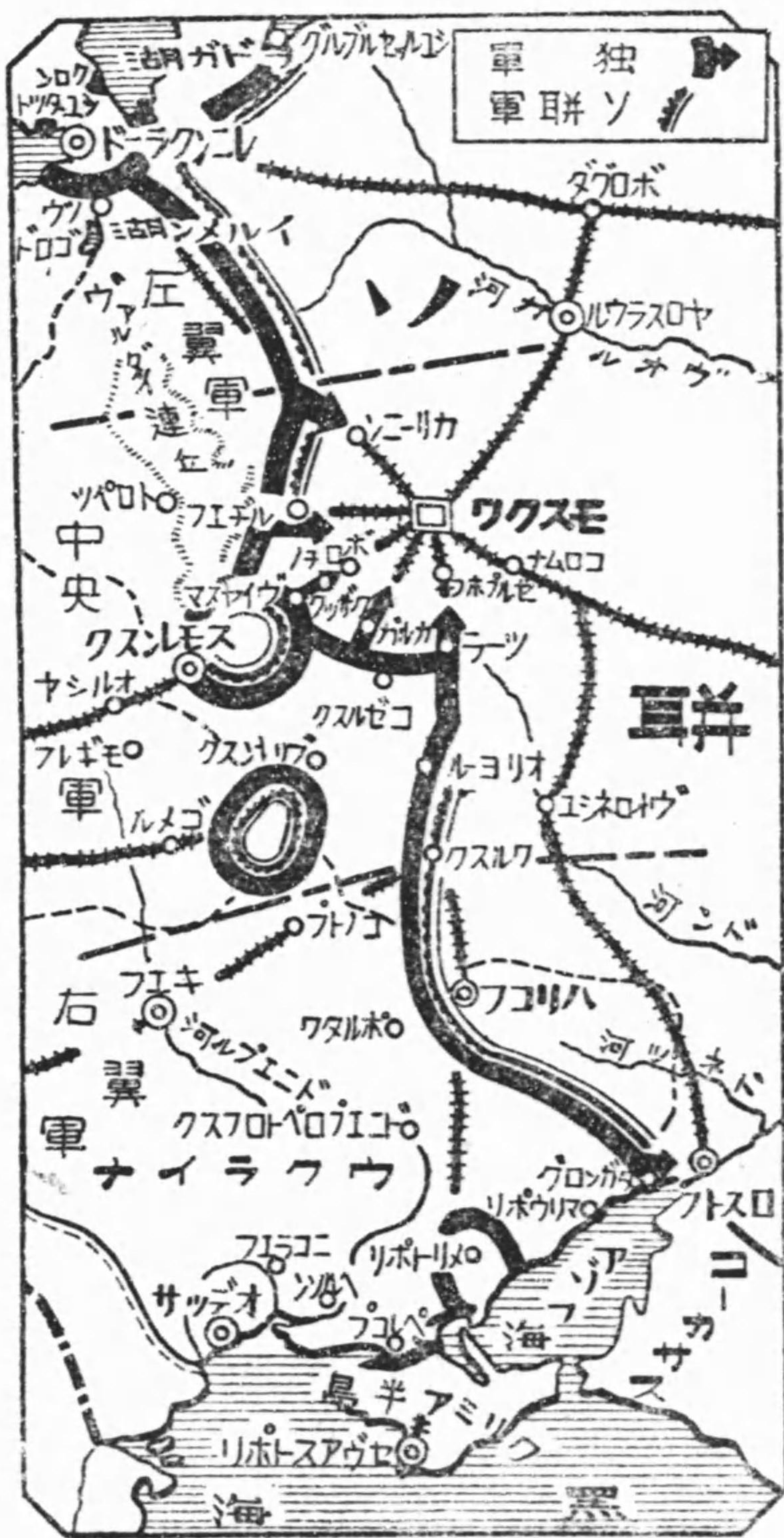
南部ウクライナ戰で再び偉大な戦果を収めた南方軍司令官ルンドシュテット元帥の狙ひは更に大きく、敵に立直りの隙を與へずウクライナ全土を席卷し、更に進んでソ聯の心臟部コーカサスの油田確保をめざし勇躍前進を開始した。

第四期作戦

(自九月二十四日一ヶ月)
至十月二十四日一ヶ月)

(主として中央軍のモスクワ進攻戦並に南部ハリコフの攻略戦及北部レニングラードの包圍戦)

十月月中旬に於けるソ連軍の戦線



一、獨逸中央軍のモスクワ進攻戦!!

獨逸の作戦はソ連軍司令官チモシエンコ元帥乾坤一擲の一大反撃企圖を粉碎す

ベルリナー・メルゼン紙は、次の如くソ連軍大規模の反撃戦に對する獨軍の巧妙な作戦を發表した。

獨逸最高司令部は、ボルシエヴィキの作戦指導部が東部戦線中央部(モスクワ街道兩側地區)

を特に重要視してゐた點に豫め注目を拂ひ、スモレンスク・ヴィヤズマ・モスクワ間自動車道路

北側地區にはボルシエヴィキ軍選り抜きの人材資材を備へて、近代적裝備を有する大軍が集結さ

れてゐた。そしてこの大軍を統率するものは、ソ連の至寶と謳はれてゐたチモシエンコ元帥であ

る。彼の任務は單なる防衛ではなくて、積極的に對獨軍攻勢行動に出るべき命令を課せられてゐ

た。勿論ソ連の攻勢計畫は重大な意義と、戰略上遠大な目的を持つものであつた。即ち北方(レ

ニングラード方面)南方(ウクライナ方面)に於ける獨軍の進撃が、停止するところを知らない

状態なのに鑑み、クレムリン宮(モスクワ大本營)ではせめは中央部戦線だけは、效果的な攻勢

を展開し、獨軍の南北兩翼に於ける急進撃を水泡に歸せしめやうと夢想してゐた。

この目的達成の爲にソ連軍は如何に作戦したか?

チモンエンコ元帥(ソ聯軍中央司令官)は先づ隸下軍を以て、スモレンスクを奪還し、其の北方にある獨逸軍の側背を脅威せんと企圖し、あらゆる準備と作戦を練つた。自信満々一氣に獨逸軍を粉碎し得るの確信を抱いたソ聯當局は、英、米の最高主権者等にも、この中央大攻勢企圖はソ聯軍蹶起の大反撃戦であることを吹聴し、愈々其の行動に移らうとした。そしていまだこの世のものにならない戦略を名付けて「チモンエンコ作戦」と稱することになった。

ところが獨逸高等司令部の炯眼と將兵の勇猛果敢な行動とは、敵の計畫の裏をかくことに成功した。即ち敵の大兵團を引きつけて一舉にこれを捕捉殲滅することを完遂した。かのヴィヤズマ地区にある赤軍を包圍殲滅したことは、今回の大會戦の一端を示すものに過ぎないのであつて、これに類似する戦果は他の到る處で現出され、結局赤軍の運命を決することになった。その戦闘の激烈であつたことは、ピヤリストック地区、キエフ地区等の會戦に展開された悽しい光景が、今又この大包圍戦にも再現したのである。

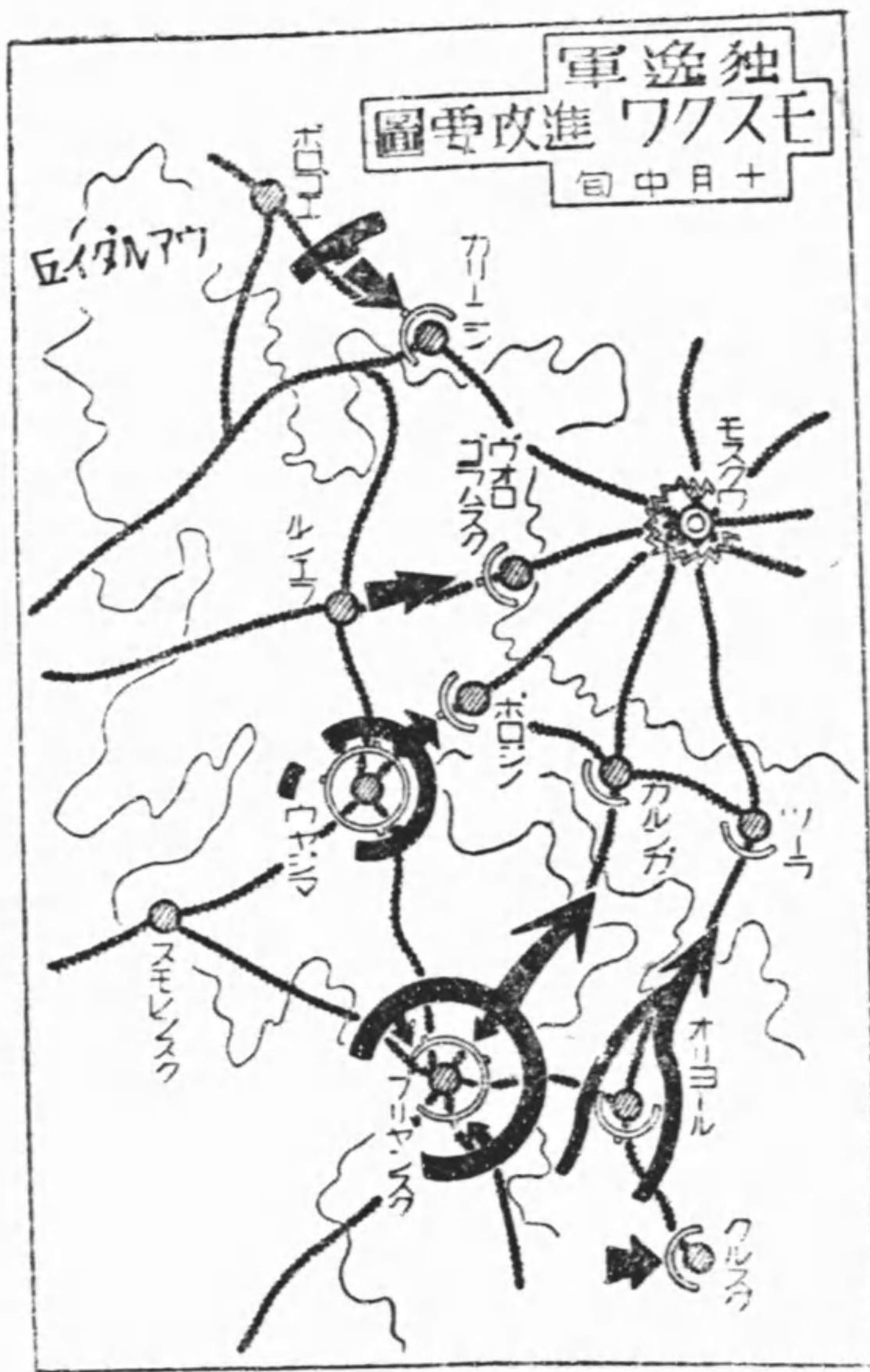
蜿蜒とのび擴がつてゐる獨逸戦線の要所々々には局部的な小包圍陣が張られてゐた。獨逸の鐵環内に追ひ込まれたソ聯軍の運命は、風前の燈の如き感があつた。折角苦慮した反撃も其の出鼻を挫かれ、惨々の敗滅となり獨逸軍をして敵都モスクワを距る二百キロの地點にまで逆に進出せ

しめた事實は、獨逸中央軍の突破作戦の善謀善戦の成果が如何に大であつたかを證明してゐる。ソ聯軍指揮官としては、一大決意の下に深謀遠慮して決定的勝利の端緒を得ようと期待したが、六日間に互る死闘の結果は正に事志と違ひ、獨逸軍の好餌となり、いはゆるチモンエンコ作戦は獨逸軍の大殲滅戦に遭つて一たまりもなくけし飛んでしまつたのである。

では、その戦争經過を述べて見よう。

ひた押しにモスクワ街道を猛進撃

十月二日、モスクワ目指して總進撃の火蓋を切つたフォン・ボツク元帥の獨逸中央軍を主力とする各軍はまたたくまに、ヴィヤズマ、ブリヤンスク、オリョール等モスクワ周邊の防禦外



廓の要衝を抜いて、十月十三日には最も快速進撃した獨軍裝甲部隊はモスクワを距る約六十キロに到達した。怒濤の如き獨逸軍進撃の前には、これに對抗するソ聯軍中に精銳を誇るチモシエンコ元帥の麾下諸軍の起死回生を決した一大反撃も見事に挫折され、まさに蟻螂の斧の如き慘狀を呈し、隨所に獨軍の包圍鐵環内にしめあげられたのであつた。

獨逸大本營の作戰根本方針は、「冬將軍來」の切迫以前に赤都モスクワを必ず屠るべく、鐵石の如き堅い決意の下に東部戰線總延長千數百キロに亙る戰線の將兵を激勵した。當時獨逸宣傳中隊長アルフオンス・ブルユグゼマンが次の如きルポルタージュを銃後國民に寄せ、如何にこの戦ひが慎重な準備と周到な企劃の下に行はれたかを發表し、全獨逸國民の感激を更らに新にした。

遂に來た、待望の總攻撃命令

キエフ陥落前後から十月二日に至る數週間、モスクワ前面に配陣された我が軍は鐵の門を形成しつゝ時機の到るを待つた。この間敵は我が軍の沈黙を攻撃の弱化と誤斷し、前後數十回に亙つて執拗な反撃を展開し來り、その都度多大の損害を蒙つて撃退された。

戰鬪よりも遙かに苦難に滿ちたのはこの全期間を通じ、將兵は睡眠不足、食糧缺乏、あらゆる艱苦を忍び、歩兵部隊は何れも狭苦しい塹壕や泥土で埋れた穴の中に横はりつゝ、骸肉の歎をかこ

つてゐたことだ。しかも彼等の手中には絶えず小銃、機銃及び手榴彈がしつかと握られてゐた。

彼等は殆んど眠むることも、手足を伸ばすことも出来なかつた。泥にまみれたばかりでなく、極度に疲労し、戎衣は見るかげもなく引き千切れた。併も晝夜を問はず土鼠色のソ聯の大集團が反撃して來ると、その都度決然起ら上つてこれを撃退した。彼等は最後の手榴彈をも擲つて敵戰車群を攻撃し、敵の逆襲に備へて塹壕内を銃劍で清掃した。こんな生活がどれほど耐へ難い苦しみであつたかは恐らく想像を絶するものがある。

然るに今や彼等が戎衣の泥土を拂ひ、塹壕から躍り出すときが來たのだ。將兵達が一日千秋の思ひで待つた總攻撃の命令は遂に彼等の許に齎らされた。この總攻撃は對ソ聯軍に一大決戦に關すると總統の告示が、塹壕の土壁に掲げられたその瞬間に開始されたのだ！

數千の大小火砲は一齊に咆哮す

その朝、霧は深くたれこめて、周圍の風景は歪んでゐるかに見られたが、我が軍のおびたゞしい大小火砲は全線に亙つて一齊に砲門が開かれ、砲聲股々として大平野を搖がせ、數十萬の機銃は悉く火を吐き、手榴彈は隨所に炸裂した。大地は砲彈の炸裂毎に激震の如く波うち、黒、白色の砲煙の巨塔が天に沖した。

我が軍の一斉砲撃は開戦當初のブグ河畔の戦闘やその後の決定的攻撃に際して、我が砲兵部隊が輝かしい戦果を収めたと同様、敵をして全く對抗策を講ずる餘裕を與へなかつた。

砲兵部隊の敵陣目がけて行ふ集中砲火の熾烈なる效果に引つゞき、歩兵部隊は轟々天地を揺がす戦車の突進と共に突撃を開始し、潮の如く雪崩れ込むのだ。敵の狼狽に乗じて鐵條網や地雷を排除しつゝ、敵の塹壕内に飛び込まねばならない。我が砲撃は時の経過と共に益々はげしくなつて行く。機關銃の弾道は大型榴弾の粗い網の目や、手榴弾の細い目を縫つて飛び交ひ、その彈雨下では人間の隠れる餘地は一寸の所だにないのだ。

やがて我が軍の雨注する砲撃に敵陣は沈黙した。それと見るや歩兵の突撃部隊は一斉に塹壕とトーチカから躍り出で、雨霞の如き砲火を冒し、敵軍の中核目がけて突進した。彼等は彼我塹壕間の無人地帯を飛び越へて、ソ聯兵が打ち重つて死傷してゐる第一線塹壕の奪取に成功した。が彼等は息つく暇もなく追撃に移つた。最早生き残りの敵兵を數へる餘裕などは全くない。ただ絶對に達しなねばならない眼前の目標に向つて突進するのみであつた。

敵もさるもの、我が軍が最初の追撃戦を開始するや、電撃戦によつて蒙つたショックを克服して漸く立ち直りの態勢を示し、悲壯な形相をもつて猛然反撃を展開して來た。敵の砲兵も死物狂ひに我が突撃歩兵に水も洩らさぬ釣瓶打ちの砲撃を浴びせる凄しさ。だがこんなことで我が歩兵の突撃を阻止することは不可能であつた。我が歩兵はさながら大きなうねりの如く、ひた押しに押し寄せる敵軍に飛びかゝつて、壯烈なる白兵戦を展開した。が、所詮彼等の勇氣も暴虎馮河のそれに過ぎなかつた。かくて最初の白兵戦は我が軍の壓倒的勝利のうちに幕を閉ぢた。この日の午後、戦場は再び墓場の如き静けさに還つた。一瞬前への阿鼻叫喚は夢に見た情景に過ぎなかつたかのやうに！

ヴィヤズマ、ブリヤンスク地区の撃滅戦とモスクワの危機

ソ聯發表によれば、ヴィヤズマ地区に新攻勢を企圖した獨逸軍は、ソ聯戦闘機、爆撃機隊の猛攻砲兵部隊の熾烈な砲火、歩兵部隊の頑強な抵抗に逢着し、戦闘は刻々激烈となり、空軍の爆撃は晝夜を分たず續けられた。ソ聯砲兵は、獨逸軍の増援部隊に絶えまない猛砲火を浴びせ、獨逸軍は兵力及び武器の甚大な損失を蒙つたが、屍山血河を踏み越へてソ聯陣地に肉迫して來た。これに對しソ聯部隊の頑強な抵抗と空軍の勇敢な活躍は、何れも死物狂ひの凄慘を極め、まさに人力の限りを盡くし最高の賞讃を受くべきであると自負してゐる。

この戦場は獨軍が五百キロの幅を以て中部戦線の赤軍防禦線を突破したのであつて、大きく区分して見れば、獨軍はソ軍をヴィヤズマとブリヤンスクの二地區に包圍し、更にこの大包圍は獨軍各部隊の分斷作戦によつて小さな包圍線に分割されて隨所各個にソ軍を殲滅したのである。

ブリヤンスク地區の赤軍は、決死奮闘してこの圍みを突破しようと試みたが、其の都度獨空軍及び戦車隊の爲めに夥しい流血の犠牲を出して撃退され、恰度底のない泥土の池に落ち込んだ人間が、岸に登らんとして、もがけばもがく程、深味に陥ち込んで行くと同じ運命となつたのである。

その努力も驚異的性能を有する最新式獨軍火器の前には全く無力で、この無謀な企圖の犠牲となつて斃れた赤軍兵士の死體は累々と



して戦場を埋め、戦闘の特に猛烈であつた一地點では僅かに幅二百米の戦線に八百五十の死體が横は

り、寒風に吹きさらされてゐるといふ有様だつた。そして其の附近には軍需品を満載した軍用トラック三百臺、牽引車、大砲等が散亂し慘状は人をして目を掩はしむるものがあつた。

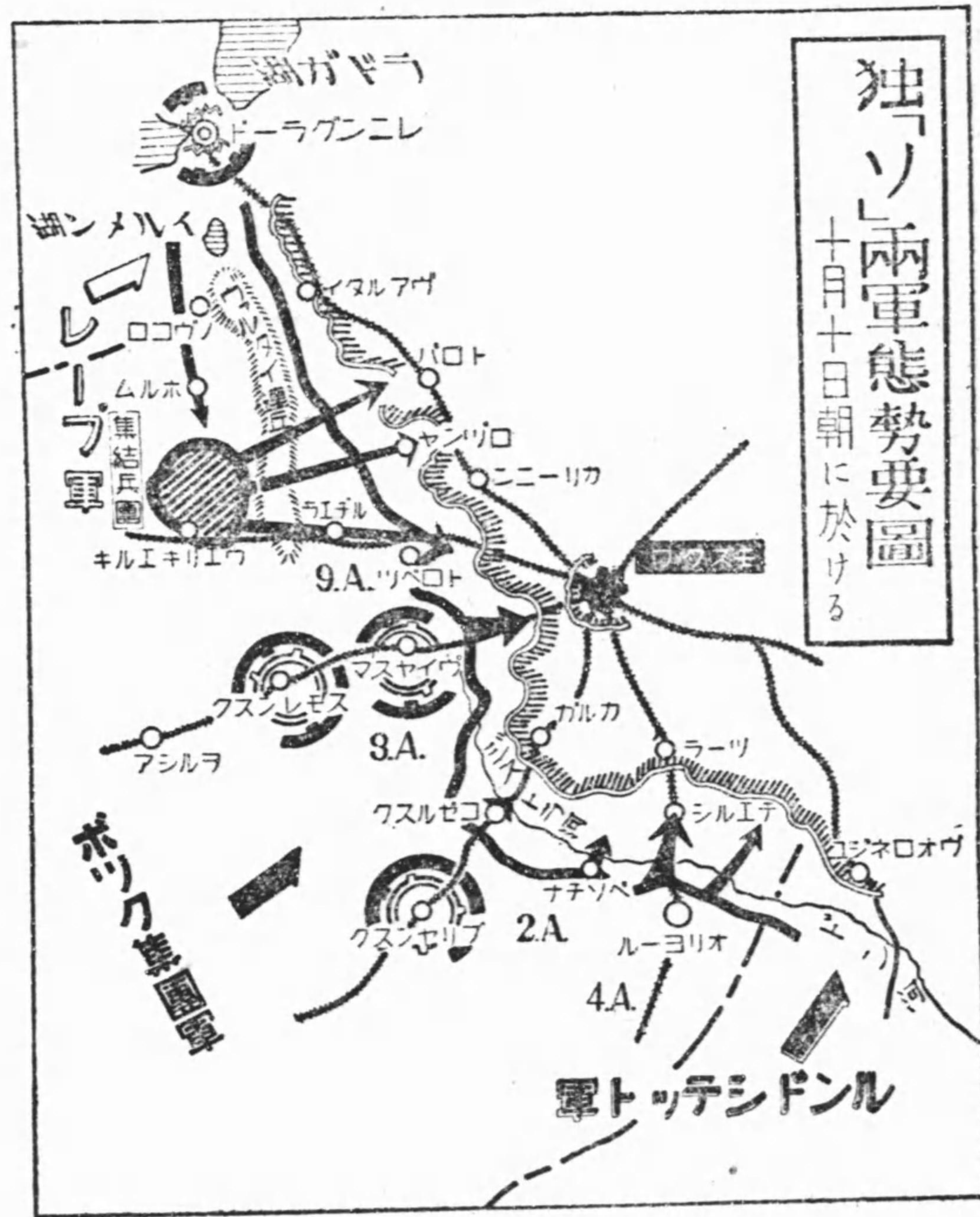
十月十日朝までの獨ソ兩軍の戦闘態勢は次の通りであつた。

戦線の總延長九百六十キロ、ヴィヤズマ、ブリヤンスク、マヴボリの各地區では、ソ聯軍約七十ヶ師團を包圍して袋の中の鼠となし、兩軍入り亂れて血みどろの大決戦を行ひつゝあると共に、他方獨軍はレニングラード方面にあるレープ集團軍の一部兵團を續々南下せしめ、ヴァルダイ高地を目指して殺到せしめ、ノヴゴロド―ホルム―ヴェリキエルキ道を急進せしめて、ヴェリキエルキ附近に移動集結した。九日にはモスクワ北側地區に進出せしむる目的を以て、トロバ、ロツンヤ、トロベツの各地點に進撃し、併せてヴィヤズマ戦線地區の獨友軍の包圍殲滅戦に協力せしめた。(要圖参照)

又右方ブリヤンスク戦線では、獨軍は莫大なる犠牲をいとはず、嵐の如く進撃をつゞけて、十日までにジストラ河の線コゼルスク(カルガ、ブリヤンスクの中間)附近に達し、南方からモスクワを衝く態勢をとり、更に一部隊はブリヤンスク北方百キロのペソチナ附近に進出し、右翼第四軍はオリョールを攻略すると共に、直ちに北方に轉じてモスクワを目指しチェルシを陥れ、ひし／＼と北、西南部から赤軍防禦陣地を突破し赤都に怒濤の如く猛進を續行した。(要圖参照)

独ソ兩軍態勢要圖

十月十日朝に於ける



これに對しソ聯軍はチモシエンコ元帥の總指揮で、約二百萬の赤軍精銳をもつて死にもの狂ひの防戦と反撃に努めた。

特にオリヨール地區では、獨軍がグルーホフ地區を突破前進するに當つて、ソ聯軍の頑強な抵抗に遭ひ、一時獨軍の攻略企圖を挫折し攻撃を頓挫せしめた。そこで獨軍は新に優勢な戦力を増加しソ軍に強壓を加へると共に、ソ軍防備の比較的薄弱なオリヨール方面に向つて攻撃の重點を轉ぜしめた。この方面では獨の戦車隊はソ軍砲兵隊の猛撃と、空軍の空襲によつて甚しく其の進路を阻まれたが遂に獨軍の強壓に堪へずオリヨールを撤退した。ソ聯軍は執拗にも、獨軍機械化部隊が北方に向けて進攻せんとするのを見て、ソ軍戦車隊は機に乗じて反撃に出で壯烈な戦車戦を展開し一時其の北進を喰ひ止めたが、戦局はソ聯軍に不利となり逐次後退したのであつた。

かくて獨逸軍の攻撃力は、全線に互つて赤軍防禦線を壓倒し、深く其の後方陣地に擴大し、恰も一年前のフランス戦線で佛軍が全面的崩壊に陥る直前、獨軍がエーヌ河の防備線を突破した當時の状態を髣髴たらしむるものがあり、今又赤軍としては既に全體としての統制力を失ひ、その交戦力の總體的喪失も蓋し甚大であつたと推察せられる。

モスクワ新包圍鐵環ここに完遂す

ヴィヤズマ戦線に参加した獨軍一武官は次の如く発表した。

「ところでこれは後で判かったことだが、獨逸中央軍團が進撃開始の一日前に其の左右兩翼にあつた友軍部隊は、既に攻撃を開始してゐたのだつた。我が友軍は機甲師團掩護の下に敵の全線に幅広い楔を打ちこみ、更に敵陣地の後方へ深く突入してゐたのである。

この戦況に接した時我が軍團は今や新たな尤大な包圍鐵環が次第に形成されつゝあること、我が部隊の攻撃が無数の火砲と戦車を擁する強力な敵部隊を四方八方から包圍するといふ任務の下に遂行されてゐたことをおぼろげながら理解したので。

かくてソ聯の指揮官として至寶の如く崇敬せられあるチモシエンコ元帥麾下の中央軍は、彼のブ元帥の率ゐるウクライナ方面に於ける南方軍が喫したと同様、ボルシエヴィキの聖都モスクワの前面に於て間もなく包圍殲滅の運命に見舞はれることになつたのである。」と

モスクワ、ラヂオはソ聯軍戦況の悲壯な放送を行ひ國民を激勵

十月十四日モスクワのラヂオ放送はヴィヤズマ周辺の戦況が極度に重大化し、特に獨逸軍がソ聯軍の防禦陣地に楔を打ち込んだ結果、分断せられて孤立化した陣地に據るソ軍が、危機に直面してゐる事實を傳へると共に獨軍は續々として増援部隊によつて補強され、その攻撃は一層強烈となりソ軍と

しては日夜を分たず激戦を展開し、相當大損害を獨軍に與へ辛じて防戦しつゝある旨悲痛な調子で次の如く戦況を発表して全國民を激勵した。

ヴィヤズマ方面に於ては、耳を聳する激戦が晝夜を分たず進行してゐる。我が軍は野蠻極まる敵の攻撃を反撃しつゝ新陣地に據つた。しかしN部隊は十三日夕戦車部隊の増援を得て一大反撃を試み、K地区から獨逸軍を撃退し、敵戦車九十六臺を炎上せしめ、装甲車二十二臺、輸送車二十三臺、迫撃砲二十門を破壊し獨兵千五百を殲滅した。また我が空軍は右戦闘に協力し敵機三機を撃墜したほか更に、ヴィヤズマ方面に集結中の敵自動車隊及機械化部隊に對し有效な反撃を試みた。しかし優勢にして強烈な獨軍の攻撃は一步一步、我がモスクワに肉迫しつゝあることを國民に告げるとともに、激烈な對獨戦に、國民は最後の一人まで頑張つて奮闘し、我が祖國を守る事を望む。

又赤軍機關紙「赤い星」は中部戦線に於けるソ軍の一大反撃を鼓舞激勵すると共に、赤軍の戦闘精神を稱揚し、獨軍の新たな攻勢に對し「勝利か死である」と極言して左の如く論じた。

敵はその全力をこのたびの新攻勢に集中してゐる。敵は占領地からあらゆる兵器、彈藥を持込んで來た。例へば我軍に立向つてゐる敵戦車部隊の中には白、蘭、佛諸國で鹵獲した舊式の輕戦

車まで含まれてゐる。また敵師團中には老人から少年まで發見される。敵は我が陣地を突破せんとしてかく全力を集中してゐる。かかる狂暴なる敵の攻撃に對しては、我が軍は決定的反撃を以て應へなければならぬ。敵の戦車、飛行機、大砲、兵力、豫備軍を赤軍の力を以て粉碎せよ。ここに赤軍が如何なる代償を拂つても果すべき任務がある。今や大なる責務が赤軍兵士、司令官、政治委員に課せられてゐる。我々は祖國の名譽と自由の爲に戦ひ、我々の母や子供、あるひは國民を奴隸化、ドイツ化、破壊から防衛してゐるのである。對ヒトラー戦に於ける我々の法則は勝利か死である。

ヴィヤズマ、ブリヤンスク方面の獨軍戦果

ソ聯軍もよく奮闘激戦したが、結局ヴィヤズマ、ブリヤンスク周邊の包圍戦に於て獨軍の獲た俘虜は三十五萬人、既にキエフ戦以前にソ軍は俘虜百八十萬となつたが、この外に南部方面のブジョンヌイ元帥の令下部隊も約八十萬人俘虜となり、總計すれば約二百九十萬に達する。従つて當時現存されてゐたソ軍兵力は、チモンエンコ軍の殘存主力と、レニングラードの防衛軍が比較的健在であつたやうだ。

要するに獨逸としては「平和の基礎となるべきものである」の意氣込みで、いはゞ野戦としての最

後の決定戦と覺悟してかゝつたらしい。

従つてソ聯軍は、人的、物的の損失は莫大で、獨軍に完全に包圍されたチ元帥軍の主力はソ聯最後の精銳であり又戦闘振りも士氣大に昂がり盲目的に等しい頑強な抵抗をしたが、獨軍に言はしむればこれこそソ軍唯一の強味であり眞價ではあるが、いかにせんこれを統率する指揮官が、完全に支離滅裂となり、甚しきは一時南方司令官ブジョンヌイ元帥すら行方不明を傳へられた程であつて、一國の國防軍としてのソ聯軍は其の價値を失つたのである。

獨軍としてはたゞ盲目的抗戦に出る最後の敵軍主力を殲滅すれば足りる。しかも一ヶ月の作戦準備によつて完全に其の成算を得て自信たつぷりでかゝつたのであつた。即ち九月二日北部のヴァルタイ高地より南部戦線一帯にかけて、南北呼應して軍の大移動を行ひ、レニングラードの包圍とか、キエフ東方の殲滅戦に人目を牽制して置いて、一舉にこの中央軍が大包圍戦を完遂したのであつた。それは左の重要性から、この會戦に最も力こぶを入れたことがわかる。

1 モスクワの前面戦であること

2 ソ聯軍最後の主力を殲滅するか否やにある

この獨軍の大捷は遂にソ軍をして再起絶望の域に第一歩を踏み入らしめた重大なる原因となつたの

である。

二、ヒトラー總統對ソ戰に嚴乎たる所信大獅子吼!!

獨ソ開戦以來前線大本營にあつて三軍の叱咤激勵に寢食を忘れてゐたヒトラー獨總統は、久し振りにベルリンに歸還し、十月三日午後五時（日本時間四日午前一時半）よりベルリンのスポルト・パラストにおいて催された、戦争第三年目の冬季救済運動開會式に出席、數萬の黨員を前に獨ソ開戦以來の沈黙を破つて重大演説を行ひ、對ソ戰の成果報告並に對英その他重要諸問題に關する嚴乎たる所信を披瀝、對ソ冬季戰への新發展を前に國民に向ふべき道を懇へて全獨國民を激勵するところあつた。即ちヒトラー總統は同演説において、

(一) 對ソ戰爭について巷間傳へらるゝ如く對ソ和協説の如きは一顧にも値せざるものであるとしてこれを粉碎、對ソ戰こそはヨーロッパをボルシェヴィキの脅威から救ひ、世界史上今後少くとも一世紀以上持續するであらう新秩序の劃期的發足點であつて、永く後世子孫の感謝を受くる偉大な聖業であると斷じ、(二) 昨秋對英攻撃の時期を延期したのも、背後から來るソ聯の脅威があつたことがその主要原因であつたが、對ソ戰は敵國のデマに拘はらず計畫通り着々進行してをり、特に過去四十

八時間において大々的な新展開を見せ、北はレニングラード、南はウクライナ確保の第一目標は殆ど達成されつゝあり、ソ聯壊滅の日も遠からずとし、(三) 次いで銚をイギリスに轉じ、イギリスがポランド戰終結後から數次に互るドイツの和平提案を拒否したため、ドイツは徹底的にその政策を實現し得ることに至つたことは寧ろ祝福すべきで、今日となつては最早對英和協はあり得ず、運命的にもイギリスに對しては抗爭あるのみと繰返し強調、ヘス前ナチ副總理の出國後、しばしば外國筋に傳へられた臆測を排撃して戦争は長期に互るかも知れぬが、勝算には寸分の搖ぎもないと喝破した。その内對ソ戰に關する要旨次の通り。

ソ聯は何を要求したか

ソ聯が着々とバルト諸國を蠶食しつゝあつた時、ドイツが沈黙を守つてゐたのは、何を意味したか、それはバルト諸國にはドイツ人によつて耕作せられざる一平方マイルの土地もないことを知る者には容易に推定し得た所であらう。ドイツが東部國境の守りを僅か三ヶ師團の兵力に託してゐた時一大人口を擁するソ聯はこの方面に續々と兵力を送り、實に廿二ヶ師團の兵力を集結してゐた。予はドイツ國民の幸福を現在はいふまでもなく、永遠の將來にわたつて守るべき責任を負ふてゐる。従つて予はソ聯に對する防禦手段を講ぜざるを得なくなつた。すでに昨年来予は空

爆を主要攻撃手段とする對英攻勢の最後の落着は、東部國境におけるソ聯侵入の脅威を絶たない限り不可能であると痛感してゐた。一九三九年に予は最大の屈辱を忍んでモスクワに大使を派遣し對ソ諒解を求めた。予はその後對ソ協定の義務を遵守した。それ以來ナチ黨の會合において反ソ的言辭は全く差控へられた、然し不幸にして相手のソ聯側では協定を守らず、その外交政策は全くドイツを裏切るものであつた。小國フィンランドがソ聯の攻撃を受けてゐる時に、ドイツが何故沈黙してゐたかは予の説明をまつまでもなく諸君には明かであらう。然し予は今一度モトロフソ聯外相のベルリン來訪に際してソ聯が要求した問題の全部を明かにしたい。モトロフ氏が持ち出した第一の問題は、予が對ソ屈服後のフィンランドに勸説してソ聯の追加要求を承諾せしめるか否かといふ問題であつたが、予はソ聯側のかゝる要求を承認することは出来なかつた。第二の問題はルマニアに關するもので、予はこれについては約束を守つたが、ルマニアにはアントネスコ首相なる尊敬すべき人物がゐるから予はこれについて後悔する所はない。第三の問題はブルガリアに關するもので、ソ聯はブルガリアに對する駐兵權を要求した。然し予はバルト諸國の先例より見てソ聯のブルガリア駐兵が何を意味するかをよく知つてゐるから、この問題の決定は聯合諸國との協議を必要とするとして稱して承認を與へなかつた。次の問題はソ聯のダーダネルス海峡

支配に關するもので、モロトフソ聯外相は今になつてこの事實を否定してゐるが、予はその時ソ聯側の要求を拒否した。予のみならず何人もソ聯のかゝる態度には非常な注意を要することを知つてゐるから、予は當然の義務としてそれ以後ソ聯側の動靜を注意深く監視し、ソ聯のかゝる措置には對抗措置を以て答へた。かくて遂にソ聯がドイツ攻撃の最初の機會を窺つてゐることに些かも疑ひを容れる餘地のないことが明かになつた。

かくてドイツはソ聯に對し、生死を賭せる一戦を避けることは不可能となり、予にとつて沈黙は二重の苦痛となつた。ドイツ國民は最早や言葉では追ひつかぬ時期といふものはあるものだが、いふことを知つた。併し當時ドイツ國民は東部國境でいかなる事態が発生しかけてゐたかについて知る所なかつたが、併しなほいつの日には喰ふか喰はれるかの凄絶なる死闘を東部國境でやらねばならぬとは覺悟してゐた。そして事態は漸く重大化し、今や數千萬のドイツ同胞の生命を犠牲にせんとする豫感が犇々と切迫するを感じて來た。依つて予は決然機先を制して對ソ戦を先制せんと決意した。予は若し相手が銃を手にするを目にしたなら、即座に先手の一發を放たうと決心した。予はドイツ國民に滿腔の信頼を置き且つ予の良心に基いて、對ソ開戦の決意を固むるに至り、六月廿二日遂に史上未曾有の大戦争は開始されたのである。而して獨ソ開戦以來、一切は

當初の作戰計畫通り着々たる進捗を見て今日に至つてゐる。

對ソ作戰計畫通り

現在まで東部における各作戰は、ポーランド或は對フランス作戰と同様、計畫通りに行はれてゐる。ドイツ將兵の戦闘力は兵器の優秀と相俟ち、戦線においても銃後においても、一體となり一組織となつて動いてゐる。併しわれは唯次の如き一事についてのみ誤謬を犯した。即ちわれは今次大戦において敵性國家は如何に老なる戰鬥準備を行つて來たか、また單にドイツのみならず、全ヨーロッパの破壊を目的とせる危険が如何に巨大なものであつたかにつき、われは關知するところがなかつた。然し予は今、この敵性勢力は既に打倒せりといふことが出来る。ヨーロッパに對する敵性勢力が如何に蓄積されて來たか、不幸にしてそれは大部の人のよく理解するところではなかつた。更に現在においてすら多くの人々はそれに關し全然無知である。予はこゝにドイツ將兵の進んで身を獻げる覺悟と努力に對し深甚の謝意を表す。而してその犠牲は必ずや近き將來において、偉大なる成果をもたらすこととならう。ヨーロッパ全大陸を通じ覺醒の氣風が澎湃として起りつゝあり、北方においてはフィンランドは英雄の國たるに相應しく戦つてゐるではないか、南においても同様ルマニアが戦つてゐる、北氷洋より黒海に至る地域に

おいて彼等はドイツ軍と協力して敵に當つてゐる、イタリア、ハンガリア、スロヴァキア、クロアチア、スペイン、ベルギー、オランダ更にフランスすらも新秩序建設の大戦に参加してゐるではないか。

南北のドイツ兩軍はそれぞれ北はレニングラードに進撃し、南はウクライナを占領するといふ任務を課せられてゐる。これに對し敵は兩方面に新發展を見ないと疑問視してゐる。これに對し、予はそこに何事か起りつゝあることを指摘することが出来るが、しかし何が起りつゝあるかを明示することは出来ない。これは予がドイツ國民を信頼しえないといふためではなく、敵にドイツの計畫を知らせることは斷じて不可能と考へてゐるからである。恐らく將來においてわれの正しかつたことが判るであらう、ドイツ側の發表は信頼するに足りるものである。イギリスの愚劣な新聞が、ドイツ側發表は確認されねばならぬといふ場合、諸君はドイツ側の發表が正に常に確認されつゝあるといつて差支へないのである。何故ならばポーランドを破つたのはわれであつて、その逆ではなく、ノルウェーを支配しつゝあるのはわれであつてイギリスではなく、またクレタ島においてもニュージールランド又はオーストラリア人ではなく、われはドイツ人が支配權を握つてゐることは疑ひないからである。東部戦線においても事情は右と何等の變化

がない、イギリス側によると、われ／＼は獨ソ戰勃發以來三ヶ月の間、敗北に敗北を重ねてゐることになつてゐるが、しかしわれ／＼がスモレンクス東部に進出し、レニングラード及びクリミヤ半島前面に肉薄してゐることは既に周知の事實である。

偉大なるこの獨軍戰果

さて、獨ソ戰が如何に壯大なものであるか、その一端を示す數字を示してみよう。まづわれわれは二百乃至二百五十萬の捕虜を得、また破壊されたものを除き、約二萬二千の砲を鹵獲してゐる。さらに戰車一萬八千臺、飛行機一萬四千五百臺を撃碎し、またイギリス本土の四倍に匹敵する地域を占領してゐるが、わが軍の配備は八百萬キロといふ廣大な戰線に互つてゐる。翻つてソ聯軍隊についてみると、彼等は人間ではなく、獸である。いはゆる労働者の樂園たるソ聯は國民の生活水準を犠牲にした單一な軍需工場と化し去つてゐる。かゝる獸的な敵に對して、わがドイツ軍は以上の如き大戰果を収めたのである。

かゝる戰果を収める爲にはわれ／＼は、實に筆舌に盡し得ぬ努力を行はねばならなかつた。即ち装甲師團、自動車化師團、戰闘機、急降下爆撃機、潜水艦乗組員、山岳部隊及び突撃部隊は勿論のこと、特にドイツ歩兵部隊の努力には特筆すべきものがあつた。歩兵部隊の進撃は正しく電

撃的といふにふさはしいものであつた。史上かくの如く迅速な進撃を示したことは空前のことに屬する。しかも戰線後方において確保された結果も、前線のそれにも劣らず大である。例へば四萬キロのソ聯鐵道は、ドイツ並の軌幅に改められ、占領地には新しい行政組織をつくり、これらを着々ドイツ軍の利用に供しつゝあるのである。われ／＼が廣大な地域において作戦し得るのはわれ／＼の軍需工場、労働者により、無制限に武器、軍需品が供給されるからである。しかもわれ／＼は軍需生産力においてドイツに匹敵する敵國のないことを知つてゐる。諸君は屢々新聞紙上において他の諸國の軍需品生産何十億といふ老老計畫に關する記事を読むであらうが、その場合諸君は予が今諸君に話してゐる事實を想起されたい。しかもわれ／＼は資本を問題としてゐるのではなく、労働力を問題としてゐるのである。かくて他の國はわれ／＼よりも彼等の砲が優秀であり、その戰車の速力が速いことを主張するが、その彼等がこれまでわれ／＼のため常に大敗を喫してゐるではないか。

戰線におけるわが將兵の犠牲の背後には、それ／＼の義務を最高度に果しつゝある國民が控へてゐる。即ち全國民が營々と前線においてのみならず銃後において戰闘に従事してゐるのである。一方國民に對して生存の權利を拒否し、數百萬の犠牲者を出しつゝある資本家的諸國があるかと

思へば、東部には幾百万人の國民を名状すべからざる悲惨状態に陥らせてゐる國家がある。しかるにわれ々の義務は、わが國民社會主義の理想を實現すべく努力する點にのみ存する。わが國において行はれてゐる原則は、ソ聯邦における如く所謂平等の原則ではなく、正義の原則のみである。諸君の犠牲は尠くないであらうが諸君よりもより多くの犠牲を拂ひつゝある人のあることを思はねばならない。若し全ドイツ國民が犠牲により結ばれた共同社會となるならば、運命は將來においてもわれ々の側にあることを希望することが出来るであらう。(朝日新聞所載)

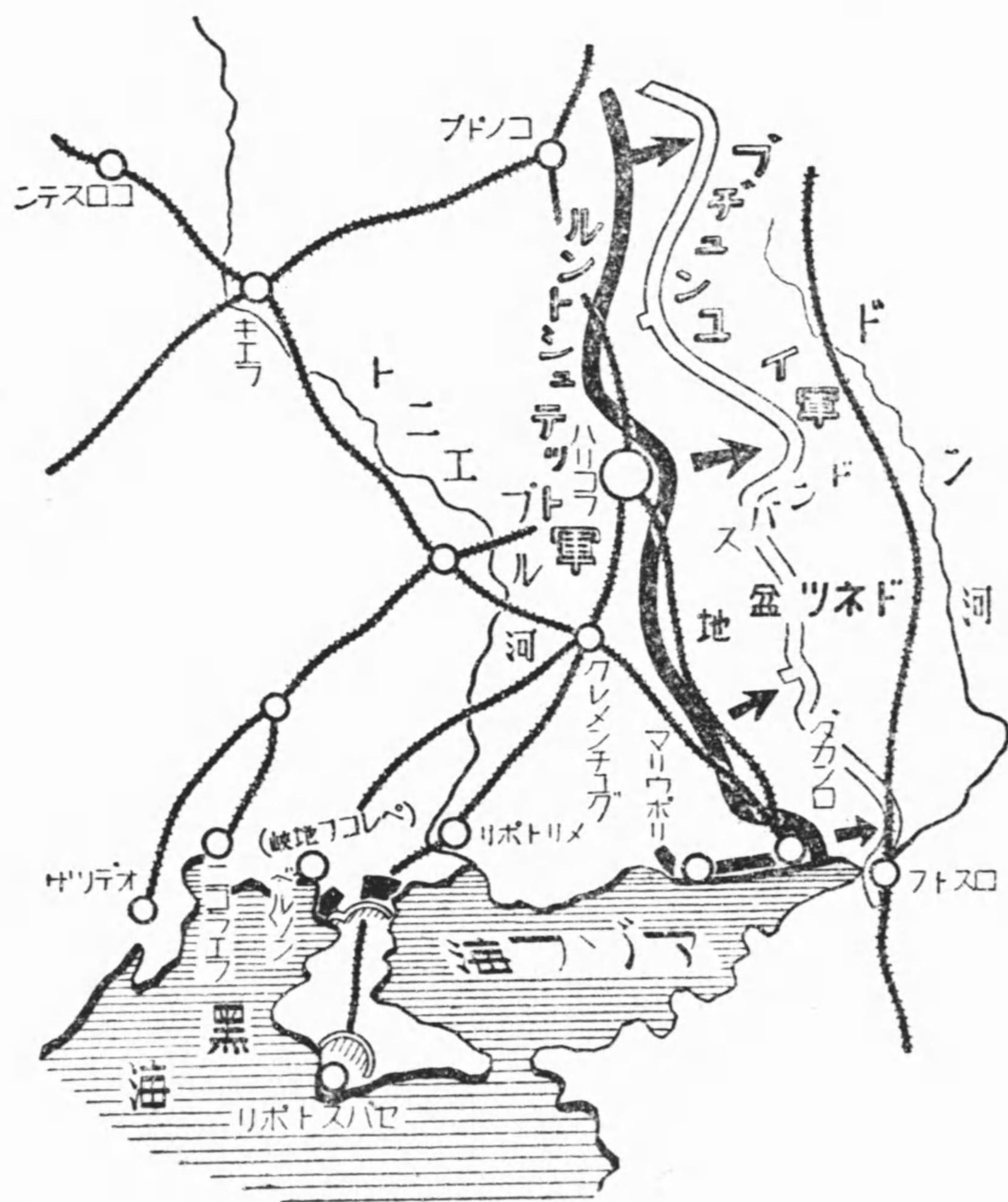
三、獨南部方面軍の戦況と赤軍主力の潰滅

獨軍ドンバス地區を席卷しアゾフ海北岸を制壓

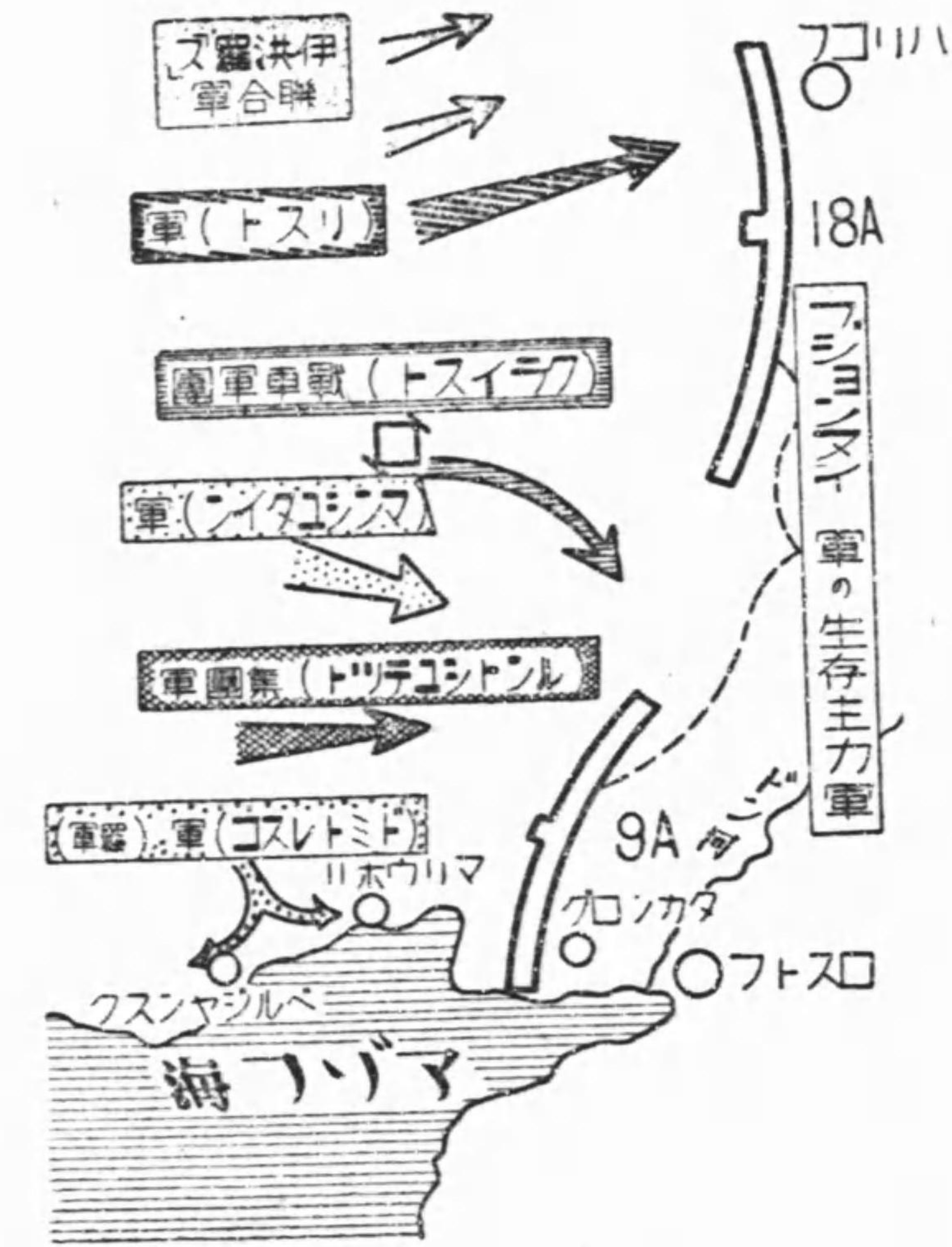
九月下旬から獨軍の大攻勢は南部地區に開始せられた。この地區はドニエプル河以東ドン河まで獨軍を遮る地形上の障碍は殆んどない。したがつて獨軍による急速なドンバス地區の席卷は豫期された。ソ聯としてはこの地方は重要礦物産地の中心地であるだけに、相當頑強な防止と、得意の破壊、焦土化は勿論實行されたのである。

十月上旬ルーマニア首相の指揮するアントネスコ軍は、士氣沮喪して絶えずソ聯軍に壓迫せられる

圖要勢態軍兩ソ獨線戰部南
日四十二月十
(落陥フコリハ)



不利な戦況となり、容易に樂觀を許さない形勢となつたので、獨逸統帥部は斷乎羅軍に代つて新に五十萬の獨逸精銳軍をフォン・リスト將軍に統率せしめてこの方面に増援し、ルンドシュテット元帥軍と協力して、一舉にオデツサ、ドネツ、ハリコフの各戦線に大膽なる總攻撃を一齊に開始した。



ドネツ盆地の鑛業地帯の中心は、なんといつてもロストフ市で、同市はこゝ連日獨逸空軍によつて猛烈に爆撃された。このドン河に沿つた南ロシアの要衝こそ、前大戦にもルーデンドルフ元帥が席卷した所で、獨逸としては是が非でも、まづロストフを占領しさらにスタリノ(地名)を陥落せしめ、全ドネツ工業地帯にある無限の石炭(全ソ聯産額の三分の二)と鐵を其の手に獲得せんとするのは當然の歸結であつたらう。

南部地區に於ける獨逸軍の攻勢部署は概ね上圖の如く推定せられた。

ドネツ盆地攻略の價值とソ聯軍必死の防戦

ドネツ盆地はソ聯にとつては、重工業の生命線で、これを喪ふと否とは爾後の作戰上、軍需補給に重大な影響を與へるのである。故にソ聯としては、たとへ西部ウクライナ地方で惨敗したとはいへ、ブジヨヌイ元帥の指揮する赤軍南方軍唯一の残存部隊である第九、第十八軍を以て必死の防戦に努めたのは蓋し當然の事である。

殊に獨逸軍として重視したのは、この残存赤軍兩軍團がドネツ重工業地帯を防守するのは、ソ聯最後の頼みの綱であつたことと、その障壁さへ突破すれば、ソ聯がドネツ河流域で採れる石炭産出量の殆んど大部を失ひ、その上此附近にある全ソ聯重工業工場の三分一を有しあるこの地區を奪取し得るのであつて、軍需工業上に與へる甚大な打撃であることは明白であるからである。

今一つ獨逸側で重要意義を有してゐるのは、この戦闘で赤軍兩軍團に徹底的潰滅的の打撃を與へたことである。それがためウクライナとコーカサス兩地方のキーポイントをなすドン河口の要衝ロストフ市が、獨逸軍攻撃の前に暴されたことである。

それは獨逸軍がアゾフ沿岸地區を包圍する時、極めて小數の赤軍部隊が東方に脱出した。獨逸はさすがこれに尾撃(すぐあとからついて行く攻撃法)してソ聯軍と共にマリウホリから其の東方のタガ

ンログの敵陣地帯に直進し得たのである。そして眼前にロストフ市を瞰制した。この尾撃戦こそは眞に神速、あつといふまに成功したのであつた。

ウクライナ最後の據點、ハリコフの陥落

獨軍竝に聯合軍（伊、羅、洪）の樞軸軍は過去數週間來の超人的な猛進撃によつて、ドネツ盆地からソ聯軍を完全に掃蕩すべき最後の作戰準備を完了し、ハリコフ市附近に對する攻撃は愈々猛烈を極め、成し得れば一舉に同市附近のソ聯軍を撃滅掃蕩し、ドネツ河及ロストフ河に沿つてゾフ高地に急進し、ソ聯軍退路の大障碍地區に於て、捕捉殲滅せんと企圖してゐたことは、地形上當然判斷し得る所であつたが、果せるかな、獨軍がハリコフを攻略するや、同方面の獨逸軍はドン河流域に向け怒濤の如く殺到し、ソ軍の退路に迂回して、死命を制し一兵も残さず殲滅せんとする態勢をとり、戦局は愈々最高潮に達した。

十月二十六日獨軍當局の言明によれば、空軍はドン河、ドネツ河兩河川地區に於て十數縱隊となり東方に向ひ退却中の赤軍部隊や、敵要塞施設に虱つぶしに猛爆を敢行したことを發表したが、かくの如くドン、ドネツ河間の組織的猛爆を發表し得るに至つたことは、その爆撃がすでに一應所期の効果を擧げたことを意味したもので、同時にこのことは又同方面ソ聯軍主力がドネツ盆地を放棄してドン

河方面に撤退したことを意味したものであつた。

突如、ソ聯南部方面軍司令官の更迭事情

獨軍が潮の如く押し寄せてゐる最中、すなはち十月二十四日、ソ聯政府は、スターリンが最も信任厚く獨軍さへも稱讃を惜しまぬ赤軍の至寶ともいふべき、中部方面軍司令官チモシエンコ元帥を、突如ソ聯として作戰上重大な南部戦線の赤軍總司令官に任命し、ブジョンヌイ元帥を免職して交代せしめ、ドネツ工業地帯目指して破竹の如く進撃する獨軍を、コーカサスの關門たるロストフ市とドン河の線で喰ひ止め、農、工の一大寶庫たるウクライナ、コーカサスを保持せんとするためであることが明らかになつた。

又新銳のジューコフ大將をして、最後の複廓陣地として要塞化したモスクワの防衛死守に當らしめ新南部總司令官となつたチモシエンコ元帥と相策應して、あくまで赤軍の南北兩戦線の連絡を保持し反撃を繼續する一方にはキエフ附近の戦線で疲れ切つたものと南部司令官ブジョンヌイ元帥と、レニングラードで孤軍奮闘よく獨軍の猛攻に耐へつゝある北部方面軍司令官ウオロシロフ元帥の憔悴を醫するため、前線を退かしめ新に動員した大豫備軍の編成訓練に當らしめることにして赤軍の再建に必死となつた。

即ち當時の戦局から観れば、餘りにも獨軍の進撃は急潮瀑流の勢を示し、所詮歐露に踏み止まることも出来ぬものと覺悟したソ聯軍としては、ヴォルガ河の線に防禦線を構築するのみでは十分でなく、或はノヴォシビリスク、クズネスク（いづれもウラル東側地區）までも後退し、そこに強固なる防衛陣地帯を施設すると共に、戦線背後に於ける食糧、軍需諸品の補給組織を革新しソ聯軍の弱點を強化せんと企だてた爲であつたであらう。

かくて十月二十四日即ち軍司令官交迭發表の日に奇しくもウクライナの首都ハリコフは陥落した。

ハリコフ市の陥落によつて軍事、經濟上から見たソ聯の損失

ハリコフはウクライナ共和國の首府、ドネツ河の支流ウダ川に注ぐロバンとハリコフ川の合流點に位置し、人口約八十五萬、ウクライナ共和國の政治機關及び共產黨支部、赤軍々管區司令部の所在地であつて、またウクライナ商工業の中心地である。附近にドネツ炭田、クリヴォイ・ローク等の鑛業地を控へてゐるので、ソ聯重工業の基地となつてゐる。鐵道、航空路の重要地點であるとともに、ウクライナ穀物の集散地である。工場として機關車、自動車、農具その他の機械工場、國營發電所もあり、ソ聯第一の冶金工業の基地ドンバスは、ハリコフ市の東南近くにある。鹽の産地で有名なスウアンスク、アルテモウスクの小都市も其の附近にあり、更に水銀産地として世界的に名あるキトウカコ

ンスタンチノフカ、ルガレスク、スターリなどの工業都市が連なり、鑛業、冶金工業、金屬工業の中樞地である。

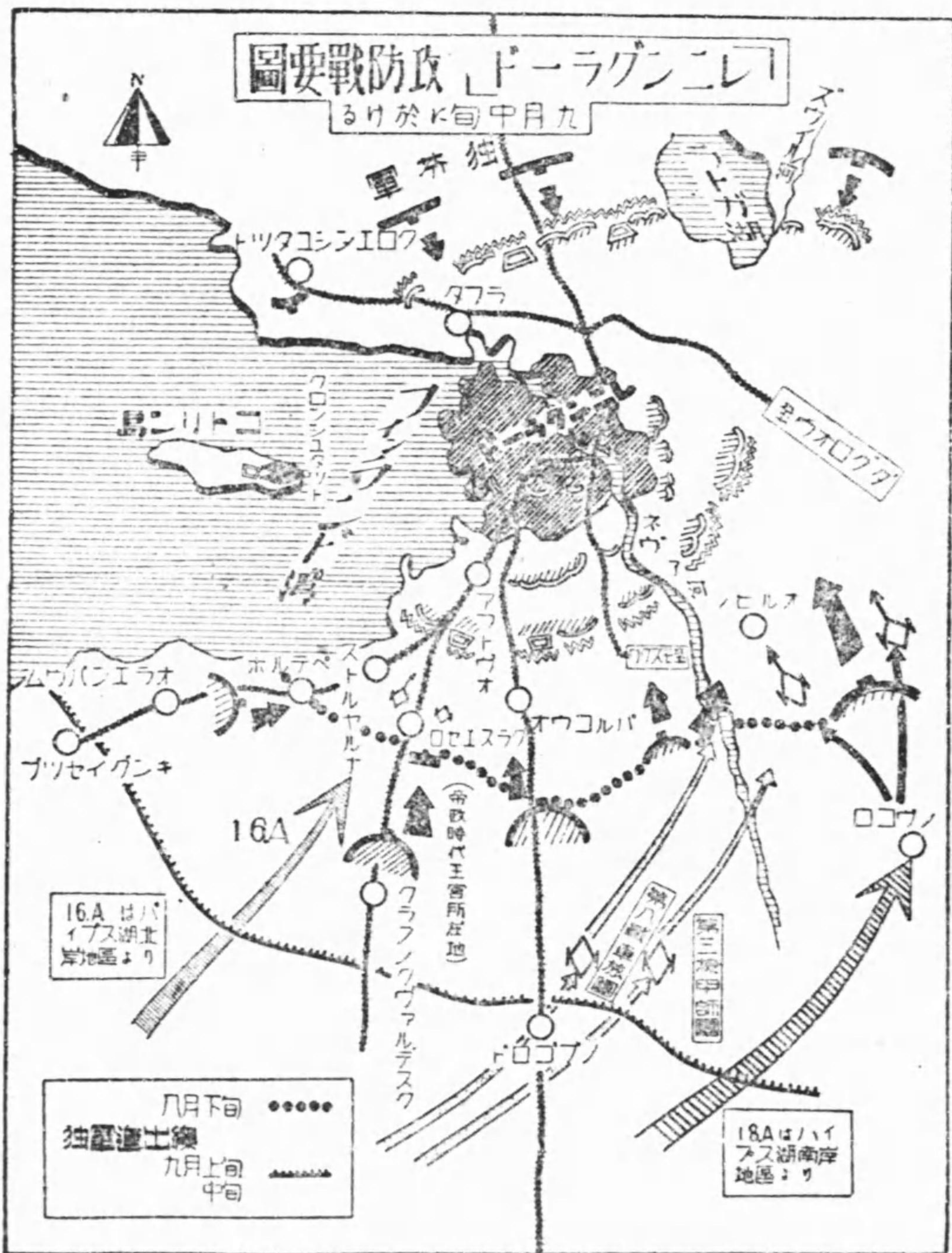
ハリコフの重要地位は、これらの各種重工業基地を控へてゐること、穀物寶庫たるウクライナ・コルホーズの直接監督機關、農具、機械類の供給地でもある點である。それ故にその喪失はソ聯の抗戦力に大打撃であつたことは明白なる事實である。

時恰もソ聯各地の戦線は、寒風吹きすさび、歐露一帶の天地は白がいくの大雪原と化し、大地にある凡てのものは雪に埋もれたのであつた。

四、北部戦線レニングラードの攻圍戦

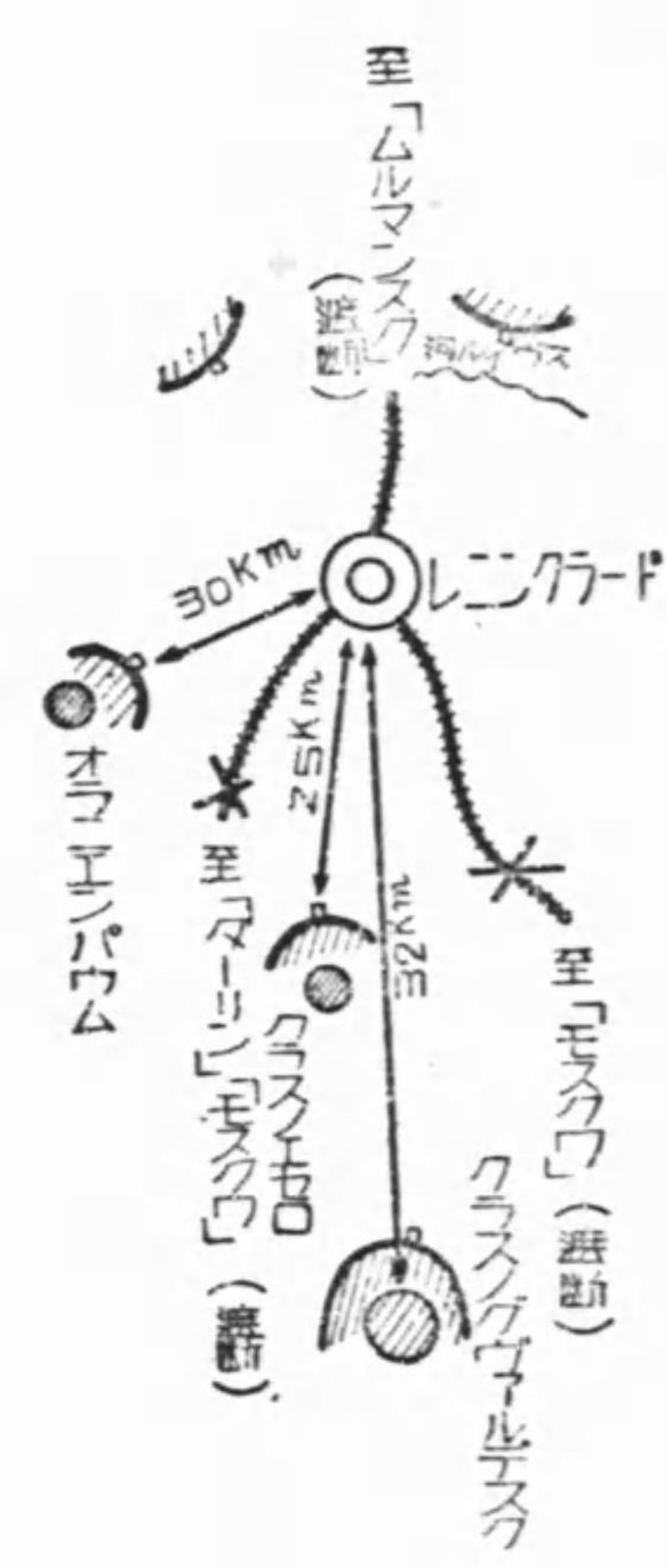
レニングラード市の攻防戦は高潮に達し、獨ソ全軍必死の激戦

獨逸レーブ集團軍の主力兵團である第十六軍並に第十八軍とヘーブナウ中將の指揮する装甲機械化集團は、沿バルト海のリトワニア、ラトビア、エストニアを席卷した。第十六軍はパイプス湖北岸地區から、第十八軍は同湖南岸地區から、装甲集團の第四戦車軍團並に第三十六機甲師團はブスコフ附近から夫々當面のスターリン線を突破し、又第三機甲師團と第八戦車師團からなる第二機甲軍團はノ



ヴゴロドに進入し、一意レニングラード市に肉迫した。(要圖参照)八月下旬には右翼はノヴゴロドから左翼はバルト沿岸のキングセツプ市の線に達し(レ市より百八十乃至百三十キロ)、左進撃軍である第十六軍は、専らレ市攻略に任じ、右進撃軍である第十八軍並に装甲機械化集團主力は、明らかに典型的な包圍殲滅戦を展開しつゝ、レ市とモスクワを結ぶ鐵道遮斷の企圖に向つて驀進した。

かくて九月上旬の戦況では、獨逸軍がひた押しに迫るレ市包圍攻撃は逐次その包圍圈を壓縮し、ソ軍としても極力必死の反撃を繰りかへし、中にも大規模に斷行されたのは、九月二十二、二十三の兩日に互り北部司令官ウオロシロフ將軍自ら最前線に出動して、麾下ソ軍の一兵團を激勵叱咤し、レ市南側濕地帯の天然障碍を利用し、獨軍に對し奇襲的に猛反撃を行つた。これに對し獨軍も戦車、爆撃機、戦闘機を全部出動せしめ、彼我の間に熾烈なる戦闘を繰返し約二十四時間継続された。



其の結果獨軍はソ軍必死の反撃を撃退したのみならず、その機を利用し突撃先鋒部隊は快速邁進して、帝政ロシア時代夏季王宮の存在したクラスノエセロ市近郊に突進し、レ市を距る約二十五キロ約六里の地點を確保し、

續いて獨軍主力は右圖のやうな態勢で進撃した。

かくて獨軍のレ市包圍作戰は完遂された

獨軍のレ市に對する本攻撃は八月下旬から開始され、九月上旬には前述のやうにレ市防衛陣地としての第一線であるクラスノエ・セロ市(赤い村)並にネヴァ河畔の要衝オルピノ市附近に達し、更にバルト海沿岸のペテルホフを占め、愈々本格的にレ市の喉頭を扼した。これが爲レ市の死守を誓ふ百萬に近いソ聯陸、海軍、市民義勇兵の混成兵團は、獨逸包圍軍の鐵鉗の中に全く自由を失つた状態となつた。

今ヤソ聯北方軍として残された道は、獨逸の一大包圍網を突破するか、さもなければレ市と運命を共にする籠城戰である。

突破作戦を採らんとすれば、ラドカ湖畔傳ひに東方に血路を開いて總退却する一大勇猛心を以てする死戰苦闘の大逆襲戰あるのみである。然しながらこれは容易のことではない。のみならず頼みにするバルチックソ聯艦隊主力(三萬三千トン四隻)は其の根據地クロンシュタット軍港並にレ市灣に追ひ込められ、大部分は連日獨逸空軍の假借なき猛爆と、獨逸兩海岸の高速魚雷艇の攻撃に曝され、その上芬軍はキヴェンナツバを占據して、クロンシュタットを指呼の間に望むに至つて、レ市防衛の最大

要衝であるクロンシュタット市が獨軍長射程砲の射程圏内に置かれる危機に直面したことは、たしかに一大打撃を蒙つたわけであつた。

獨逸軍としてはレ市包圍状態から或は、ソ軍がラドカ湖東方に向つて血路を開らく逆襲戰あることを豫期して、逐次その方面のソ軍を掃蕩驅逐しつゝ要地を占據し、いかなる大逆襲にも即時對應し得る準備態勢を整へたのである。

外地との鐵路連絡を斷たれ、四周悉く獨逸軍に包圍されたレ市は革命搖籃の地、政治、經濟、軍事上の要地として、近代的文化の都、市民の知識程度も全ロシア第一で、軍民一體の抗戰はこの苦境にありながらよく頑張り、八ヶ月の長き辛慘たる戰塵にまみれ、赫々たる闘志、克己堅忍の意志を磐石の如く持ちつゝあるのは、たしかにロシア人の性格を遺憾なく發揮したものといへよう。

レ市の郊外戰(九月中旬)

九月七日前後から開始した獨軍のレ市攻撃は、愈々本格的となり、空軍は連日レ市の軍事施設を猛爆し、殊に八日ソ聯密集兵團がラドカ湖南方地區に集結してゐるのを發見し、直ちに數百機の重、輕爆撃機は、急降下爆撃によつて、赤軍の重砲、要塞等多數を風潰しに破壊し、其の附近に集結してゐた部隊を四散せしめた。

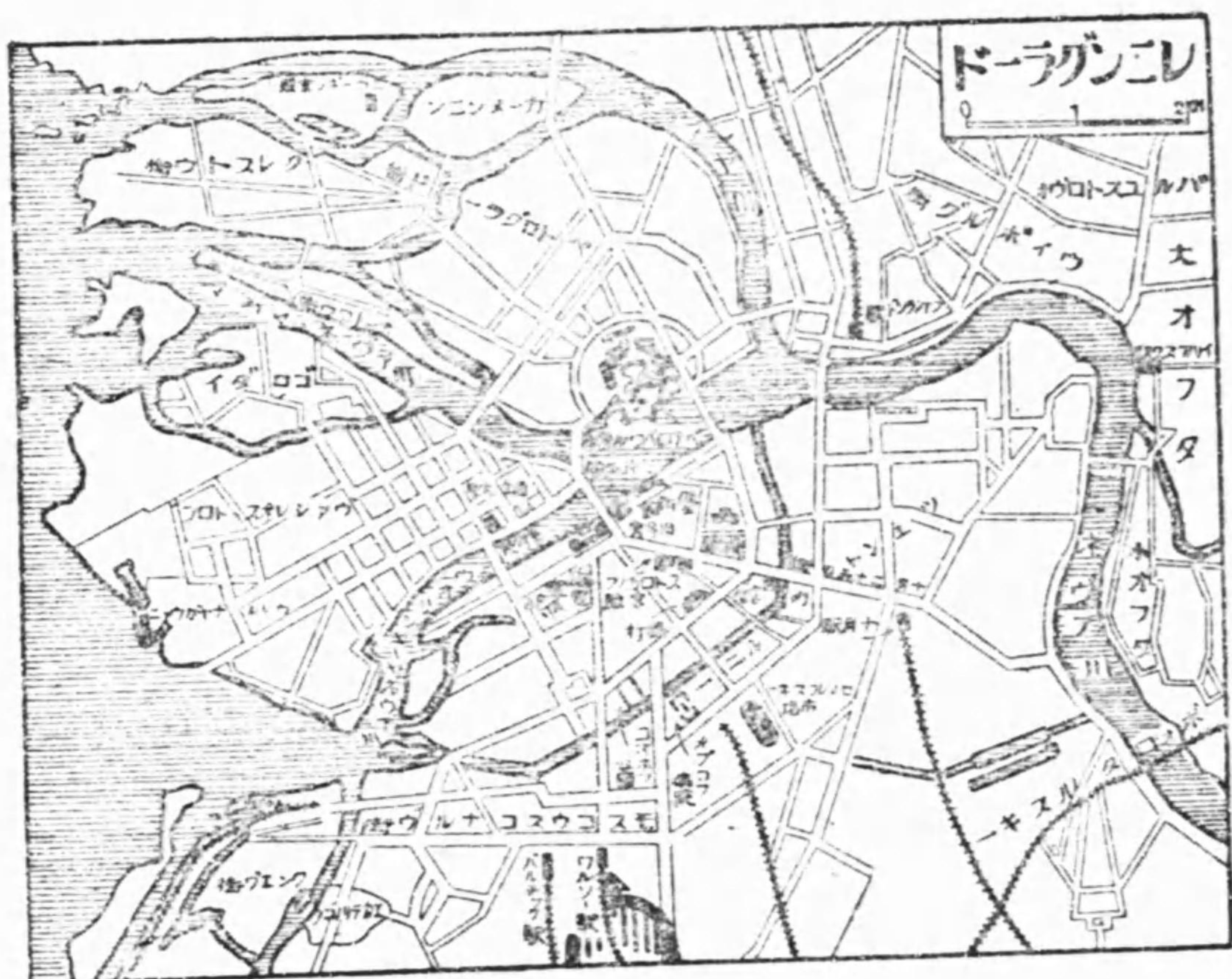
他方レ市郊外の各防衛陣地に對しては、各方面共強襲を行ひ、ソ聯歩兵及び砲兵部隊の頑強なる抵抗を排除し一步々々近迫した。

なにしろソ聯陣地は村落とか、森林等に據つて其の前面は至るところに地雷を埋没して死守してゐるため、獨軍は地雷障礙排除の爲め多大の危険と困難を冒し、獨逸一軍團だけでも六月一日中に破壊した地雷の数は約一千個に上るに至つた。其の上地形は攻者に頗る不利な一望の平野、加ふるに道路は至るところ破壊してあるため前進の如くならず、獨軍としては惡戰苦闘しつゝも不屈不撓の攻撃をなし、これに對する死守奮迅の防戦は各所に火花を散らして勝敗容易に決せず、九月十日頃は其の最高潮に達した。

獨軍の損害も相當大で、九月七日には飛行機だけでもソ軍の發表するのでは三百機も撃墜されてゐる。この時獨軍は珍らしくも久し振りに落下傘部隊を空輸して、六日の夜赤軍陣地の後方に落下せしめ、後方攪亂に努めた。かくて彼我の激戦は連日に互り行はれたが、遂に獨軍の挺進部隊はレ市南端ワルソー驛の一角に迫つた。

煉獄の苦に喘ぎかけたレニングラード市

獨逸軍の精強を誇るナチの機械力と組織力の壓迫は、遂にソ聯の死守する「歴史の都」レニングラ



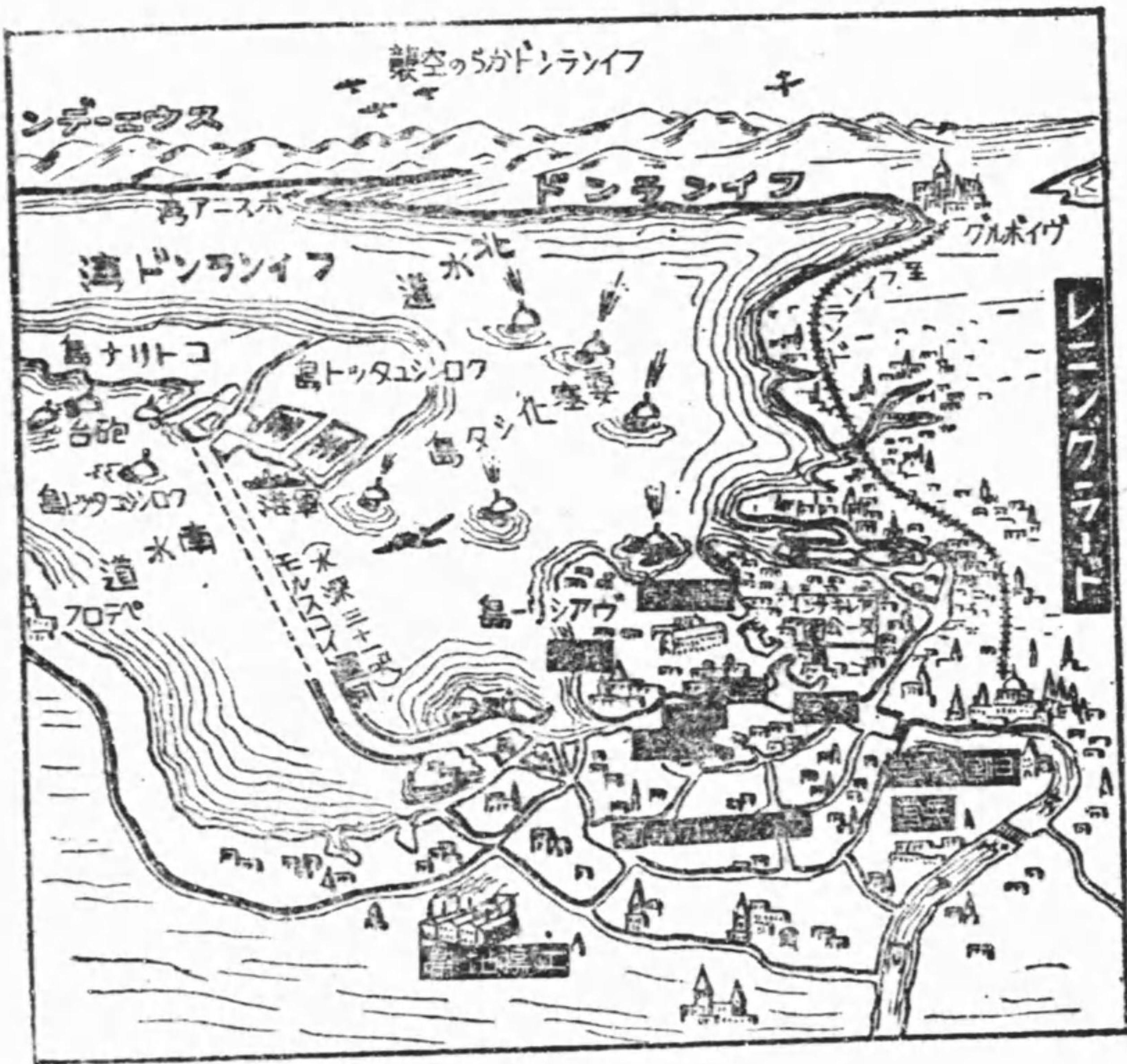
ードの一角に突入した。ヒ總統はこの古都が廢墟となることを恐れて、幾度か城下の盟を懲息したが、ウオロシロフ元帥は「市民の最後の一人まで血で守れ」と怒號した。その怒號も三百萬市民最後の抗戦もつひに空しく、九月上旬來獨逸軍の鐵火の攻撃に曝され、連日連夜の脅威に全く死相を呈し、北から南から間斷なく、降りそゞぐ巨弾の唸り、空を蔽ふ獨逸爆撃機の洗禮、地には潮のやうな機甲部隊の轟きがつづいた。

殊に九月五日頃からネヴァ河とスターリン運河には、獨の爆撃が間斷なく繰り返され、フィンランド灣とラドカ湖方面との交通は遮斷され、南下したマンネルハイム元帥の指揮

する芬軍が、オネガ湖とラドカ湖の中間（ロデノエ、ボレ附近）で連絡して握手したうへ、シユリユツセルブルグを占領したので、レ市の死命は全く制せられてしまった。ムルマンスク鐵道もモスクワ鐵道も中斷され、バルト海の口を塞がれてしまった以上、レ市を死守する赤軍は、全く孤軍奮闘、袋の中の鼠同様になつた、かくなる上は殲滅か投降するか残る道はその二つしかなかつた。

レ市に頑張る赤軍總司令官ウ元帥、海軍人民委員のグズネツオフ、それにスターリンの後継者といはれる市黨委員會書記のジユダノフ、軍管區司令官ボポフ中將等の首腦者たちは、あくまでレ市と運命を共にし、ソ聯の意氣を堅持すべく鐵石心を持つて軍隊並に市民を激勵した。そもくレ市附近に當時集結したソ聯の防衛軍は、バルト沿海國地方、すなはちエストニアのタリンで大敗を喫した敗殘部隊、芬軍にやつ、けられて逃げこんだ軍隊に、開戦後大慌てに慌て、編成した新編成師團と、老幼婦女子もまじる市民義勇軍に、バルト艦隊から上陸せしめた海兵が、レ軍管區正規軍に参加して兵力は五十萬とか百萬とか號してゐたが、なにしろ素質からいへば劣等で、本腰をいれて立ちあがつてゐる獨軍に比ぶれば到底その敵ではなかつた。それにも拘はらず、死守抗戰約八ヶ月、今日尙ほ頑として健在してゐる、よくも頑張つたものである。殊に老幼婦女子の抗戰、不屈の精神力には敬服する外はない。

レニグランドの風景圖



九月は北ロシア地方の天候頗る悪く、従つて道路は泥濘で、獨軍の重裝備軍隊は進退谷まつて、身動きも出来ぬことになつたのも、一つはレ市防衛力に與へた天與の幸であつたのであらう。

さて一角破れたレ市は九月中旬頃にはどんな包圍態勢に陥ち入つてあつたか？

秋とはいへ、バルト北方の夜は早くも冬の冷寒で、レ市附近の重要軍事施設は、獨軍急降下爆撃によつて火災を起し、到るところ焔々と火を吹き、村落や農園はソ軍自ら放火し